

503  
179



始





納

本

敵を愛せ

野口米次郎著

玄文社版



503-179



1922

版社文玄





## 序に代へて

時たま本屋へ立寄つて幾百幾千と本が軍隊式に整列してゐるのを見ますと、急に「本は眞平御免だ」といふ一種の嫌惡の情が、むらむらと雲の様に涌いて來ます。軍隊式に整列した本の様子、非人情で、如何にも悲しき見世物です。私は何か本を一冊買つて見ませうと思つて立寄つた場合でも、いつも買ふ丈けの大膽を缺いてゐまして、店番の人に向つて狂人か何かのやうに妙に笑つて、本屋を立去ります。その妙にニヤリと笑ふのが（如何にも不自然な笑と見えませう）私の心の不平と不安なのです。そりや時には私でも、私の東洋的の怯懦を感ず世界に鳴り響いた名前を脊負つた西洋の大家の本を買ふことが無いぢや有りません。しかしその買つた本を、家へ持歸つたが最後、頁を切るでも無ければ勿論讀みもしません、其本を買つたといふ事實其事が、已に私の興味の半分を満たしたので、これ以上私の好奇心はついぞ扇立てられたことが有りません。買つた本を、書齋の南の窓の風でカーテンが揺れる所の小机の上か、薄暗い影が足の無いゴーストのやうに集つて來る客



間の床間(私の家には外の部屋より金のかかった客間があるのですが、ついぞ其中へ入つたことも無ければ又客を其内で接見したことも無いのです)の上に、飾つて置くわけなので、それぢや私には讀書慾が無いのでせうか。決して決して讀書慾大にこれ有りです。その多大な讀書慾が私をして多くの場合では、私に買った本を開かせ無いのです。讀んで本に失望するといふことが辛いから私は本を嫌ふのです。然し友人を朝九時か十時頃訪問します、其友人はまだ寝てゐます、(私の友人の多くは朝寝坊ばかりです)すぐ書齋へ通される、私は客間で待たされるやうな所へは滅多に出掛けません、で、手當り次第何か一冊開けて見て一頁か二頁讀んで見る、如何にも愉快に動かされることがあるのです。主人の出で來ぬ間に盜讀む本はいつも私を失望させません。又それ以上に愉快なのは、氣心のよく知れた友人と何の目的も無しに、べちやべちや喋つて居る傍、兩手で本を無造作に讀むとも無しに開けて、一字二字と或は一行二行と、飛び飛びに拾讀みした時なのです。其時の私の心の満足つたら有りません。

一時は私の愛讀の書物であつた「エリアの評論」も、今ぢや私は餘り顧み無いです。ラム先生が私をして遠ざからしめた最大理由は、思ふに、先生が亂用する文中のダツシニと括弧

とが氣に入らぬからです。ヘーズリット先生、先生は如何にも多辯です、私は其多辯に厭きました。私がエマソン先生に弟子の贅を取らぬのは、私は冷やかな知識を得たく無い、詰り年を取ら無いと決心した私の頑固の故です。カーライル先生に對しますと(私は敢て斷言します)私は食慾を減するやうに思ひます。確に私はカ先生を讀みますと、批評せずには一町の道路も歩けませんし、又一杯の米の飯も食ふことが出來ぬ不幸の身となり終ります。私はヘリツク先生の短曲を時々讀みますが、いつも人世を悲觀して來ます、其理由は外では有りません、先生が年に似合はぬ氣の若い浮氣者で、始終メイキングの痴笑で自分の教區の會堂(先生はレクターでした)を騒がしたのが馬鹿馬鹿しく感ぜられるからです。嗚呼年若く死んだ詩人キーツ(キーツ先生とはどうしても云へません)こそ浦山敷いんです。ヘーズリット先生(ベラベラ喋る裡にも時時正直な告白を遣ります)でした、「キーツの詩、特にイーブ・ラブ・セント・アグネスを讀むと、自分が最早や若く無いのを残念に思ふ」と云ひましたが、白髪はヘーズリット先生ばかりの専有ぢや有りません。我我は老年、いや中年まで呪ひたいものです。私がキーツを讀むのを恐れるのは、青年時代の幽霊が、無邪氣である丈け更に怖ろしい顔を出して、目下私の疲勞した、別に悲觀はして居



らぬけれども何處までも散文化した状態を見て哄笑一番しやすまいかと思ふからです。古い句だが青春不再來です。私は私の青年時代を充分に生活してそれを味つたかといふ一問題には適當に返答が出来ぬのです。残念です。天下の青年諸士、ヘーズリット先生の句にある如く「文字、文字、文字」の影ばかり追つて居る連中は、須く鳥歌ひ花笑ふ野原へ來給へ、さうして人生は歡樂を極め時には叛逆し常に興奮して笑ひ且つ泣くにあると合點し給へ、若し諸君が笑ひ泣き得る時に笑ひもせず泣きもしなかつたらば、私は斷言します、諸君は再び笑ひ泣き得る時期を迎へることが出来ぬ。これは私が諸君に對する眞心からの忠告であります。

先日一杯の玉露が朝ばらから、私をしてなんだか回想的ならしめました。所で私は机の上に紙を延べて、青年時代の追想録を書き初めましたが、第三頁目（文章で此三頁といふ所が思想の變化する面白い場所なのです）で、突然筆を止めて、「なんだ馬鹿馬鹿しい、未だ若い身空で追想録なんて、止めよ止めよ、インキと紙の損のみだ、過去を書いて卑劣極まる涙一滴たらしめて何の益がある、書くなら將來を論じたら如何なものだ！」と叫びました。私の友人で倫敦に居る畫家が、「倫敦に於ける日本畫家」を書いたですが、十年後或は

二十年後或は三十年後に書いても彼の畫家たる名譽は少しも傷けられ無い。私の友人の書いたやうな興味澤山な本を書くには批評の武裝を解かせるに足る丈けの正直を持つて居らねば出来ぬ藝なんです。然し全く書かずに平氣で居るとなるには、非常な人格を供へて初めて出来る事なのです。誰でも、自分の過去を語出した時は、假令其れが無邪氣で單純な經驗談でも、嚴肅な文藝の定規に掛けると、其人が俗に成つた時だと云へます。英國や米國では、追想録は中中流行物なのです、流行するといふ事が英米兩國が平凡（必ずしも魯鈍ぢや無いにしても）な證據です。私はさう云ふからとて別に皮肉を語るのぢや有りません。アングロ・サクソンの平凡といふ問題では、ワイルドやシヨウ一流の主我主義其物が既に平凡を倒様にしたものだと見ても大差が有りますまい。實際、シヨウやワイルドの極言力説の價値は何處に在ります、寔に詰らぬものでありませう。彼等が常に理性の權能と誇るものでも、私に取つては其反對にしか受取れ無い場合が多いのです。如何に理性の力でも、人情や慈愛の方向を變轉させることの出来ぬのが證據だらうぢや無いか。理性的の詩人、劇作家或は評論家で私に興味を興へる所は、寧ろ彼等の失敗の跡にあるのです。人間の眞實な主我主義を愛し敬するのですから、勿論私は書物の主我主義に賛成する其



理由の一は、主我的書物に限つて最も自然に近い書物であるからです。森林の内に踏込んで、蝸牛のやうに外部の障害を立切る、そこで初めて如何に草が生長し鳥が飛び月が登るかを眞實に語り得るのです。然る可き距離を持つてこそ、君は實際なる人生問題の遠近を考へることが出来るです。又君は孤獨と沈黙の優しい親切を了解することが出来るのです。私は詩人ウキトマンの研究者といふ看板は擧げて居ませぬ、然し私はウキトマンを單に主我主義の四字を以て論じ去りたく無い。そりや時にはまるで寄席藝人か大道講釋師然たる露骨な痴狂を演じます、彼の心は正直の軌道を離れません。ウキトマンを讀んで居るとこんな句に出遇ふことがある。

“Okonee, Kooan, Ottawa, Monongohala, Sank,

Natchez, Chatahochee, Kagneta Oronoco,

Wabash, Miami, Saginaw, Chippewa, Oshkosh, Walla-Walla.”

奇體な亞米利加インディアンの名前を續け様に讀まされると、私は二年前逝去された老先生ミラーを想起します。老先生は客でも來ると愛嬌の爲とて、手品を使つて雨を降らせると云ひ出す、して自分の手をそつと上の方で屋根裏へ延ばして水道のハイプの螺旋を廻は

して、口では大聲で何だか分らぬことを唸りましたが、其言葉がウキトマン先生の Okonee, Kooan, Ottawa に似て居りましたのです。ウキトマンとミラーは互に一種の共通點を持つてゐたです——悪く云へば一代の山師！

私はウラーズウオスでないから、果して小兒は大人の父たり得るか知らぬ (“The child of father of theman”) 然し小兒は臆ては大人と成り得る可能性を持つてゐます。私の友人なる詩人でも、他日は大詩人と成るかも知れぬと思はれるので面白い。本でも、私の愛する本は現在思想とか智識とかと云はれる固定した何物かを有して居るので無くて、如何に思想智識が働き争つたかの報告を知らせる本で初めて眞實の本と云はれるのです。詰り私が書物で喜ぶ所は、其不完全の點にあるのです、興味ある未成品の點にあるのです。半眞理が不思議に全眞理に突然變ずる場合が多いと同様、未成不完全が完全と一轉し得るので

讀者諸君は私に私の愛讀書の名前を示せと迫るであります。私は「一冊も無し」と答へるより外ありません。私は本を嫌ふ男か、否です。私が書物を嫌ふのは書物をより深く愛すればこそです。書物の問題ばかりで無く、人間世界有らゆる場合に於ても、大なる愛は



大なる嫌悪と共同生活を營んで居ります。私をして書を嫌はしめよ。又私をして書物を愛せしめよ。

愛讀書の一冊も無い私が、今この本を出版して人に一讀を強いる権利が何處にありませう。又この本が果して『眞實の本』たり得るかも疑問でありませう。だが、興味を讀者に與へるや否は保證の限りでないが、不完全な未成品であるといふことだけは、著者たる者が斷言し得られると思ひます。

どうか諸君は、私が他人の作品に對するやうに、この私の感想集を嫌つていただきたい、そして愛していただきたい。

最後にこの本は、十年後出しても二十年後に出しても、三十年後に出しても、乃至は全然出版しなくても、詩人たる私自身の名譽に何等の關係がないかも知れません。

### 野口米次郎

附言。本書の包紙を飾る繪は、著者が嘗て北米の桑港で關係して居つた月刊雜誌「ラータ」の某號から抜いたものです。

## 目次

敵を愛せ……………	三
哲學的料理人……………	二
クロード・ヂュバル……………	三
サロジニ・ナイヅウ……………	三
ホウソン論……………	四
シエレー……………	五
三人の名女優……………	五
米國人に與ふ……………	六
米國文學の解剖……………	一九
ムーア……………	二六
モシヤー版の書籍……………	二六
シングに關して……………	二四



メスフキールド.....	一五
モウパッサン.....	一六
エーツと能.....	一六
外國に於ける能の研究.....	一六
立方派を論ず.....	一六
文藝談三則.....	一六
私の見た沙翁劇.....	一七
ポーの技巧.....	一七
畫家ジョンに關して.....	一七
カーペンター.....	一七
簡素な生活.....	一七
彫刻家セリニ.....	一七
レナンの姉.....	一七
モナハンを紹介す.....	一七

敵を愛せ



## 敵を愛せ

耶穌が「君の一方の頬を叩き附ける奴が居たらもう一方の頬も出して遣れ」といつた言葉の中には、一文の損も無ければ喧嘩は愚だから顔の痛い位は我慢せよといふ猶太人式無氣概の臭味が有るやうに感ずる。だが彼が「敵を愛せ」と大きな鐵槌を天から撃下したやうな力の強い一斷案を語つた時は、確に絶對無比の權威を示して居る。實際だ、敵を愛する位な廣量とした度量があつて初めて立派な男一疋である。云ひ更へると、敵を作ることを恐れるやうな微温湯の人間は、人生の活きた舞臺で一廉の役を遣つてのける役者で無い。僕の友人に自分を信ぜぬ敵を十二人以上は拵へられぬといつて其不幸を嘆息して居る男がある。然しこの男などは十二人の敵があつて世間でいふ立派な成功者の一人である。

場所の東西や時の古今を問はずに特に文學社會では、敵の有無が則ち成功不成功の定木である。敵が顯れてその存在が明瞭になり又美麗になつた文學者の例は枚擧するに遑がない。



不成功な文學者に限つて自分の友人の數を計算する。して文學の成功者の誇りとする所は自分が持つて居る敵の數の上に有らねばならぬ。近頃のやうに親切の値打が安くて何處へ行つても安價の微笑が待伏して居る時代では、一人の敵に對しても心底から感謝の意を表する價が有る。實に眞實な敵、健かな熱心な眞甲から闊劍を振翳す生正直な敵を作ることが出来る男は稀有な幸運兒である。僕は友人の文學者が文學で攻撃されるたび毎に、僕はいつも酒杯を擧げて彼の有望なる前途を祝賀する。「……さう攻撃された。目出度い目出度い君は一步目的地へ接近したのだ君は興味ある一節を君の歴史に加へたのだ」と云つて、僕は彼の猫脊（著名な文學者は皆な猫脊のものだ）を軽く叩いて遣る。耶蘇の「敵を愛せ」の句に、僕はもう一句説明を附けたい。「敵を愛するのは、汝が敵の力で作られるからだ」の言葉を附けたいと思ふ。

眞黒な烏が田島 surfaces を徘徊するのは、權兵衛が蒔いた種が實り始めた證據で無くてなんであらう。最も適當に了解すると、敵なるものは君の人格或は思想の體現がネガチープに逆に反對に出たものに外ならぬ、丁度權兵衛の種を穿くる烏と成つて現れたやうに。敵とは何だ？ 君の潑刺たる生氣を説明する最も有力な證人である。君の友人が君を百曼茶羅

嘆美するよりも君の眞實なる敵が一句君を攻撃した方が遙に君の眞價は説明される。君は敵の兇猛猙獰なる容貌に對し、又恐ろしく苦い言葉に對して感謝せねばならぬ。君は敵の落す一滴の藥品の力で、君の眞實なる特質が即座に表面に浮き出るのであるから、君は君だけでは完全で無い、即ち君は敵を得て初めて「完全なる君」と成ることが出来るのである。君の敵は（外面ではどんなに見えようとも）君の爲めに顯れたものだ。云ひ換へるとどんなに彼が君を輕蔑罵倒するにせよ、又どんなに君を負傷させようとするにせよ、彼は君の創造したものに外ならぬ。彼に毒惡な性質の呼吸を吹込み怨恨害心の活動を誘つたものは即ち君である。彼の存在は君に拂ふ敬意の表現と見ねばならぬ。君は彼が君の特質ある意義を否定するのを見て微笑して然るべきである。彼の否定するのは即ち逆に反對の側から君を是認して居るのだ、彼は君を殺して而も君を活かして居る。して彼を作つたのは誰でも無い即ち君だ。君の知ら無い眼に見えない半面が即ち彼として出現したに外ならぬ。僕は敵の嘆美者である。敵の嘆美者であるのは即ち僕自身の嘆美者であるからである。僕は極點の主我論者である、個人主義である、僕はそれを誇るのである。僕は敵を持つて居るのを一生の光榮と考へて居る。僕の存在は僕の敵が説明して呉れる。



僕は嘗て故小泉八雲の書簡のなかで彼の「敵を稱讃する言葉」を読んだことがある。今明瞭に彼の言葉が何う書いてあつたかを記憶して居らぬけれども、彼は友人は「自分を無茶に甘い、多くの場合に無意味な追従の言葉」で墮落させる、して敵は「自分に辛い非難攻撃を振掛けて腐敗から自分を救助する」といふ意見であつた。彼は僕同様敵の美德を認めて居た。僕はいつも「敵はどンドン殖えろ……で僕の存在をもつと大きくせよ」と叫ぶ。

翻つて敵自身のことを考へると、彼は實に憐れむべき人間である。僕等に反対だといふ事實だけが彼の *raison d'être* であつてみれば、僕等は彼に満腔の同情を持つて慈善的で無くてはならぬ。「敵を生かして置け、……生活せしめよだ。僕のお蔭で百日蠻を冠つた悪の一商賣が遣つてのけられる譯さ。僕等を攻撃非難するのが彼の飯の種だ。彼とても僕等同様女房もあれば子供もあらう。彼を生かして置くだけの原稿料を儲けさせて遣れ」と僕は云ふ。

小人物が大人物に猫撫聲して、友人関係を造らうとするのは、古い歴史を持つた人類の一職業だ。してそれ以上に古い歴史のある職業は、「大文學者に對する小文學者の嫌惡」で

ある。この商賣は生血をがぶがぶ吸ふ高利貸と同程度に最も有利な商賣だ。——小文學者が名聲を得る一番の近道だ。ブラツクウッド・マカデンが人に記憶され今尙その生存を續けて居るのは誰のお蔭だ。詩人キーツを攻撃したからでは無いか。又クワウタリー・レビユウも同様、テニスン攻撃で名聲を上げたものだ。(困つたことにこの雑誌は詩人攻撃を一手専賣と今でも心得て居る。) 그리스ウオードがポーを攻撃しなかつたなら誰れが彼の名前を口にするものか。米國の一内務大臣ジエームス・ハーランはウキトマンの詩集を風俗墮亂の文字としてその著者即ちウキトマンを内務省から放逐したので自分の名前を今日にまで傳へることが出来た。近くは日本の文壇、某文士の名聲(?)も所謂遊蕩文學撲滅の呼號(かういふ荒武者の鬨聲を英語で *Barbaric Yawp* と云つて居る) から出て居るさうである。三文雑誌は人を攻撃してその存在を認めて貰はうとする。この點は米國のチャタフーチーやチベツワ(ウキトマン)の詩集のなかで讀んだ場所の名前だが全體何處だか知らぬ)へ行つても又は南洋の土人の村落へ行つても版に摺つたやうに同じである。

文學上の敵役は「名士訪問」(この商賣は日本だけで西洋ではまだ發達して居ない)と等しく専門の一科である。訪問記者がいつも大きい標札の家のベルを鳴らすやうに「敵役」



の文學者も著名の文學者を槍玉に上げようとする。リチャード・リ・ガリエンは敵役に對する頌徳の辭を書いてかういふ言葉を吐いて居る、「必とこんな時代が来るだらう、その時代は文學的喉刺りが菊半載の小綺麗な本を出す、そのなかに自分が切付けたが爲め、急に風船玉のやうに有名になつた作家からの感謝狀を一杯に摺込むだらう。」そして、リ・ガリエンはこんな小詩もその文中に入れて居る。

「君は愚かな冷罵と慘酷な虚言で

シエレーの心を刺したかね?

ウオヅウオース、テニスン、キーツ、

立派に君は殺さうとしたかね?

「實際、君は失敗つた、それが何だ、

世界はそれでも君の名前を記憶する――

それは名譽だ、野良狗となつて

「名聲」の後から吠えまはるのは。」

敵を持つことが出来るやうな文壇の幸運兒は、敵は何にも醉狂に顔を赤く曲取つたり眼

玉を剥くのでないのを知らねばならぬ。彼とても出来ることなら「攻撃される側」へ廻りたいのは知れて居る。が、彼に美が無い、智識が無い、詩が無い、情が無いので、丁度資本の無い奴が一足飛に金持に成らうとして高利貸を始めるやうに、攻撃を資本にするより他に方法を知らないのだ。實際憐れむべきは敵である。「さあ、諸君、敵の熱心な奮闘努力を認めて時節柄に着物一枚も彼に呉れようぢや無いか……」と僕は言ひたい。

君が金満家ならば貧乏人は君の敵だ。君が美人ならば醜婦は君の敵だ。君が珍らしい腦力の所有者ならば、無腦力者は君の敵だ。君が驚天動地の力ある名作家ならば、世間の悪文家は君の敵だ。君が一句で雨を降らすことが出来る位の詩人ならば、「詩語粹金」式の作詩法を大事にする雑誌の埋草になるのを無上の光榮とする小詩人が君の敵だ。君がクレーナ―や歌麿たることが出来る畫家ならば、印刷屋の工場に焼つて居る畫家が君の敵だ。大ざつぱに言つてのけると僕等の所有して居るものを持つて居らぬ奴が皆敵なのである。成功者は不成功者を悉く敵とせねばならぬ。魍魎魍魎を藪から這出させるのは太陽である。僕等に太陽が無ければ部屋の欄間の後に匿かれて居る蜘蛛を飛出させはせぬ。要するに敵は君自身の創造物である。であるから、君の友人が一朝敵と成つた場合には先づ自分に對し



て三杯の酒を傾けて然るべしであらう。成功せる文學者が敵を持ちたければ、幾十版と版を重ねた自分の書物に麗麗しく「乞高評」と眞黒に書入れ郵税先拂ひにして不成功不文學者に送り届けるに限る。僕は小泉八雲と同様に、敵は僕に緊張した刺戟を與へるから感謝せざるを得無い。敵の信ぜざる所を取つて來て僕の確信を強固にする。敵の否定的半面が僕のポジティブを組成する。僕は敵が無くては一日でも自分の力を充實させることが出来ない。僕は極力敵の存在に對して敬意と感謝を捧げるものだ。僕の書齋に懸ける額の文字は是非共「敵を愛せ」で無くてはならぬ。

## 哲學的料理人

呈三田文學足下

三田文學足下。私はあなたの雑誌の定まつた購讀者の一人ではありませんが、私は忠實なあなたの讀者の一人であると思つて居ります。私目下はさるお屋敷に奉公して居りますが奥ではあなたの雑誌を定まつて取つて居るに相違ありません。月末になると小間使が古雑誌で一杯になつた紙屑籠を開けに、私の城廓である勝手へ申し後れたが私は料理人で御座りますへ参りました、その中から私の氣に向いた雑誌を選む特權を私に與へて居ります。私は白狀致しますが、外の雑誌——一二その例を云ひますと中央公論です、數箇月前に出て居ました聰明な某女史の告白の如きは矢鱈に青鉛筆で線が引いてあつたし又痛快淋漓などと威勢のよい評語さへ二號活字大の文字で書きくはへられて居りました、又私の御主人は有美君同様龍子先生を蔭ながら擔いで居ると見えまして「女の世界」から同女優



の寫眞を奥様に内證で切抜いた形跡さへあります。かく外の雑誌は非常に珍重せられて居るに係らず三田山上天下の羈者を自任して居る慶應の三田文學即ちあなたの雑誌になりますと當家に一人の友人も見出さないといふ有様で御座います。私はいつもあなたの雑誌を紙屑籠の中で御社から郵送されたまま封さへ切られず如何にも孤影悄然と發見するのでありますが、この憐れなあなたの有様が私のあなたに對する同情を漲らしめまして、さうで御座ります。もう彼此二年ばかりの間は自分免許で以て三田文學の後援者となり濟ました心持で居ります。私があなたに接觸して得た所ではあなたは哲學者でない、ある一部の鼻呼吸の荒い文學的偉人の所謂無反省であるのが私の氣に入りました、所であなたのやうな非哲學的な人に私は私の勝手哲學をお聞かせ申したいと思ひます。私は堂堂たる哲學者で御座ります。まづ私の勝手の戸棚でお膳の下を御覽ください、其處にはプラトーム居りますれば又倫敦で有名なクオーリッチから莫大な金を出して手に入れたアリストートルの古版もあなたに見せることが出来ます。なにがし佛蘭西の哲學者は哲理の考索は死の研究であると一奇言を弄したと記憶して居りますが、私はそれには全然の反對者で御座りまして、哲學とは生の研究であると主張しまして、又私は哲學は踵のすれ切れた靴より穿

けぬ營養不良の學校教授には似合つても、何故洗ひたての前垂きりりと締めて小意氣に白いキャップ冠つた料理人が手を付けて悪いのかその理由を知らぬのであります。でありますから私は私の性質通り料理もしますし又哲理考索も致します。私は料理人の如く哲理を考索するといふ人もありませんが、私の主人はきつとあなたに私は哲學者の如くに料理する奴だと語るであらうと自信して居るので御座ります。

歳の行かぬ頃の私の小學校教育は今日のやうに二宮金次郎一點張りでなかつたのを感謝致します。不整頓な私の初等教育は其後絶えず讀書したり世相人情の觀察でその缺點を私は補充致しました。ポープ先生の句「人類の適當な研究は人である」[The proper study of mankind is man] が間違つて居らぬとすると、私はまさしく私の教育完成の爲め正當な講堂に踏込んだのであります。何故ならお勝手位人間性質の研究に向つて適當な觀測所は他には無いと思はれますからであります。私が勝手に獨り熱心に自分の職業をはげんで居りますと、直接御主人公の容貌風采に觸れ無くても、私は完全なるその全性質を有り有りと讀むことが出来ます。そりや其御主人の身體の大小を言ひあてることが不可能であります。せう、四尺八寸の野依よろしくの小人島でも毛だらけの船頭二人前ばくつくのもあります



し、又六尺に手の届く筋骨逞しい野球の選手でも姫様のやうにおちよぼ口して居るのもある。私が御主人公を觀察するのはその精神上乃至心理的徴候からでありまして、私は百發百中、御主人公が肉慾縱横の男であるか或は審美的傾向の人であるか、お人善しであるか或は氣むづかし屋であるか、馬鹿か利口かは斷言し得るのであります。

雲丹や鹽辛を箸の先で捻くり乍ら手の平でうけて啜込む男に施毛の眞直なのは滅多には有りますまい。不消化物を無理鎗食ふ先生はきつと短氣で強情張りに相違ありません。天麩羅だの鰻だのといふ油ぎつた食物で云はば趣味の皿を撰む人には逸樂的で無責任な連中が多いので有ります。自分の前に出た最大好物の皿に箸を付けるのを忘れたり又スープや吸物が冷くなるまで愚圖愚圖して居る奴さんはよく物をど忘れする男と相場は定まつて居ります。パイを二度も三度もかへたり朝飯前から餅菓子に手を出す奴に先づ悪人は有りますまい。トーストを一寸五分四角に切れの玉子を三分間茹でろの珈琲の湯加減を彼此いふ先生は正札付きのエゴイストで御座ります。まづかういふ工合で、料理人として私は御主人公の精神上の徴候を捕へて夫れ夫れ觀察を進めまして、哲學的原理を實際に應用するのであります。

私は幼少の頃両親を失ひまして一生の職業を勝手に撰む自由を両手に掴んで居りました。私の天性の指す所に従へばダイラゼニスのやうに小さい盟の中に住んで居て、大隈高遠の理想侯からでも勳三等を貰ふと、「いやそんな玩具はいらぬ僕の前に立ちはだかる丈け勘辨して呉れ」と獅子吼する一世一代の機會を狙つて、一生の手本をシヨウペンハウエルに見出したのであつた。然し考へるとダイラゼニスの盟生活もシヨウのバラドックス同様時候後れでありますし一文にも無らぬ、私は別に金錢慾に捕はれたものでは有りませんが、私とても一週に一度位はシャツを洗濯屋へ遣つたり又帝劇の女優から連中の切符一枚位は買ふ丈けの錢はいる、又ダイラゼニスの盟生活は全然止めたにしても、私はさりとして長屋の鼻が糞椽と大根とを一所に洗ふ普通の盟中にはひるのは眞平でありました。

物質上の必要だけは救世軍の大尉などや靴を穿いて海老茶で大道の馬糞を撫でてあるくなにがし婦人會の厄介にならずに、一方では私の精神上の満足を買ふことが出来る職業をといふので一方ならず研究致しました。法律醫學は私の柄に無かつたし耶蘇坊主になつて日向臭い女學生相手に蓄音器の眞似も氣が利かぬ。商買人となり下るのは先祖の刀の手前濟まぬことである、身體は弱くて勞働はとても出来ぬ。鉛筆擔いで行商もいやだし又火災



保険の勧誘には根氣が足らぬ。所でふと私の胸中に浮んで來たのは料理人と成ることでありました。男子須らく哲學者と成つて人の心を養ふこと能はずんば料理人となつて人の身體を保護すべしと禪を緊めて天の一方を睨むと夫れが大きな國家事業の様に考へられて來ました。思つて見て御覽なさい、結構な料理を作つて死神に取つかれた男に自殺を止めさせる、瘦せた男をふとらせ不安な人の心に平和を與へ人生の幸福を實物的教育式に教込むのであります。私は少くも斯る理想を抱いて料理界に飛込みました。西洋料理を安直に一文も身錢を切らずに習ひたいと思ひましたから、やつとの思で旅費を算段して米國は桑港へ渡りまして、一週一弗半の所謂スクールボーイに住込んで些少たりとも金錢を儲け乍ら料理法を研究しました。太平洋岸を勝手用のナイフを握つてほつき歩くこと六年で、もう一息研究しようと思つて紐育へ出ました。紐育では大枚な金を拂つてウオードロフ・アストリアのライスカレーも口に入れたし又ユニオン・スクエア附近の何とかいふ有名な家でステキの焼き方も實見致しました。それから大學院へでも入る積で巴里へ渡りまして、M. d'Argent のフレデリックとて大名を博した料理人と友人に成つて鴨の料理を専門的に研究しました。又ぐつと碎けてラテン區をうろついて藤村君などのお馴染のリラで珈琲の煮方

を偵察しまして、私は彼地の詩人ポール・ホールなどと卓を圍んで座つたりして實際私はホール先生には二三杯の珈琲の貸さへあるので御座ります。

三田文學足下。あなたは私が料理人の職業を餘りに嚴肅に考へ過ぎると思ひになるで御座りませう、又恐らくはあなたは料理を藝術としてお考へにならぬかも知れません。私は唯世間の人が思想上の仕事を無茶に重要視して、何故に身體の保護者に對する負債を認めぬかを寧ろ驚いてゐるのであります。私は勿論料理を單に勞働として取扱ひません。英語でいふと Labour で人はこの言葉を work と混同して居ります。前者は必要上から來たもので後者は喜びの泉で藝術家がその理想に達する努力であります。前者はただもう苦痛困難を暗示するのみで、後者のやうに愉快な光を放つものではありません。世間に愚物は多いけれども、朝味噌汁が摺れたりオムレツが焼けるからとて料理人であると思ふものは有りませぬ。近頃流行する一品五錢の西洋料理法を半日寝そべつて讀んだとて兎ても料理人に成れないのは、處方が讀めても醫師に成れぬと同様であります。實際の料理人が料理で自己を表現するのは恰もバイオリン弾きが樂器の絲で苦樂を歌ふが如しで有ります。國によつて夫れ夫れ違ふ料理を觀察するとその國の特種な性質を知ることが出来る。チリコンカネ



やタマルスを好む西班牙人は胡椒澤山で熱くて萬事が經濟的である。食事に種種な工夫を持つて居る佛蘭西人は藥味が多くて理想的で一般に奢侈である。伊太利亞人はマカロニやスピゲテで證明されて居るやうに非努力的にぬらりくらりとして居る。英人はロースト・ビーフの如くに滋養に富んで獨逸人はソーセイジの様に脂肪が多い。露西亞人はカビーアの如くに如何にも異で興味深いし米國人は特種な食物を持たぬかはり世界を一視同仁視して居る。然らば日本は如何といふ質問では私閉口致しますが、香の物などを嗜好する點から觀察すると、貧を友とする禪僧式で世界の戰場外に平然たる所がある。さうして又簡人簡人の料理を見るとその人銘銘の特質を知ることが出来ます。性質の粗野な男に花車な料理を作ることが出来る理由はありません。音楽家がついとうっかりすると不協音を打出すやうに料理人も一寸した怠慢から味の一致を破るのであります。

藝術家の心があつて初めて眞實の料理人たることが出来るので、其人は清淨で自尊心に富み熱心な勤勉家で學ぶに鋭く記憶力が無くてはならぬのであります。料理が人心に及ぼす影響を考へますと誰かが書いた左の句を先づ以て私はジャスタファイするので御座ります。

“All human history attests

The happiness for man,——the hungry sinner!——

Since Eve ate apples, much depends on dinner!”

教育あるあなたの雑誌の讀者に向つては一一文字を追つて譯するまでも有りますまい、要するに人間の幸福が食事工合に懸つて居るのはイーブが林檎食つた以來變らないといふのであります。如何なる皮肉屋にても特製の料理を食はしてごらうじろ、まだ消終らない感情の火星は料理人の使ふ團扇で扇がれて破顔一笑するに至るであります。これに反してどんな善人にでも不出來な料理を充てがふと必ずその胸中に潜んで居た有らゆる野鄙陋劣が暴れ廻つてくるであります。人間行爲の罪惡は消化不良から來るといふ一句に歸することが出来る。大きいへば歐洲の大戦争も獨逸帝國の消化不良に原因し、少く云へば大隈内閣の數へ盡せぬ失政も等しく隈侯の不消化から來て居ると斷言致します。子供に悪いものを食べさせて御覽なさい。子供は直に精神の異狀を呈して來て奮激します、その結果何でもかまはず手近かものを破壊せねば承知せぬで有りませう。如何なる場末で碁盤の一ツ二ツ並べて碁會所を兼業して居るやうな藪醫にでも聞いて御覽なさい、子供の病氣



といへば消化不良の外はないと答へるであります。料理六ヶ敷くいふと料理科學と文明の進歩とは離るべきものでないといふのが私の意見で御座ります。常に美食して居るものは樂に緩和される性質を帯びて怒りぼく無いのが通則であります。古昔羅馬の文明が高潮した時代には人が皆な美食家となつて國は遂に亡びたのである。胃の平和を尊重する連中に對しては戰爭は無用であります。

成程、料理の發達は國を婦人化せしめる料理人は畢竟國家を亡ぼすものだと言論を急ぐ慷慨家も有りませう。然し考へて見ると人間には幾つカイデナル・バルチユウの本 能があるか知らぬけれども剛毅を除くと慎重でも公義でも又信仰でも貞節でも婦人性のもので、文明其物は婦人性の具體化したものであります。文明が進めば進む程人間は獨立性を失つてデペンデント從屬の平和に親むものと見ねばならぬ。古代では自分を保護するには腕力に限つたものが今日では歪みなりにも出來上つた法律に依頼するのである。人間が段段と殺人や戰爭や死を嫌つて家庭の平和人類の繁榮を主とすることに成ると、食事が最大問題たる權威を示すに至ります。弱虫めらの集合地で金を鱈腹持つて居る米國でお勝手を應接間同様に尊重するのは、米國が文明の最高度に達しつつある證據と見ることが出来るのであります。この點で日本は、私が目

下奉公して居る此當家は別としまして、一般に申すと大に遺憾とする所があると云はねばならぬ次第で御座ります。日本が料理人たる私等に敬意を拂はないのは取りも直さず文明國で無いからで、私共は海陸軍人同様にその眞價を認められるべきであると主張します。

聴衆が悪くては演奏が出來にくいといふ嘆聲を私は常に音楽家から聞いて居りますが、私は料理人として「パイフェグトリ完全に食ふことが出来る」所謂アプレシエーチブ・ダイナーの存在を要求するので御座ります。夫れ夫れ苦心の結果さし出した皿に對して特種の注意を拂はず、夕刊新聞の講談か或は三面記事に全精神を奪はれて前に出て居るスープが冷くなるのも知らぬ旦那方を見ると實に奮慨の至りに堪へぬのであります。それ以上私の悲劇は無いのであります。

三田文學足下。最初申上げました通り私は堂堂たる哲學者を以て自任して居ります。このことに對しては私は誰からも故障を申込まれる理由を發見致しません。私の料理其物が如何に私の哲學から助けられ又私の哲學が何程私の料理から得る所があるかを思ふと、私は愉快な一生を創造しつつある男だと獨り會心の微笑を洩さざるを得ません。若し人が私のやうに哲學と料理を程よく混合するに至ると、もつと聰明な料理人も殖え味の好い哲學



者も増すであらうと思ひます。料理法をよく會得して居ると、如何なる哲學者は生のまま食べた方が美味で、又或る哲學者は煮詰めて鱧に入れ、又誰はサラダとして食つた方が消化がよいかの秘密も知ることが出来るのであります。左様なら。

### クロード・ヂュバル

近頃になつては餘り古本屋漁りをせぬけれども、私の年の若い時分の道樂といへば——桑港時代紐育時代まつた倫敦時代を一貫して——塵臭い汚ない本を古本屋の棚の上から引出して、此處其處と飛び読みすることで、毎日、殆んど降つても照つても、午後四時半のチンが鳴ると古本屋漁りに出掛けたものでした。(私はいつも不景氣臭く陰氣な氣分に襲はれて来る、午後の四時半は古本屋漁りを初めるに一番適當な時分と思つてゐました。)だがこれは私の知識慾からばかりで無い、私に本に對する強い愛着心があつたからでせう。日本へ歸つてからも『午後の四時半』を思ひだしては、時時神田の古本屋をへ廻るのを愉快の一つとして居ましたが、今では郊外に住んでも居るし、又買ひもせぬ本を指の先で捻りまはすのも氣が咎めるやうな氣がするので、古本屋漁りを全く止めて居ります。然るに一二週間前用事をかけて神田へ出掛けた序に、ある見窄しい古本屋で昔の『午後四時半』



の氣分を鱗腹味つて居ると、アラ不思議や私は稀有な珍書を古雑誌の下から見付けました然し私に取つてこそ、珍書であれ外の人には三文の價が無ければこそ買ひ手も無く、四五年前の文藝俱樂部や新小説の下積になつて、身の不運を嘆じて居た譯なのです。さう思ふと人間たりとても本と同じ様な場合が多いのです。(私も時々感傷的な心持が胸にこみ上げて來ることがあります。)私は圖らず発見したこの珍書のために二十幾年も急に若くなつて、思はず知らず私は英語を通じて、初めてローマンスに觸れた昔の情調を再び繰返したやうな感じを得たのでした。不思議でせう！ 外見から云へば、遠くの昔に絶版になつて居る表紙の破れた假綴の英書三冊に過ぎませぬ。だがそれは私が桑港へ初めて渡つた當時に手に入れた小説で、日本の講釋師が張り扇から敲きだす嘘八百の所謂實録譚みたやうな物語で、徹頭徹尾センチシヨナルなものであります。私は今この二十幾年前の幼年時代の寶物に、不思議にも日本の神田の古本屋で廻り合つて、本屋の爺に三十錢(私に取つてこんな安價な買物はなかつたのです)を拂つて三冊の本を手に入れ、電車の來るのを待つて居る間私は丁寧に本の頁の折れたのを眞直に熨斗したり、口で本の塵を拂つたりしました。

本の表紙は平和な市民には不必要な、英語でいふと *Knights of the Road* で、日本上州

の街道に出没した長脇差のやうな奴が深夜に冠る假面や手錠の圖案で飾られて居る。これ丈け云へば讀者は如何なる本だが大概推量が出来ませう。表紙の圖案の手錠は即ち本の中には警官の活動があるのを説明するのであります。本の主人公はクロード・デュベル、これがデック・ターピンとか、トム・キングとかシキスチン・ストリング・ジャックなどといふ命知らずの手下を引きつれて、種種様様の冒険を演ずるのであります、私は實際、學校の眞面目の教科書からでなく、かういふ血の湧き氣躍る冒険談をこそ耽讀して自然に生きた英語を覺えたのであります。主人公デュベルが危機一髪警官の追跡を巧妙に避けた時、どんなに私の幼年の頃は冷汗をかいたでせう。又彼が絶世の美人を助けた場合、如何に私の血を飛び上らしたでせう。其頃私は眞實な人生や文藝の意義は皆目知らなかつたのです。然し其後段段年を取つて多少なりとも其意義を掴むやうになつたが、それで私がデュベルの冒険談から得たやうな強い豊かな印象は、それから感ずることが出来なかつたのであります。今再び私の手に昔馴染の本が入つたのではあるが、私はとても十七八歳の頃得た符呪を今日その本の中に発見は出来ませぬ。眞實な子供であつて初めて其境土に入る特權を持つことが出来るので、今日の私に取つては眼前に「入る可からず」の大きな紙が張つ



であるのでありませう。

然し私はこの本を二十幾年の後今日再び手に入れたのを感謝します。本は倫敦の出版で表紙の隅に一冊價一志シリングと書いてある。日本の金にすると一冊が五十錢です、この五十錢の小説を私は廿幾年前には數へると三十冊も持つてゐました。其時分私は桑港の日本字新聞社の居候でして、一人年を取つた學者が社に居て何かと私のことを心配して呉れましたが、この人が私がかういふ小説に耽つて居るのを見て、時には手厳しく忠告したこともありました。そんな時でも私は其等の小説を忘れることが出来ずに、忠告者が夜寝しづまつたあとで、私かに小さい蠟燭を點じて一時二時と時計が鳴るまでデュバルの跡を追つて、共に冒険の興味を味ひました。私共の住んで居た家の隣家に雜貨商があつて、其處の子供で私と同年配になつて居たジミといふのと私は友達になつたのですが、この子供が話好きで私は英語の會話の稽古の積りで、私の讀んだ小説の荒筋を廻らない言葉で語つて聞かして遣りました。一冊の話を終るに三ヶ月も掛つたのでした。

クロード・デュバルは私の一番好きな主人公で、彼は堂堂たる美男子でありました。始終三角なりの帽子に手頸のまはりに白い鬘縁のちよいちよい見える花車な着物、それに小刀

を腰に差して衣囊ウエストにはピストルを入れて居る。どう見ても純然たる貴族の値打を供へて居るので、何處へいつても女に持囃されたが、本人はいつも金満家の一人娘を幽閉から救ひだしたり、又無辜の民を苦しめる悪人原を懲らしめるのに多忙なので、中中詰らない女の機嫌を取つて居る隙は無かつた。それに彼は日本の鼠小僧同様富豪の倉庫を破つて貧民を助ける、所謂義賊の大役を引受けてゐたのである。このデュバルがタービンやジャックと一緒に、英國の田舎を馬で乗りまはり、或はエビング・ホレストに出沒して馬車を脅かして、客の荷物を巻上げ——ぶるぶる震へて半分泣いて居る婦人は、怖怖デュバルの美貌に見とれたと書いてあつたのを記憶して居る——町へ入ると差詰め第一等の宿屋へ乗込んで、直ぐ一番旨い料理を作れと命ずる、所で警官に追跡されて居るのは勿論のことだが際どい瞬間に手際巧に逃走する、夏中うんと裸いで冬になると露に倫敦へ乗り込んで罪の無いやうな顔をして、美人と一緒に交際社會の食堂に滑りこんだのである。クロード・デュバルの倫敦生活は實際の貴族にふさはしい位豪華を極めたもので、幾人も小姓や幫間を抱へて、出る時は馬車で、家へ歸ると彼を慕つて居る侯爵や伯爵の夫人達が彼を待つて居る、そして彼はいつも不幸で美人な女の味方をして鼻端の強い所を見せてゐた。彼が愛した唯



一人の女はアデルといふのであつたが、私は其時代餘り、少くも小説ではお白粉臭い話  
は感心しなかつたと記憶して居る。デック・タービンと、瘦せぼちの眞黒なベス——此二  
人位良く似合つた一對は無かつたのである。色は名詮自稱樂花子のやうに黒く足の早いこ  
と風の如しと云はれたベスを、田舎路を急ぐ客馬車が見えやうものなら、客は「お、神様よ、  
ほら其處にタービンとベスがゐます助け給へ」と云つた、何にはさて呼吸をこらして靜に  
靜にと語合つたのである。本の中でベスがタービンの命を助ける爲めヨークへと一百五十  
哩一度も路で休まずに乗付けた、然るに馬は倒れタービンは救はれたが大事のベスは死ん  
で仕舞つた邊をば私は幾回となく繰返したものである。ベスの死後タービンの失心落膽は  
云ふまでも無い、自分の頭には幾百磅といふ政府の懸賞が掛けられて居る、彼は間もなく  
タイバンの森然とした林中へ引摺られて行つて落首になるのである。その運命は好男子の  
ヂュバルも同様である。彼がタイバンの露と消える時、どんなに倫敦こそつて人人は見物  
に出掛け、分けて美人は優しい涙を彼等の爲め内證でこぼしたことであつたらう。それか  
ら私の好いた此種の小説の主人公は、ジャック・シエフアードで、シエフアードの本の表紙  
には獄舎の鐵窓の向ふに居る彼や赤い着物を纏つて帽子を横に冠つて妙に笑つて居るジョ

ナザン・ワイルドの繪が描いてありました。このレフアードは釘一本で倫敦はニューゲー  
ド一番といふ大金庫を破つたのである。警官もこの奴には散散手甲擦つて、仕舞には二百  
貫の鐵の鎖で彼を縛り上げた。そして彼を捕へたのは本の表紙に出て居るワイルドといふ  
探偵なのである。

夜になつて私は自分の書齋で、マコーレーの全集から一冊引出して「千六百六十五年に  
於ける英國の狀態」と題する見出しの場所を読むとこんなことが書いてある。

「どんな方法で旅行しようとも、旅客が連れが澤山で良く武裝して居らないと、可なり危険  
で掠奪に會つたり刺されたりする。今日では本で傳へられてゐるばかりだが、馬上の路賊  
がどんな街道にも出沒した。倫敦近く一面原ぼうぼうたる野原は、殊に此種の掠奪者の住  
家であつた。大西道ではホーンズロウ・ヒース、大北道ではフキンチレー・コン  
モン此等の兩場所は取分け有名であつた……仕事の成功の上また自分の安全から云つて  
も、彼等が先づ以て大膽で熟練した乗馬の達人で無くてはならなかつた。一班の泥棒仲間  
では、一番貴族的な地位を占めて居て、上流な料理屋や博突場へ出入りして、お歴史と一  
緒になつて博突などをした。實際時としてこの路賊のなかに立派な家柄に産れて相當な教



育を受けたものがあつた。……語られてゐる所に依ると、リツチモンド侯爵の佛蘭西人の小姓でクロード・デュバルなるものも路賊の仲間入りをして、遂には其首將となり濟まして、如何に彼がその同勢を引率して一美婦人の馬車を襲つて、四百磅の分捕金の中百磅丈け自分が取つて、残りの三百磅は一緒にコラントの舞踊をおどれば返却して遣ると申し出た。如何に彼の快活な伊達姿は時の女の心を奪つたか。如何に彼がピストルや刀を持つての巧妙敏捷は、有らゆる人を恐れしめたか。如何に彼は遂に千六百七十年に酒に酔拂つて警官の手に落ちたか。如何に高い階級の婦人達が獄舎に彼を見舞つて涙を流して彼の助命を出願したか。如何にその婦人達の懇望を入れて彼の命を助けようとした所が、盜賊の恐怖と云はれた判事モルトンが、法律が嚴重に執行せられなければ自分は辭職するといひだしたか。如何にデュバルの死刑執行の後彼の死體は有らゆる莊嚴を以て飾られ、紋の付いた楯やら大きな蠟燭、黒い幕やらミコート（死者の家の外に立番し葬列に先行する男）やらといふ大騒ぎであつたか。またもや王様の慈悲に故障を入れた殘忍な判事が飛出して、その葬式を解散せしめる爲め役人を派遣したか。』

さうして見るとこのデュバルの小説は所謂實録らしい、或はまたこの羅曼的な輕快なマ

コーレー先生は、眞實な事實を語つて居らず、單にロマンスを夢見て筆を採つたのかも知れぬ。少くも十七世紀の末葉は今日のやうに散文的で無く、きびきびした小説が實際の生活に演ぜられたのである。



## サロジニ・ナイヅウ

親愛なるサロジニ。僕はあなたを本名で呼ぶ。千九百〇四年に二十五歳であつたとするとあなたは最早や四十歳のマダムだが、熱い太陽がぎらつく印度の菩提樹の蔭で智慧と感情を吐出す小鳥の聲と肉體の所有者なるあなたを僕は少女としか思へない。僕があなたに接する最大愉快は其の點にあつた。あなたは重大な責任ある四人の子供の慈母であるのを知つて居る僕は、如何なる西王母の靈酒を飲んで斯く若若しくあることが出来るかを驚いた。僕の眼にあなたは少女と映しても印度人には四十歳のマダムと見えませう。又さう見えるに相違無い。が、僕はあなたが少女、少くも四十歳の少女としか思へなかつたの喜び。あなたが暦の上で四十歳に成つても何等の不思議は無い、あなたの親友エーツでもシモンズでも四十や五十の坂をづつと越え、僕自身も今年取つて數へ年四十四歳に成る。僕はあなたに肖かつて四十代の少年で有りたい。親愛なるサロジニ、僕はあなたを四十歳の

少女として祝福する。

僕は倫敦に於けるあなたの十七八歳時代を知らぬのを残念に思ふ。今日「四十歳の少女」で有り得るあなたは確に其時代「十七八歳の老婦人」であつたであらうと思ふ。永遠に若い印度の女は年の若い時已に老いて居る。あなたは少女時代に已に澤山の智慧を悲しい人生の酒杯に盛つて飲みほしてゐたに相違無い。あなたは幾多の英國の文士に驚くべき謎語或は表象と見えたことであらうと思ふ。僕の眼に彼等（其中の一人はシモンズである）があなたに自分の不安苦痛を訴へてあなたから「十七八歳の老婦人」の同情で慰藉されて居る有様がありありと映する。シモンズの言葉を借りていふと、クリスチャンより更に古い自覺に屬した或物があなたに有つて（あなた許りで無い我我東洋人の誰にも有るだらうが）自然に非個人的な心の靜謐な存在を感じる事が出来たであらうから、誰もあなたに秘密の秘密を語り易かつたと思ふ。僕も四年前倫敦で會つた節あなたに僕が色色の人に語らぬ所の心の痛み喜びを語つたと記憶して居る。あなたは病中であつたから狭い病院の部屋の狭いベッド（あなたの小さい肉體を横にするには狭い部屋の狭いベッド以上の必要は無つた）の上で鎌倉の大佛のやうに足坐をかき乍ら僕の言葉を聞いて同情の微笑を洩した。僕は



其時のあなた——ペラペラした黄色の紗の印度服をふはりと著た小い體のあなた即ち印度の女詩人サロジニ・ナイヅウは妙智力と慈悲の觀世音菩薩であると思つた。色の淺黒い——我我日本人よりも更に黒い顔に鼻筋が通つて、談話に興が湧いて來ると小さい顔全體が輝く眼珠だけに成るとさへ思はれる驚くべき眼の所有者なるあなたは、僕が幼少の頃よく遊びに行つた御寺の觀音様に生寫してあつた。僕は實際あなたと（僕はあなたのベットに腰掛け乍ら）差向つて談話した時何となく感謝の念に戰慄いた。僕はあなたをウキズドムの姿と觀じたのである。今僕がこれを書いて居る六疊（椅子やソファの置いてある僕の書齋は北向で寒いから冬分は閉切つて滅多に入らないから）の壁の上に掛けてあるあなたの自筆の「蓮花に坐した佛陀へ」の詩を讀むと、僕はあなたのシエレー式の燃える希望と満されない飢渴が智慧の衣服で包まれてゐるのを知るのである。"And all our mortal moments are a session of the infinite"の一句は、佛陀の言葉といふよりは寧ろヴェダンタ哲學に近い。あなたは吐陀經典研究者の娘である。あなたは書いて居る、「數千年間私の祖先は森林や洞窟の愛者であつた、素敵な夢想者大學者大審美家であつた。私の父自身も夢想家で莊嚴な人生の失敗を演じた大人物である。印度廣しと雖も私の父位學識の深く、父位愛された人

は澤山は有りますまい。白い大な頤鬚を生し、側面はホーマーに似て笑ふと屋根が落ちる位です。全財産を人を助けるのと鍊金術との二目的の爲め倒盡して仕舞つた。毎日有らゆる宗派の學者共を園庭に集めて大會議を開いた——君王も乞食も聖者も正札付きの悪人も一視同仁に取扱つた。して私の父の鍊金術！夜となく晝となく實驗は行はれ、新處方を齎すものは皆兄弟同様に歡迎された。然し此の鍊金術は永遠の美に對する詩人の憧憬を物質的に表現せんとするものに外ならない。黄金の製造者と詩の製造者は世界の神秘的希望に生きんとする雙子で、私の父に對する好奇心のジニアスは、私に向つては美に對する願望となつて居る。レヲナード・ダ・ヴキンチに關してペーターが用ひた言葉に「好奇心と美の願望」とあるが記憶ですか。親愛なるサロジニ、親子の情が濃かなるのを常とする日本人から見るとあなたが父に對する深い眞實な情愛は如何にも麗しい。あなたが最近の詩集即ち「破翼」原名ゼ・ブロークン・ウキングの中に入れて居る一詩「父の靈への敬禮」を讀んで、僕はどんなに愉快を感じたでせう。又あなたを持つたあなたの父を祝賀せずには止むことが出来ぬのである。「夢無き時代の立派な夢想家、その深い鍊金術の智慧は變化する時代の使命と吐陀經典的遺傳の靜な無垢の幻想を調和させた……」とあなたが歌つて居るのを



讀むと、斯かる思想深い父の娘でどうしてウキズドムの祝福を受けずに止むことが出来よう。然りあなたの一面は熱情の詩人で、秀麗な放逸恣唯で人を驚かせるを本領としたキーツの意見に賛成して居るがその半面は婦人には珍らしい嚴肅な思想の生命を握つて居る。默想的傾向はどんな印度人でも喜んで迎へる所であるとは知つて居るが、あなたが哲人の父から幾千年間掛つて蒸溜された純な靜な理智的血を受けてゐないならば、どうして「人生の悲しみを詩歌の悲しみで打勝たん」と歌ひ又「我我の有らゆる人間的瞬時は必竟無窮の開會なり」といふ名句を吐くことが出来よう。あなたの三部の詩集を翻すと隨所に人を思想界に導く暗示の言葉を澤山發見することが出来る。然し僕はあなたの他面則ち熱情の詩人としてのあなたを更に愉快に思ふものである。

僕があなたに印度で無く倫敦で初めて會ふ機會を得たのは喜ばしい驚駭であつたが、あなたは不幸に（或は幸に）病後をナースリー・ホームで養ふ人であつた。あなたが狭い病院の部屋中一杯草花で飾つてゐたのを見た僕は、花を見ずには一時も暮されぬあなたの麗しい婦人性を懐しく思つた。此パーク・レーン（南亞や濠洲の金山で大當りした心の冷かな百萬長者は重に此處に住んで居る）でピカデリを雷鳴のやうに音を立てて走る馬車や自動

車を聞いて居ると、あなたのハイデラバッドの家とはどんなに異なつてゐたであらう。僕はシモンズが書いたあなたの詩集への序文中にあなたの書簡を引いて居るのを讀んだことがある。あなたは書いて居る、「來てこの雅麗な三月の朝を私と共に分て。黄金と青五色の空の豪華な火焰、日光を飾る是等深紅色の百合の花、ニームやチャンバクやセリシヤ等の諸木の逸樂的香氣は疲倦せる空氣を和し難い甘さで撃つ、金や緑や銀の胸せる千の小さい鳥は巢造る時節の生の狂歡的銳音を吐散らす。總てが暑く烈しく熱中して生と愛の喜悅強請に對して熱烈で耻る所を知らぬ。深紅色の百合の花は一花瓣花瓣私の心の血で織られて居る、是等の小さい震へる諸鳥は私の靈が音楽と權化したのである、是等の重々しい香氣は、私の感動が溶解して空氣性の精氣と成つたのである、この燃える緑と黄金の空は「眞の私」で——絶え間無く驕慢に、然り多少熟慮して他の部分に打勝つ私の共部分、苦しみ叫び明日或は廿年後死なねばならぬ神經と組織の塊であるのを、あなたは御存じですか。「ああ、あなたの印度の家とこの不藝術的な冷血な倫敦との間に何等の相違！この冷かな倫敦の狭い病院の部屋を咲き誇る草花で埋めて少くも印度的空氣を作らうとしたあなたの氣分は僕によく了解されたのを喜んだ。この草花を前にし後にし右にし左にして僕はあなたとあなたの



親友シモンズと談話したことを忘れない。シモンズにあなたが了解されてゐるのは大きな名譽である。又僕もシモンズから一詩をデヂケートされて居るのを誇るものである。彼は詩集 *Knave of Hearts* を僕に贈る時そのフライ・リーフにカチユラスの句「僕は嫌ひ僕は愛する。どうしてそれが出来るかと君は質問する？僕は知らぬ。僕はその爲め傷められることを知る。僕はそれを切抜けるのだ」を思ふと、シモンズは運命論者の悲劇を肯定して居る。僕の親愛なるサロジニ、あなたも「生と死と悲哀と狂歡が一の合體として古い沈黙の痛み」を歌つて居るが、あなたも運命論を審美的に哀書して居る態度を喜ぶのである。シモンズもあなたの心も氣高い悲哀で彩色されて居る。

僕があなたと最後に倫敦で會つたのは「詩人俱樂部」の詩朗讀の晩で、其晩あなたは極めて花車な絹で飾つた小さいスリッパを穿いてゐた。

僕はあなたの其スリッパは頑固な重い皮の靴を穿く英國の女に對する果狀チヤレングであると思つて非常に愉快を感じた。あなたは空しい理智の劍を拂翳す西洋の女に向つて花の一枝を武器として闘ふ眞實の勇者であると思ふ。あなたが其晩讀んだ詩が何んであつたかは僕は記憶して居ないが、あなたの鳥のやうな輕快な上品な音聲は今尚ほ僕の耳に残つて居る。

其晩あなたは印度風に額に赤い色で階級の記號を描いてゐたが、それを見て僕はあなたの名句に「淡青の空の額に一箇「階級の記號」——黄金の月は燃える」とあるのを想起した。フランシス・トムソンは太陽を法服を著た僧侶に比較して居るが、あなたが月を「階級の記號」と見立てて「ダイアナの玉座」を月から奪つて西洋の思想を哄笑したのを僕は痛快に思つた。確にあなたの詩の想像は印度の自然から産れた個人的權威を持つた者である。東洋人として僕はあなたの詩を尊敬する者である。

然しあなたの詩集を繙くと僕に多少の疑惑がある。印度から時折僕が接する通信に依ると、あなたは新聞紙上で演壇上でいつも活動して同胞の婦人の向上を謀つて居るさうである。あなたは印度に於ける所謂新婦人の一人を以て自任して居ると僕は思ふ。然るに一度筆を握つて印度の婦人の心を歌ふと、あなたは無條件で男子の奴隸としての「女的美徳」を嘆美して居る。「私の肉を取つて、希望ならば汝の犬を養ひ、私の血で汝の庭木に灑いでもいふ」とあなたは歌つて居るが、僕がそれを單に修辭と受取つてもあなたに於て異存は無いだらうが。僕の知る限りでは印度の文學の大部分は修辭の文字である、その修辭辭にあなたも印度人として捕はれて居ると思ふ。僕があなたの詩集に正直と不正直の兩面があ



ると敢て云はうとする理由は即ち其處である。元來女は（東洋ばかりで無い西洋でも）一日の大部分を假面で蔽つて暮す。あなたはその假面を全然拂ひのけることが出来る資格と權利を握つて居る東洋有数の女の一人であると思ふ。僕はあなたの詩集が最初の二頁から最後の二頁に至るまで生きた女の聲であつてほしいと希望する。あなたは修辭的文字を見捨てねばならぬ。

倫敦以來御無沙汰してゐたが、今日ふと氣が向いたのでこの長い手紙を書いた。親愛なるサロジニ、左様なら！

## ハウソーン論

ハウソーンは個人的にも亦文學者としても容易に忘れることが出来ない。評論家は其の取扱つた題材に關係なく或は愛され或は嫌はれるものであるが、小説家のハウソーンもまた或は愛され或は嫌はれて居る。彼の時代では作家は驚く可く又珍奇な人間視されて、古聖人の檻棲を傳へて居るものと考へられた、今日の時代のやうに作家と讀者との間の關係は決して敵味方の關係で無く、作家に對する讀者は讚美の情で満ちて居ると考へられてゐた。評論家が裸體で讀者の面前で舞踊した場合と等しく小説家としてハウソーンは裸體で舞踊しても、讀者から嘲笑されるとは思はなかつた。彼の時代の讀者は今日のやうに惡擦れして居らなかつた。彼は「友人や未知の友」の爲めに書物を作つたと彼はいつて居るが實際彼を知る知らないに關係無く、讀者は悉く彼を取捨いて圓を描いたと想像される。フキルデングを思ふと「トム・ジョンス」パンヤンを思ふと「ビルグリムス・ブログレス」又



セルバンテスを思ふと「ドン・クキホテ」ラムを思ふと「エリヤ」ヘーヅリツトを思ふと「デーブル・トック」が直ぐ念頭に浮かぶやうに、このホウソーンを思ふと直ぐ「ゼ・スカールット・レター」が胸に浮んで来る。

ホウソーンは嫌疑心のない愉快な評論家といふ態度で小説を書いた。其點はまるでポールのそれとは異つてゐた。ポールとホウソーンは同時代の米國人だが、全然相違した米國を眺め又了解してゐた。ポールの存在は云はば偶然の出来事の一つで、彼に對する米國は吝嗇な意地の悪い編輯者と慾張つた物質的な人間ばかりの住んで居る場所であつて彼はそれから離れんが爲めに文章の力を借りた。彼は極力この新米國を嫌つたけれども、又一面には彼はその新米國の人間であつた。然るにホウソーンは舊米國の人間である。彼の一家は歴史上にその舊米國と關係して、彼は舊米國から親切な取扱を受け、其後米國政府の役人となつて海外に出るに至つたまで故國を見捨てたことは無かつた。若し彼にポールのやうに文章に逃れる必要があつたとすると、それは仙女の王國を築いて影の如き人間をもつと自由に動かして見ようとした道樂氣分からであつたのである。

彼の一生は平穩無事の一生で、彼の書いた文章を読むと彼は書齋の窓から柳の葉に當る

日光を注意し乍ら筆を握つたことを知ることが出来る。又彼はトウロウが自分の手一つで造つた獨木舟と一緒に乗つて小河を遊んだことを知ることが出来る。又エマソン（輝く衣裳のやうに純な現智的は閃光が彼のまはりに放散されたとホウソーンは書いて居る）と森中を語り乍ら逍遙したことを知ることが出来る。又彼は夜眞赤な火の前に坐つて居ると窓の硝子から皎皎たる月影が入つて絨毯の上に夢を描いた、所でそつと翌朝紙の上に傳へて見ようとしたことを知ることが出来る。彼の喜んで住居しようとした空氣は「清澄な褐色な薄明の空氣」で、彼はどんなものでも古臭い物を愛した、青い常春藤で飾られてゐる想像で萬物を包んで眺めた。實際彼とポールとは僅か二年異ひで産れたが、考へて見ると不思議でならない。「世界は疲勞して重苦しい頭を枕に載せ長い長い睡眠に入つた」と彼は想像してゐたものだ。

彼の『備忘録』を見ると、彼の靜謐な生活とその生活相應の感激と「文學の完璧」を期して試みた文藝的冒險の消息を読むことが出来る。彼は最も恍惚境のなかに入つた人間であつた。そしてこの恍惚境がどんなに幸福なものであるかは眞實な文學者にして初めて知ることが出来るのである。彼は一兒童が素足で森中を走つて行つた有様を眺めて「兒童を



追ふ旋風は枯れた木葉を散らして圓を描いた——だがさう激烈ではなく」と注意して居る彼はある日「栗の樹の頭が白い外觀を呈した、思ふに花が咲いて居るのであらう」と書いて、その後二日経てから書き直して居る、「栗の樹の頭は獨特に豊富である宛も濃美な太陽の光線がその上に特別落ちて居るやうに見えた。「白い外觀」の一句は自分の意味を完全に傳へて居ら無い。」ホウソーンの傳記者はこんな詰まらない事を詳細に取扱つて居る所を見ると彼の一生は頗る單調な存在であつたであらうと云つて居る。けれどもそれは彼の生活の缺乏を説明するので無く、寧ろ豊饒を暗示して居る。彼に對する一瞬間は、一瞬間に彼をして麗しい想像や文章を鍊らさせる材料を提供したのである。

彼は決して現實的勞働の世界に齟齬しなかつた。彼が税關の調査官として實務に就いたことがあつたが、それとても丁度チャールス・ラムがサウス・シー・ハウスの老書記であつたと同様で決して現實世界の印象を餘り強く受けてゐない。ホウソーンの税關には蜘蛛の巢が一杯で、其處で働いて居る人間は船長あがりの老骨のみであるやうに彼は思つた。彼は實際眞實の現實界から何物も學ぶことが出来ぬ人間で、小説を書く場合でも彼は良心の指導で書いた。彼に對する現實的情熱は餘り大きな意味を彼に齎らさなかつた。彼が奏し

た良心の銀線は、斯くも珍らしく、斯くも鋭い反響を起したのである。

若し彼にして彼の實際の如く個人的で無く又愛すべきもので無かつたらば、彼の作物（良心の樂器で秘密をいぢくり出す文字）に我我は堪へることが出来まい。若し彼にして彼の實際の如く生眞面目で無かつたならば必つと我我は彼に堪へることが出来まい。若し彼にして調子外れに笑の一滴でもその中に落してゐたならば、我我は彼に同情ある返答を與へることは出来まい。我我が彼に堪へ更に進んで彼を嘆美する所以は他なし——彼は何處までもホウソーンで彼は熱心な文學者で、彼は實に藝術的態度を完全に維持してゐたからである。トルストイが取扱つた戦争は恐るべきものであり、又ヂュマが取扱つた戦争は愉快なものであり更に又スモーレットが取扱つた戦争は恐るべきものでも又愉快なものでも無く唯平凡普通な出來事と成て居る。故にそれを讀むと自然に作家の態度に化せられる。罪惡にしても罪惡が主要問題である人間から聞いて初めて之が或物を意味することに成て來る。僕はゴヤが描いた僧侶と女巫の小さい繪を見た。女巫は驚いた眼をして恐れ戰慄して居る僧侶に添つてちよこまつて居る、僧侶は發狂して何か恐るべき呪文を大きな口を聞いて無暗と誦へて居る。この繪は火や劍や鞭に對する物質的恐怖の表情で無く、僧侶と巫女が



罪を犯して神の畏嚇を感じた所を語つたものである。又僕の面前にホルベインの『死の踊』と題する一揃ものがある。死が街を歩く市民の足もとに横はり、又住持の長い外袍の裾を掴み、又槍で武士を突き、又戀人がギターを弾奏して居る女僧の部屋に輝いて居る聖壇の蠟燭の心を切つて居る。然し市民が死の爲めに騙されようが又住持が催眠に掛らうが又武士が驚かうが或は又女僧が不都合であらうが、それは我我には直接關係が無いことだ。我はゴヤの描いた繪にある僧侶と女巫が何人の罪を犯し、又ホルベインの描いた死の驚くべき表白の眞實な意味を了解し得ざるものである。要するに彼等の表現は我我の世界の恐怖でない。そしてハウソンの書いた小説もホルベインの『死の踊』である。現實世界の不幸や煩悶で無く、彼の昨品が住んで居る世界は良心の世界で、倫理觀念の盛衰を論じたものである。彼の人物はエタニチーの上で踊つて居る影のやうな人間である。

然し文學者としてハウソンの巧妙な技倆はポーに匹敵し、又彼が意識ある藝術家としての價値はスチーブンソン以上である。今彼が『The House of the Seven Gables』の序文中に書いて居る所のものを讀むと、如何に彼が彼の藝術の制限を了解しその範圍で最善を盡しつつあつたかを知ることが出来る。その中にかう書いて居る、『Novel』の構成は possible だ

けで無く人間の經驗の普通な probable な状態を微細な注意で描くのを以て目的として居る。Romance は藝術として其法則に従はねばならず、又人情の眞理から遠ざかるのは許すべからざる罪惡であると同時に、ある點まで作者はその眞理を自分の選擇のもので表示する權利を持つて居る。作家が適當と思へば、隨意に空氣を取扱つて繪畫の光を豊富にし又その影を肥沃ならしめても差支へない。勿論作家はその特權を濫用してはならぬ、殊に「奇異なる事」を實際の一部として提供するよりは寧ろ精緻な消散し易い風味として混和する點に注意せねばならぬ。この原則は永久に不變である。彼はロマンスの形式のもとに自由に空氣を創造した。彼の作つた文藝的世界にはニュー・イングランドや伊太利を暗示する所もあるが、決して實際の現實世界へ我我を誘引するやうなことは無かつた。彼は常に自分の『Atmospherical medium』の制限を忘れずその範圍で彼はこれを巧妙に支配した。又彼は彼の人物を道徳律で束縛するやうなこともしなかつた。道徳も彼の小説の上では前記の『奇異なる事』を『精緻な消散し易い風味』として取扱つた場合の表現に過ぎぬのである。如何なる藝術家もこのハウソン位巧みに斯る藝術的平衡を維持し得たものは無い。彼の技工は全體の構圖の上に於ても亦部分的詳細の上に於ても等しく美妙である。彼の



物語を冷靜に批評し去ることは至難である。然し我我が良心を平靜にし胸の鼓動を落付かせて科學的な沈着な態度で彼の文章の一句一句を讀む時、我我は彼が不思議な不可解な問題に現實的恐怖を與へる彼の精巧な計畫を彼の物語から學ぶことが出来る。斯る巧妙な技術の前では如何に詩趣を解せざる讀者と雖もその理性を捨てて恐怖せざるを得まい。一例を挙げると、ホウソンの *Fappaimis Daughter* である。この一篇は『奇異なる事』を尤もらしく思はせる作品で、彼は『奇變』を單純に云つてのけて居る、そして明瞭な目的を暴露すること無しに、彼は各の點に『疑惑』を投げて讀者の心に深い印象を與へて居る。ギラバニがビュトリスが死の園庭に捕へられた草花であつて、其呼吸や肉體は毒で漲つて居るから『手袋はめてそれに觸れるか假面を冠つて接近せねばならぬ』と思つた時には、その作家ホウソンは最早や病的に不健全に入つて居ると思はれる。然し作家は病的で無い、麗はしい蟲がビュトリスの周圍に飛んでその足許で死んだ。『ギラバニの眼は彼を欺いたに相違無い』かといふに彼は自分の眼で欺かれたので無い。ギラバニがビュトリスに與へた花は彼女が握つたが最後己に枯れて仕舞つて居る。我我は秋に成ると木の葉も散るやうにビュトリスの花は枯れるのを見た。

文學者の想像は麥稈一本からでも煉瓦一臺を作ることが出来る。ホウソンはあらゆる感情を繪畫的暗示の一小斷片のなかに充實させて、讀者の心に深い深い印象を與へて居るのである。彼の主人公 *Goodman Brown* が家を出掛ける際、後を振りかへつて『Faith』の頭が桃色のリボンをつけて居たが何んだか憂鬱な様子で彼を見送つた』のを見た。このことは單に事件としては一小瑣事に過ぎない。然るにこのグードマンが *Paris* と談話をすると、不思議なことに女房の聲が空中に響いて聞えた。彼は失心苦痛の餘り聲高く『Faith』と叫んだ。すると森林の反響は『Faith! Faith!』とまたもや聲高く鳴つた。其處には夜を通じて恐怖と憤怒の叫聲があつた。又この叫聲が段段止むとそれが漸次に笑聲と化した。何か空から輕る輕る飛んで來て木の小枝に懸つたのを手に取つて見ると、驚いたことにはそれは桃色のリボンであつた。この詰らない一小リボンは此處に恐怖失望の急激な表現を得たのである。グードマンは發狂して林中へ林中へと進んで行つて、風が彼を笑つた時彼は叫んだ、『ははは、一番どいつが笑ふ奴だ。そんなことで驚くやうな僕ぢやないぞ。女巫も來い、魔法使も來い、インデアンの加持坊主も來い、鬼も遣つて來い、グートマン・ブラウンが此處へ遣つて來たぞ。』



ホウソーンは大藝術家に相違無いが、その影響はさう大なるものが無かつた。將來に於てもまた左うかも知れぬ。彼は自分の作品を花のやうに完全な縫箔とせねば承知しなかつた。彼は彼の頁を蛋白石の光で輝かし、自分の額に常に *em* の感觸を覺え乍ら恍惚境地で筆を走らした。ホウソーンのやうな文學者は世界を通じてさう澤山は居らぬ。彼は天國と地獄の間に於ける靈魂を結付け、おまけに仙女との友情をも忘れないといふ不思議な作家であつた。日本ではホウソーン式の小説家を見出すには今日の時代は不適當かも知れぬ。然しホウソーンはいつの時代にも出る、又いつの時代にも出ぬ文學者であるといふことが出来るから、日本の今日が不適當だともすれば過去の日本も同様に不適當であつたと見ねばならぬ。僕の趣味からいふと日本に彼のやうな小説家が一人位はほしい。(アーサー・ラ  
ンソムのホウソーン論に依る。)

## シエレー

夏になると海水を慕ふのである。白砂の海岸に身を横へて青く光る海水を見る時の心持、さうして頭を上げると、夏雲奇峯多しで雲は千種萬態をなして縦横に飛ぶのである。徐に耳を洗ふ波濤の音楽を聞いて夢に入るのも妙ではないか。嗚呼海！ 嗚呼海！ 海と雲とは想像と情熱のシンボルではないか。彼等は盡きざる「青春」を説明して居るのである。何等の生命と何等の自由とを有するぞ。彼等は達し得られざる精神的希望と快樂のため、狂妄を極めつつあるかの如くである。撃てば返す波濤、巻いて又戻る雲の一隊、彼等は人をして哲學者たらしむるのであるが、人をして詩人たらしむるものでもある。所謂神聖なる狂人たらしむるのである。詩人は變化と不定を愛する。變化と不定は海と雲との状態である。

余は海岸に座して海と雲とを見る時、必ず英國の詩人シエレーを想起せずには止まぬの



である。シエレーは海ではないか、雲ではないか。彼は海と雲との情熱を有し、それ等の變化を以て其理想としてゐたのである。彼の心は常に新しきセンセーションに饑ゑてゐたのである。活動に饑ゑてゐたのである。彼が伊太利のレリシにゐた時、或友人は「シエレーは靈である。今來るかを見ると、今は已に遠くにある。誰も彼が何處にあるかを知らぬのである」と云つたことがあるが、彼は詩の上に於けるのみならず彼自身が恰も海や雲の變化不定の如しであつた。けれども彼は、大なる彼は海と雲との靈を有してゐたのである。彼はウオヅウオスの如く一定の理想と、自然に對して動かす可からざる尊敬とを有してゐなかつた。其所が彼の短所で又長所である。彼は常に想像の羽翼を張つて夢の空中を飛揚することが出来たのである。彼は自然を見るに批評眼を以て見なかつた。彼は人が美人に酔ふ如く、自然に酔つて自分を忘却し終るのである。自己のインテレクトを忘れるのである。彼は *As summer clouds disburdened of thier rains* で、夏雲が雨を降らすが如く想像の雨を詩上に降らしたのであつた。遂には想像が想像を産出して、自分自ら其想像に彷徨して收容する事が出来ぬと云ふ有様であつた。何等の豊富なる想像力！彼は自然の詩に於て充分に自己の天才を發揮し、充分に自己の情熱を展開したのである。彼は雲と題す

る詩中に云ふ如く「余は變化するも死する能はず」——シエレー自身は斯くの如きものであつた。

彼の想像が暴れ彼の情熱が激して來る時彼は確に人間界のものでは無かつた。或批評家の云へるが如く、天人の仲間であつたのである。何等の想像、何等の情熱、彼は僅僅三十歳で死むだけども恰も九十歳迄も生きた人のやうな活動をして死むたのである。彼の三十年は不思議な三十年であつた。彼は海の如く激しく動き雲の如く變じ去つて死むたのであつた。彼は三十に成らぬ時已に其の友人メドウキンが云つた如く「シエレーは老衰し、近眼であるから腰が屈むで、彼の髪の毛は灰色」であつた。天女の愛する男は青年で死すと云ふが、彼シエレーは天女に愛された一人であつた。

彼は勇壯で最も自然なる叙情詩人であつた。英文界に於て最も大なる叙情詩人であつた。然れども彼は缺點が多かつた。彼の作品は美術として充分なるもので無かつた。彼の作は順る不調和であつた。彼は作するに餘りに性急であつた。彼は餘りに遺放しであつた。彼は事物を客觀的に見る事が出来なかつた。彼の作は不一致で其作の多くは不生熟のものであつた。彼は成熟するのを待たずして其作を公にしたのであつた。彼は細事に無頓着で美



術家として最も必要なる細心を缺いてゐたのである。彼は常に大なる意味に着眼して讀者を少しも顧みなかつた。彼は餘りに多くを作つて餘りに多くを出版した。彼は一詩が成ると直ちに公にした。其詩を作りつつある時でも他の感興を得るとそれに轉じたのであつた。詩人は作られたものではなく、實にシエレーは生れた詩人であつた。彼は神聖なる狂熱を有して自分を自分で支配する事が出来ぬ位であるから、従つて字句を練るなどの末技は少しも顧みなかつたのである。彼は字句の大ならむよりはその想の大ならむを欲した。自然が變化と不定とを以て生命とする如く彼はそれを以て理想としたのである。彼は海の如く然り、又雲の如く然りであつた。

千八百二十年一月二十六日以来、シエレーは妻のマリイと共に伊太利のピサに住居してゐた。千八百二十二年の夏はバイロンと避暑しようといふ約束があつたが、シエレーはバイロンに厭いて來たのみならず、彼は嘗て「何も作ることが出来ぬ。バイロンとは餘り長く一所に居過ぎた。バイロンは太陽で余は螢の様なものだ。太陽の光線は螢の光を消して仕舞ふのである。余は詩の上に於てバイロンと競走せむとして余の力を且つ疑ひ且つ恐れつつあるのである。」と云つた如く、大なるバイロンは自分の詩の製作上一の妨害であると

感じて來たのであつた。所で友人なるエドワード・ウキルリアムスと共に、五月の一日レリシとサンテレンジヲの間なるカサマガニに夏場所を定めたのであつたが、シエレーが脱俗的精神は此處に於て一方ならず満足の體であつた。或る人に「余は今神聖なる灣中に生活しつつあるのである。時には西班牙の戯曲を讀むたり、時には神聖なる音樂を聞いたりなどして」と手紙を送つたとあつたのである。然り彼は神聖なる音樂を聞きつつあつたのである。誰が其音樂を奏したのであつたか、それは同居者なるエドワードの妻であつた。其名をジェーンと云ひ、容貌秀麗、其舉止優美なる婦人であつた。ジェーンは活發で恰憫で一舉一動男子を惱殺したといふことである。特別高等の教育を受たといふのでは無かつたが得易からざる才女である。シエレーの眼にはジェーンは幸福と慰樂の空氣を持つて來るので、多情多感なるシエレーは、ジェーンを愛したのであつた。その愛なるものは所謂ブラトニツクで、一點心に耻づる所は無かつたのであらう。シエレーがジェーンに贈つた名篇は數章あるが、其中で最も天下に聞えて居るのは「ゲター(樂器の一種)をジェーンに贈る」と云ふ一篇である。

其の句の中に「故に此のゲターは廣野や空や森や山や又種種の聲を發する泉水の好調を



唱ひ、小山の反響や小川の靜なる聲や鳥や蜂の妙音や夏の海の獨語や雨や露や夕景の空の好調を唱ふたのである。又吾人の世界をして激發せしむるが如く、稀れなる、不思議なる聲色をも解するのである。然れどもこのゲターは觸れる人の如何によりて答ふるのである。必ずや最も高尚で最も神聖なる調音を、余が愛するジエーンばかりに洩すであらう』などといふ句があるのである。

ウキリアムス夫妻とシエレー夫妻が借りた家は、家といふよりは寧ろ小さい船かパス・ハウスといふ方が適當な位で、水際に立つた平家で漁師が船道具や何かを入れる爲に作つたものであつた。二間と勝手と小さい一間の二階があつた。此の家の取得と云ふのは海に面した廊があるので、後を見ると山山が重なつて樹木が茂り空氣は清く風物極めて閑雅であつた。朝來水は家を洗ひ廊にある鐵の手摺は錆び、壁や柱は海風のため其痕跡を留めて居るので云はば家自身が水浴をして居るといふ有様であつた。海と雲との再來ともいふ可きシエレーは此處に於いて頗る幸福であつた。其の幸福なる生活も僅の間で、五月一日に移つて來て七月八日に溺死したのであつた。彼は面前に斯る大不幸があるとも知らずに引き越して來て以來、彼は友人に「天は青し、氣は清し、余は大満足なり」と書いて遣つたこと

があつた。今は塵の世の聲は耳に入らず四面の風景は美である。近隣の住者は太古の風を存してゐて、共に談じ且つ笑ふ所のものは自ら信じ自ら愛する所の人達である。彼は勇氣を鼓舞して大篇「生命の勝利」を草し初めたのであつた。

シエレーが母國の英國を去つて遠く伊太利を放浪する理由の一は、自分の詩に對して一般の同情が無く冷淡極まるのに奮怒したからである。斯くも世の同情心が無いのは、自分に詩人といふ資格が無い爲めではあるまいかなどと自分乍ら自分の作を疑ひ始めた位であつた。自然彼は時には大きな憂鬱に沈むで、筆さへ握らうと欲せなかつたことがあつた。

「余は筆を斷たうとは思ふが、一種抵抗す可からざるインプルスがあるので詩作を廢せぬのである」と云つたことがあつた。彼は青年詩人キーツを筆で殺したクヲタリー・レビエウ紙上で攻撃せられたことがあつた。又キーツの死もこの雜誌の攻撃が一原因であるといふことが天下に知れてから、一長篇「アドネスを哭す」を草して、倫敦の一友人ヲリバーなるものに（ピサで其一篇を自費出版して小冊子となして送つて）其配布を依頼した。又ハントに手紙で「余の氣力は消滅し終つた。最早や詩作の勇氣は無いのである。此の一篇アドネスが不成功で何等の反響無くば余は斷然筆を握らぬのである」と云ひ送つたのであつ



た。アドネスは敢てキーツの薄命を痛嘆するのみならず自分の運命を悲鳴したのである。キーツを借りて天下の無情を激怒したのであつた。夫の溺死後妻のマリーは一友人に手紙を送つて「アドネスはキーツの輓歌で無くて、シエレー自身を計ふたのである。妾は一日と悲哀を以て過ごして居る」と云つた。マリーは夫の死後二十年の長月生存してゐたが、思ふに日日アドネスを読むであらう。アドネスのピサ版の中に小さい絹で作つた袋の中にシエレーの灰が入れてあつたのが、マリーの死後発見せられたといふことである。余は時時これを想起して涙の落つることがあるのである。

マリーはシエレーの文學上の補助者たりしのみならず、マドンナの靜謐と母の慈愛とを以て戀人たるシエレーを常にベデスタルから笑を以て見下してゐたのである。シエレーを戀愛せるのみならず又安慰して、一點心に疑といふもの無く母が子を信するが如く信仰と愛とを以てゐたのである。シエレーは一書をマリーに捧呈し、其文中に「余は眼の中に火神の火が永遠に燃えつつあるを見る」と云つたことがある。

余が海岸に横はりて海と雲を見そしてその想像は忽ち詩人シエレーが終焉の狀を顯して來るのである。嗚呼！何等悲慘の極なるぞ。天下に慘狀ありと雖もシエレーの最後程憐

れなるは無いのである。

シエレーは避暑地に於て作詩する傍ら其快樂とせる所は紙で小舟を造り、其の小舟を波の上に浮べて其浮動する有様を見て居るのであつた。キーツの傳記著者ドウデンは「彼は如何なる歡喜を以てこの單純なる遊戯を成せる。其熱心なること驚く計りであつた、船の見える間は恰も夢見て居る如くであつた」といふたのである。彼は昔て Valley of Health の池の中へ紙の小舟を浮べて、風に吹かれて難船する狀を見て「余は其の舟の中へはひつてゐて共に難船したら如何に愉快であつたらう。必ず死するといふ方法の中で最も望まじきものであるであらう」と云つたことがあつた。彼は海水とは先天的約束を以て産れたのである。嗚呼水には引力あり、水には美——悲しき美ありて、其美がシエレーのみならず詩人なるものを引きつけるのである。彼シエレーは、レヲパーデが云つた如く海中で溺死するを以て最上の喜びとしてゐたのである。故にシエレーは波上で危険を冒すことを何とも思はぬ。マリーをマリーの家から連れ出して、イングリイシュ・チャンネルを渡つた時も殆ど難船せぬ許りであつた。又ゼネバの湖水でバイロンと共と難船したことがあつた。シエレーは「バイロンは泳ぎが上手であるので衣物を取つた。余も左様した。腕を組むで、



今にも船が轉覆するのを待つてゐたのである。目の先きに死の來るのを見て少からず感激したのであつた。時には余は少しも恐怖なるものを感じなかつた。若しもバイロンが傍にゐなくて、余獨りであつたら、少しも苦痛なるものを覺え無かつたのであらう。バイロンは余を助けようとするのであらう、而して余は爲にバイロン自身が一身を失ふ様なことがありはしまいかと思つて忍ばれ無かつた』といつたといふのである。其の後最後の難船前一年、レグホーンとピサとの間で難船したことがあつた。同船者レベリなるものが、先づウキルリアムスを助けてからシエレーを助けるから歸つて來るまで其處を動かなくと云ふと、シエレーは『宜し一生の中で今の様に心持の好いことは無い』と大笑したといふことである。シエレーは水を恐れぬのみで無くて水に迷つてゐたのである。水は一種のミステリーと彼のためには顯はれたのであつた。サンテレンゾといふ所で、例のジェーンと、ジェーンの子供とを勧誘して獨木船に乗つて海上遙かに出掛けたことがあつた。ジェーンは海岸附近を離れぬと思つてゐた所が、波は暴くなる、船は沖へ沖へと出掛けるのであつた。ジェーンは船を歸して歸してと云ふにシエレーは夢でも見て居る様で一向取合はぬ。突然彼は眼をあげて『さあこれから此處で、一所に宇宙の大秘密を解決しようではないか』と云

つたので、ジェーンは驚いて泣いたと云ふことである。其後ジェーンは人に語つて『シエレーは何を仕出かすか知れやしない』と云つたといふことである。

シエレーは水を恐れなむだのみで無く、死其物を恐れなむだのである。彼はアドネスの中に云つた如く、死は則ち釋放であつて身を自由ならしむる唯一の路であると考へたのである。死に依りて初めて宇宙の精神と一致し、最大快樂を得るのであると信じたのである。彼は常に靈魂の不滅を唱へたのである。彼は嘗てトレロネーに『余はプラトウヤベーコン以上を知らうと欲しない。余の心は平靜である。余に一の恐怖なるもの無し。死といふ大なるものが來て吾人が土魂の覆を取り去つてくれたなら、所謂大秘密は決せられるであらう』と云つたことがあつた。彼は常に死と水とを結びつけてゐたのである。彼は私かに水に依りて死し、以て宇宙と同化したいと思つてゐたのは争はれぬ事實である。

六月二十日、ハントがゼノアに着してレグホーンに向つたといふ通知を得て、七月一日ドンデヤンなる自分の一本帆の小舟に乗つて、ウキルリアムスと共にハントに遇ひに出掛けたのであつた。レグホーンからハントを連れてピサに趣きバイロンの宅に一時足を止めた。共にピサを見物して一日を費し、其翌日午後ウキルリアムスと共に小舟に乗つて歸路



についたのであつた。舟にはウキルリアムスと其外、ヴピアンと云ふ少年の水夫とであつた。其當時天候の暑氣は非常なもので、其邊の僧侶達は降雨の祈禱をして雨降れかし雲出でよと望むでゐた。今にも大降雨の來らむとする模様があつたのであるが、シエレーはこれを冒して海へと乗出したのであつた。バイロンに屬する小舟に居るトレロニーはシエレーの舟の行衛を見てゐたが、段段深霧の中に入つて見え無くなつた。それで彼は船中に入つて寝た。晝寝から目を覺ますと、海邊の船共は大暴風雨の爲に準備一方ならずといふ有様である。間もなく雷雨一番大降雨で天地も破れやうといふ有様となつた。二十分間許りで突然雨は止むだがシエレーの船の安否は如何。少しも知るに由無しといふ譯であつた。マリーとジェーンは、夫達が到着せぬので氣は狂亂の體であつた。一日経つても二日経つても、音沙汰が無い。三日目の朝トレロニーはピサへ出掛けてバイロンに話すと、バイロンは戦慄して其聲は出なかつたといふことである。それからトレロニーはヴァイアレヅヲの方へ出掛けて、自分でシエレーとウキルリアムスの行衛を調べ初めた。そしてシエレーの船の中にあつた水入れや徳利等を發見したのであつた。一週間経つてシエレーの死骸は、十八日にヴァイアレヅヲの海岸に打上げられ、ウキルリアムスの死骸はそれから四哩許の場

所ミグリアリーの塔近くに打上げられてゐたのを發見したのであつた。シエレーの死體を見ると一つのポケットにソホクルスの一卷と、其他のポケットにキーツの詩集が入つて居つて、讀むでゐたのを急に止めたといふ模様があつたといふことであつた。そのキーツの詩集は、レー・ハントがシエレーに海上で讀むだらよからうと與へたものであつた。

シエレーは、詩人キーツと其愛兒ウキルリアムスの側らで羅馬に葬られると決せられた。ウキルリアムスは英國へ送られることになつた。斯くてシエレーはアドニスに於て告白した如く、死むで羅馬に葬られたのである。キーツは死ぬ前友人セーブンがお前の葬られるといふ墓地には、春になるとバイレットが一杯咲くといつたら、最早や自分の頭の上に花が咲いて居る様に思はれるといつた場所でシエレーはキーツと共に眠つて居るのである。伊太利の青き空の下で百花の間で永久不滅の大詩人は眠つて居るのである。

太陽が朝東天へ花ばなしく登つたので、今日は良いお天氣であらうと思ふや否や、俄に一天が曇り出して太陽は雲の彼方に匿れて仕舞つた。其有様は恰も詩人シエレーの一生の有様である。シエレーの死んだ時、其年齢は僅に三十であつた。三十で死ぬとは餘りに早いではないか。しかも斯る巨作を遺したのは彼は千古の偉人たるを失はないのである。



余は夏になると海岸を思ひ出す。海の波濤と集り来る雲とを想像する。海と雲とは忽ち余の脳裏に薄命の大詩人シェレーを浮かしめて来る。余は彼の一生を思つては悲惨の感に撃たれるのである。

## 三人の名女優

### ベルナール・レヂヤン

私は、最早や十五六年の昔のことだが紐育でサラ・ベルナルの『椿姫』と『ハムレット』と『レグロン』を見ました。其後二年、ですからこれも十幾年以前のことですが、倫敦で名女優レヂヤンの『椿姫』を見て私はベルナルとレヂヤンを比較研究する便利を得た。

生粹の巴里子は *finesse* の一語で盡きる、このフイネスなる言葉は字書に巧計とか術策とか詐謀とかの譯が與へられて居るが、さう腹の悪い意味で無く手管が鮮かだといふことである。巴里子の眞價はその實質の上で無く全くその香氣その風味の上で論すべきものである。放埒の自由と盪惑の精練が緊張し切つた神経に結付いたのが生粹の巴里子であるとすると、ベルナルよりはレヂヤンの方が巴里子の代表者であると云はねばならぬ。レヂヤ



ンの舞臺藝術は頭から官能に訴へ、云ひ替へると官能から頭へ訴へたもので、ベルナルのやうに感情的で無く理智的なものである。單に本性的發露で無く精細に間違のないやうに打算された所謂開化された女性の聲である。ですからベルナルのやうに感情の野卑な温さや純な健康の力は無いが、レヂヤンは複雑な人間の性質を様様な方面から暗示して我を酔はしめ狂せしめねば止まぬ。ある人は「レヂヤンに接吻されると小さい赤い跡が附く」と云つたが、それはレヂヤンの藝術は批評的の刺を持つて居るといふ意味である。見て居ると感動はするが一方に批評的態度を全く忘れることが出来ぬ。然しサラ・ベルナルになると我我は自分を忘れて感激する場合がある。ベルナルはローマンチック（ユーゴーやジユマがロマンチックであつたやうに）である。何處までも劇的である。又何處までも技巧的であるのに反して、レヂヤンは現實的である。自然の半面はいつまでも野卑であるやうに野卑で、兎ても男子が開化させることが出来ぬ（實際どこに男の力で文明化させることの出来る女が幾人あるでせうか）女の動物的人間の本能を赤裸裸に示すのである。私は前にレヂヤンは開化された女性の聲だといつたが實際に於て彼女が開化された女性の一面と野卑な未開な本能を暴露する一面とを巧に結付ける點が即ち巴里子たる所以であると

云はねばならぬ。レヂヤンはベルナル以上に巴里子である。然しそれは彼等の相違で決して大小の標準ではない。

レヂヤンの藝術はどんなものでも選擇せず又修正せず取込んで居るのに、ベルナルは技巧家であるから其藝術は自然を其儘には取扱はない。レヂヤンは感情を生一本で行くのであるが、ベルナルは感情をラーケストラで鳴すのであるから自然に何等の暗示も無ければ野卑に心を動かす所も無い、徹頭徹尾塑造的な藝術で、彼女が舞臺で模造する感情の筋肉は一一明白に見える。

彼女の藝術は明くて精神的の深みを暗示せぬ替りに人生の悲哀喜悅を外面的に巧に説明するのであるから、「椿姫」で彼女がアルモンドに侮辱される場面で、外形的表現の完全を期する結果、彼女はまるで係蹄に掛つた動物が人に惱まされ苦しまされるやうに見えた。

レヂヤンならば戀人に捨てられた女の悲哀を鼻を擗む工合一つで語る場合を、ベルナルは何處までも鳴物入りの大仕掛である。アーサー・シモンズがベルナルのことを書いた文中にかう云つて居る、「人の全き肉は彼女の肉とともに苦しむ、彼女の聲は觸覺のやうに人を抱愛し人を興奮させる、震動をする變化のない音楽で、聲の破れるときは巧妙に破



れ、停滯するときは人の心を中ぶらりと苛立たせ、そして其聲が完全な諧音を保つて漸次に溶解されて行く。』

彼女の聲は彼女自身から分離することが出来るやうなもので、樂器のやうに自分の掌上に載せ、自分の指の先で巧者に弾ることが出来るものである。散文でも彼女の口から出ると、有らゆる音律と諧調を持つた詩の一種人間の詩の一種と成る。彼女の耳語は一綴音毎に明瞭に劇場中響き渡るけれども、それでも耳語たるを失はない。椿姫即ちマーグレットに扮してサラ・ベルナル（私が紐育で見た時已に六十歳に近かつたと思ふが、その若さ加減といつたら二十二歳以上とは受取られ無かつた位でした實に不思議な女優であつた）が舞臺へ顯はれた時、マーグレットは最初の間は巧に描かれた人形のやうでそれが段々と女性の有らゆる態度の經驗を嘗めて遂には子供のやうな純な深い變化に入つて死ぬのである。私はその當時新聞で讀んだ小話に従ふと、數分間前舞臺の上でマーグレットとして泣いて悲鳴を擧げて居たベルナルが、樂屋では何等激動した興奮した跡が無く平氣で笑つてシャンパンを飲んで居て、どんな性格を舞臺で演じても彼女は自分の性質を亂すやうなことは無い、詰り古靴を穿いたり取つたりすると同様な氣樂さを以て舞臺に起つて居ること

とが出来たる名女優である。そこへ來るとレヂヤンはベルナル位な餘裕が無いので、直接で眞剣な藝術の所有者である彼女は幕間で戲談を云ひ乍らシャンパンの品評を語ることが出来なかつたやうに思はれた。レヂヤンが椿姫としては野生的な肉の溫さ悲しみ失望の表現であつて、云はば感情から離れることが出来ない罪の暗示であつた。レヂヤンの眼と來たら其れは寧ろ下卑に熱烈な光を放つて、言葉などは語ら無くても自分の扮する性格を苦しめ喜ばしめ、失望させ又偽らせるに充分であつた。彼女はくぐくぐとした舞臺の技巧以上の素地で行ける正直を持つて居つた。ですから彼女の椿姫は可なり下卑たものであつたが、赤裸裸な人間の感情の半面は決して優美なものでないといふ現實張りの議論を正當とする、ベルナルのマーグレット以上に力の強いものであつたと云はねばならぬ。眞裸な耻を知らぬ、悲しむ場合は全精神を擧げて悲み、全筋力を擧げて悲しむ憐れな恐ろしい人間性の暴露であつたのである。椿姫と云はず其他如何なる女性を演じてもレヂヤンは（レヂヤンの得意のものはサツホとザザであつた）少しも扮装無しに動物的人間性を示す名女優である。彼女が激烈に人情の悲哀を舞臺に描く時は丁度病氣に悩む動物のやうに見え、無學で下等な女が戀愛を語る場合のやうに官能の齊整を全く忘れる現實一點張りであるが、彼女は肉



の悲み或は肉の愛に對して決して懷疑者の態度で無い、何處までも眞理の博識者といふ純白性のお蔭で彼女の下等な表情も藝術化されて顯はれるものである。故に彼女の藝術は自覺を持たぬ奇怪であるやうに見えるけれども、決して美の歸着點を忘れては居らぬ。前にいつたやうにレヂヤンはベルナルのやうに自分と扮する性格を別に分けて取扱ふといふ餘裕を持たぬ、彼女は即ちマーグレットでありサツホであり又ザザであるのである。ベルナルは感情を藝術の標準で整理するけれども、レヂヤンは感情をその儘に表現して、結果として人類の根本的感情を暗示する深みを示す場合が多い。兎に角彼女の巴里子である點から彼女の藝術は巴里子の藝術である。然るにベルナルは彼女に比較すると不純な分子が多いのであると思ふ。

露西亞のツルゲネエフは嘗てかうベルナルのことを書いたことがあつた。「彼女は單に指先の藝術、麗はしい聲に産れていい學校で教育された。然し彼女に自然的な所が無い。何等藝術的な資質を持つて居ると思はれない。彼女は單調子だ、一言で云ふと冷やかで乾枯らびて、最も高い意味で彼女には技能の一閃光さへも無い。彼女の歩み工合と來たらまるで牝鷄同様、彼女には身體の恰好が無い彼女の手の動かし方は故意に角張つて居る。然し

諸君は何故に彼女はあんなに評判かと質問するだらう。彼女の世間的評判などは僕の知る所ぢや無い、唯僕が思つて居る所だけを語ればそれで充分で、僕は意見を同じくする所のものを發見すれば幸福だ。」この評は可なり酷評といふ可きものである。又ツルゲネエフの書いた時は随分の昔であるから或は技巧的にベルナルが圓熟してゐなかつた時代と見ねばならぬ。だが私は牝鷄に似た歩み工合や角張つた手の動かし方を彼女のハムレットとレグロンで見て微笑一番せざるを得無つたのである。「我々はみなハムレットだ」といつたヘーヅリットに従ふと、男ばかりで無い女でもハムレットたることが出来ぬ譯は無いのであるから、今ベルナルといふ實際の上では可なりの老女がハムレットに扮したからと別に不思議に思ふ所は無いが、彼女は女で男の役をするといふ點に好奇心を持つたものであるから、已にその出發點から技巧に捕はれた弱味があるのである。觀客の方でも彼女に長い詩趣とか痛切な悲劇分子とか興味ある心理的研究を期待するのは期待する方が悪いと云はねばならぬ。

ベルナルはハムレットとして調子外れに舞臺を歩いて、如何に牝鷄の歩み工合とはツルゲネエフはよく云つた、頭を左右に振つた様子といつたら、哲理の譚などは論外で、發狂



的な熱情があつたばかりであつた。沙翁の想像と詩美は何處にあるかと思つたものは私人で無かつたであらう。前にもいつたやうに彼女は自分自身をどんな性格を描く場合でも常に冷やかに保留して置くのだから藝術が一元的に取扱ふ絶對的な強みが無い。であるから彼女にハムレットを扮せしめるのも無理だが、彼女のハムレットは散文的になつて仕舞つた一種の變性男子を示して、感情一點張りでも少しも理智的煩悶が伺はれなかつた。そりや勿論ベルナル其人の研究にはこのハムレット位好都合なものは無つたでありませう。何故なら彼女の舞臺上の癖即ちマナリズムは遺憾なく顯はれてゐたからである。前にもいつたやうに所詮彼女は技巧家で、不幸に彼女は技巧の力も限りがあるのを知らなかつたからハムレットまで演じて、彼女は急性な無常識な芝居じみた妙なハムレットを提供した譯である。技巧に巧な彼女であるから、全體の劇として大局面の精神は失つたのであるが細い箇所に注意する所があつたと見えて（それは私共の素人には分らぬ所だが）俳優仲間では中好評であつたさうである。昔シバールやワルポールはその時代の名優ギヤリツクのハムレットを嘲笑したと本に書いてあるのだから、ベルナルが人から非難されても同優は平氣なものであらう。彼女は稱賛や攻撃以上に超然たり得る位の經驗は積んで居るでせう。兎

に角一種不思議なハムレットを世界の演劇史に残したものだ。またその點で彼女のレグロもハムレット同様な運命を描いたといふことが出来る。ベルナルは勿論技巧をもつとも卓越した特徴の一とした名女優であるが、幸ひな事状のもと即ちヘエドラとかトカスとかフキドルとか前記の椿姫とか實際の女に扮する場合になると男子に扮装して目立つて見えた癖即ちマナリズムが一種愉快なアクセントと變つて、特種な箇性の表情となつて観客をメスメリズムに懸けて仕舞ふ。私は彼女の成功した役としては椿姫の外見では居らぬ、本に書かれて居る所に依ると彼女のフキドルは常非に結構なものであつたと受取られる。シモンズはかう書いて居る、「フキドルを書いた時ラシオンはサラベルナルを豫想したと云ふことが出来る。今日の詩人が書きおろした所で、彼女の藝術上の制限を有利に完全に使用することは出来まい。この劇は劇的詩といふ觀念と等しく舞臺の觀念を以て書いたものだ。嘗てラシオンは古い平凡な熱情が無いと論ぜられた時代もあつた。だが今日ではラシオンの音韻はヴェレーヌの音韻で、その言葉は散文のやうに單純直率を極めてしかも彼は詩人中で最も感情的な一人であると信じられて居る。フキドルの性格が持つて居る熱情は變則異常で、狂氣じみて居るが、それを表現する言葉は決して無法放肆なものでない、



明瞭單純、よく節制されて正確明晰を極めて居る。其處に顯はれた所のものは慣例的と實現的とがよく巧に平均された藝術であつて、ベルナルがそれに扮する場合、彼女の藝術は同程度に間違のない良く平均された練達を示したのである。ベルナルが情に激した時には齒でその言葉を嚙切つて、口からそれを吐出す工合恰も餌を食る野獸よろしくであるが、少しも靈の威嚴と抑制とを失はなかつた。彼女が詩句を取扱つた不可思議な扮表はラシーンに正當な空氣を與へたのである。彼女の聲のうちに有らゆる美の種類を聞いてまるでヲイケストラに耳を澄まして居るやうであつた。近代の散文劇では彼女はヲイケストラの樂器を澤山使用しない。彼女は自分の仕事に對する喜びを以てその言葉その句を語つた。彼女は理解ばかりで無くその緊張した全神經を示した、此劇では詩で彩色せられ悉く美に服従して破れないハーモニーを成して居る。『随分この評に依ると立派な演出であつたと感ぜねばならぬ。』

ベルナルは技巧家であるから、彼女が役に成功せぬ時位儂れな俳優は無い、さういふ場合では唯一つの女優を眼前に見る丈けでただ自分の役を勤める熱の無い一技巧家たるのみであるが、彼女の技巧が完全に舞臺で成功すると、彼女は生き動き泣き笑ひ此處に眼に見えるヲイケストラを現示するのである。彼女はレヂヤンと共に、又伊太利亞のデユセと共に、近代の名女優である。

## デユセ

私が伊太利亞の女優デユセを紐育で見ましたのはベルナルを見ましてから一箇月足らずの間で、矢張十年以前の昔に屬して居ります。デユセが米國に渡つたのは多分その時が最初であり又最後であるだらうと思ひます。デユセは不幸な時期に米國の演劇界に足を踏込んで、彼女が技量相當の評価を得ることが出来なかつた理由の中で、その當時の米國演劇界の事情を私は先づ以て最大理由として此處に語らねばなりません。

デトリと云へば其の當時（十四五年前）米國の興行師中の大興行師で飛ぶ鳥落す演劇界の大勢力でした。藝術的に進歩した今日の米國演劇界では彼は過去の死んだ歴史に過ぎないが、彼の生前に成した偉大な功績は今でも人の腦裡から去りません。彼は名も無い



田舎の一少女を抜擢して来て、廣告の力で即座に名女優と もち上げ人目を驚かしたのを見ても如何に米國演劇界が幼稚であつたか知れませう。(言葉が少少皮肉に渡りますが貞奴が大きな遊女の鬘と襦袢だけの力で悠然と米國で日本の大女優ですと成澄ましたのも不思議はないのである。)デーリー興行師は金を湯水のやうに舞臺へ掛けて、派出な美しい一種の見世物と化けさせる名人であるから、今日では過去の遺物となつた所謂スター・システムの完成者であつたのです。一人の女優を光らせるため其他の俳優を殺したばかりで無く、筋さへ縦横自由に書きかへた。デーリーの手に掛つては作家の威嚴などは存在しなかつた、ですから沙翁でもデーリーに捕へられて悲しむべき待遇を蒙つたのです。デーリーの大規模な、れん、の力でリハンといふ一少女は一躍米國の大女優と成つたのです。又リハン嬢ばかりで無い其他虚名を一夜に賣出したものがある。私はリハン嬢のボルシヤを見ましたが今でも之れを忘れることは出来ません。(私は十幾年前には毎晩のやうに芝居を見てあるきました——東京の郊外に居る今日の私はまるで演劇界の門外漢であります。)序ですからリハン嬢のボルシヤのことを一寸書きますが、如何にもスターの光榮を獨占したボルシヤでした。デーリーは幕切れが引立たぬとて餘計な文句をボルシヤに語らせました。

所有者で無かつた。ある批評家の如きはデュセに冷淡な態度を示して完全にその藝術觀の低級であるのを暴露して平氣で居つたのを私は記憶して居る。私自身としてもその當時に於ては必ずしも進歩した獨創的な藝術觀を持つて居なかつたのは勿論であります。(今日でも人に向つて兎や角舞臺上の藝術を語る資格は持つて居ませぬ。)十五六年前の米國の演劇批評界と來ては七分通りは興行師の範圍で、その餘の三分に生活して居る批評家の意見は所謂田舎趣味を脱してゐなかつたものです。であるからデュセの極めて自然で、しかも心理的な演出(ある歐洲の批評家は「デュセのアクチングは批評である」と書いて居る)と米國人に了解され無かつたものです。如何にもデュセを見るには同情ある理智の力で彼女が「心を持つた人間」として眼前に顯はれるのを洞察せねばならぬ。故に彼女を見て不確實な感情や誇大な動作の刺戟(一般に精緻な敏感の所有者で無い米國人はこれ以外に演劇を受取ることが出来無かつた)を與へないから普通の看客には無味淡白過ぎる、然し伊太利式の單純と直情が彼女の價で、若し看客が適當な敏感を持つて居ると彼女を見て必ずや一種の苦痛の快感を受けるであらうと思ふのです。

彼女は悲劇の心で、事情が齎らす運命の前に投げられると如何にも恐ろしく堪へること



又ボルシャが一人で語るため其他の役者を舞臺から引込めなどしました。デーリーは専制者でしたリハン嬢は彼の人形でした。デーリーは藝術は了解しなかつたが看客一般の呼吸を飲込んでゐたのでいつも興行で大成功を成したものである。デーリーばかりで無く其當時米國の興行師で、ダニエル・フローマンでも稍後輩であるがベラスコでも皆デーリー範疇の男であつて、その提供する所のものは悉く一種のショウ（見世物）であるに過ぎなかつたのである。今日から見ると如何にも低級な次第であつたのです。

かういふ時代にデュセが乗込んだので、云はば紅葉露伴の全盛時代に自然主義の小説家が飛込んだやうなものであるから其口に合はぬのは無理も無かつたのである。それに加へて伊太利亞の名女優デュセは、紐育の看客がベルナルの派手な通俗的に了解される所謂お芝居気分につき酔つて居てその酔からまだ冷めぬ時であつたから既に其處に七分の損があつた。デュセは一足先きにベルナルが米國へ乗込んで居るのを知つて居たので紐育で鉢合せするのを避けて、彼女は先づ第一に幕斯致で顯はれたのは利口な行爲と思はれた。然し彼女が紐育へ來た時言葉を盡してベルナルを賞嘆した演劇批評家（この階級の文士位信用されぬものはあるまい）は今度筆を新たに於てデュセを嘆美する異つた文字の

が出来ぬ孤獨の精神的空氣を創造するのであります。（私は其適例をデヲコングで見ましたこの事は後で書きます。）彼女を充分に味はふには看客は想像の酒を飲むことが出来る詩的情緒を持つて居なくてはならぬ。デュセ其人はその想像の酒を飲む酒杯其物であるのである。私は彼女を三つの劇中で見て彼女の酒杯に觸れたのを喜んで居るのであります。

多少はベルナルとの競争の意氣込みからせう、彼女は紐育で先づ第一に『椿姫』を出しました。デュマの小説でも又在來の演出法に従ふとこの椿姫は外面的で、人生に忠實を缺いて居るとは云はぬが、嚴肅な批評眼から見ると技巧的に捏上げられた人生に忠實なるもので生一本の純正を缺いて居る。如何にも感傷的で十九世紀式の巴里の一部分を表現したもので、人情を寫すに當つても通俗な誇張な道からで、寧ろ不自然な劇と云はねばならぬ。巴里人であるベルナルは椿姫を演ずるとヒステリカルに演じました、而して通俗な米國人を飽くまで動かしました。この後で顯はれたデュセの椿姫は全く別途の表現であつて、女主人なるカメラリアは娼婦で無く、何處までも戀愛に生きる慾望の自然な若い女であつた。泣き笑ふ巴里ツ子式な軽い女で無く愛戀の苦痛に純正な生命を得ようとする正直な若い女であつた。演出法からいふと彼女は時に所謂劇的高潮に達した場合も少くなかつたが、



(例をいふとリセプションの幕でアモンドを見て眞青な顔をして其名を呼ぶ場合等)一般にいふと感情を發揮するといふよりは寧ろ感情を制禁した點で彼女が女優としての特徴を示したのであつた。これは如何に彼女が信賴することが出来る含蓄ある藝術家であるかを説明するに足る最大要點である。故にデュセの椿姫は原作者ジユマが描いた感傷的婦人性以上の表現であつて、肉の痛みで無く靈の苦しみを暗示したものであつた。デュセの椿姫が發した戀愛の呼吸は敬虔的奉仕の聲であつて、もともとこの不自然な悲劇が彼女の手につて極めて眞率なものと成り終つたかの感があつたので、一面から云ふと、デュセ其人を藝術家として論ずるに適當な鍵を與へられたものと云ふことが出来るが、世間の看客を對手とする劇の演出法としては餘り成功したものとは云ふことが出来なかつた。詰りこの劇で彼女はデュセとして成功し椿姫としては失敗したのである。

次に私の見たのはデュセの『マクダ』でした。アーサー・シモンズはデュセに關してかういふ言葉を書いたことがあつた、『僕はこの午後ボルドホールでウキスラーのカーライルの肖像を見た、而して僕は兩者(ウキスラーとデュセ)に同様な最後の藝術があるのを發見した。即ち完全な表情と完全な抑制とが完全に平衡を保つて居るので、消極的藝術の分子

の方も率然最も高潮した倣成となり終る。一般に俳優の藝術が落ち易い缺點又はデュセの各各の缺點を指揮するのは何んでも無い。舞臺藝術は虚偽の語勢と故意的誇張の混合物でもあらうが、已に消極的藝術の價值を有して居ることが取りも直さず積極的價值なのである。デュセが缺いて居る所のもが明白になつて初めてデュセはその藝術を創造し初める。デュセはこれまで誰も創造しなかつた藝術を人生から創造する、現實主義で無い一種の模寫で無い、人生其物で思想深い人生の喚起、實際であり又美麗である世界を創造するのである。これは一句一句譯したのでない意譯であるのだから其積りで讀んで貰ひたい。私はデュセを『マクダ』で見てシモンズの言葉が信實であるのを知つたのである。私は全くデュセを見ずにマクダを見た、又これを云ひ替へると私はマクダを見ずにデュセを見た、これは私がデュセなる女優は其扮して居るマクダと完全に合體して其間一毛髪も亂れたところの無かつたのをいふのであります。生の喜悅と生の悲哀に生きたマクダを完全に見たのである。已にデュセはマクダと同體に成つて居るのであるから、彼女は特種に誇張的な舉動や説明的な言葉の力説を用ゐる必要が無かつた。であるから看客(少くも私自身は)も音楽と見て頗る自然な藝術氣分を伴ふことが出来たのである。この劇は椿姫と異つて彼女



に相應しいものであるから、自身の説明であると同時に扮した女主人公の完全な表現であつた。彼女に對しては椿姫より八分の利のある出し物であつた。

伊太利亞語の智識の無い私でもデュセがダヌンチオの書いたチヲコンダとして舞臺で語つた言葉を聞いてその佳調和諧の發音に誘惑されました。英譯を讀んでも知れるがドラマチックといふよりは抒情的美辭の點で優つて居る劇である。然し最後は云はば悪い悲劇に終つてゐて必ずしも上等な作では有るまい。麗しい藝術の獲得と破壊と表象で、その表象を恐怖の形式で具體化したものである。全篇を通じて想像を唆かして作者は卓越した詩人であるのを思はしめます。チヲコンダの語る言葉は美麗な感覺的なものでその全生命は完全な音律の裡に動いて居つた。最後の幕でチヲコンダが失つた手を長い袖で匿して出て來るのであるが、餘りに痛ましく見えて其美は殆んど神聖にさへ感ぜられました。この劇では作者は伊太利亞人であり、扮する女主人公は伊太利亞人で、完全な寶石を完全な器に盛つたものだと言はねばならなかつた。デュセはダヌンチオの力で新しい藝術の力と血とを得たもので、私は彼女の最善な藝術を見たのを喜びました。

それから米國へデュセが持つて來た劇は其他ビネロの「二代目タンクエレー夫人」其他

三種あつたが、貧書生であつた十年以前の私には餘り高價な道樂であるから全部は見るこ  
とが出来なかつたのを今日でも残念に思つて居ります。可なり高い入場料を取つたと記憶  
して居ります。伊太利亞語であるから夫れ夫れ詳細に書いた筋書を與へて看客の便を計つ  
てゐました。



## 米國人に與ふ

米國人足下、君の偉大な浪漫主義はもともと氣位高い純な英國人の血から繼承したもので、いつも無邪氣で、また健康であるが、地理上の孤立（如何にも君の國は大きな孤立だ）で撫育されたが爲に、君は少くも過去に於ては、世界最大な「満足の權化」と成つて仕舞つた。君は樂天主義を亂用し過ぎる場合があるが、それは物質的にもまた精神的にも驚くべき君の資源が自然に然らしめる所であらう。かかる場合に君は他に對して、いつも保護者の態度を氣取りすぎる。勿論その態度も墮落の一種類には相違無いが、極めて愛すべき興味あるものであることはいふまでも無い。時として君は夢想者であるが、必ずしも君の夢は深いとはいへない。それと同時に、君は宣傳者であるが、君は自分の宣傳を信用し過ぎるの傾向がある。されども君は、どんな事情のもとでも、利己的淫逸の餌食と成らない點は我我を敬服せしめるに充分である。また君が任意に創造した生活は矛盾の生活その

ものであるが、その生活の上を活歩する君の態度の莊重さを眺めると、我我は君に何程でも敬意を拂ふものである。實以て君の生活は矛盾である、驚くべき矛盾である。君の國人の代表者一人を詩人のなかから撰むとすると、すぐ我我の念頭に浮ぶのは例のウキトマンだが、この男は偉大な矛盾の人格だ、夢想者と宣傳者の最も興味ある混合物だ。如何にも君の國にふさはしい詩人だ。この詩人の詩に、「僕は米大陸を解體せざらしめ、僕は太陽が嘗て照らせる最も莊麗な人種を作り、僕は僚友の愛で、僚友の終身の愛で、神聖な磁性ある陸土を作りたい」の言葉がある。如何にも夢想者の言葉である。又宣傳者らしい言葉である。エマソンもまたウキトマンと同型の人であらう。エマソンは、ホームズが「莫斯敦の州廳は太陽系の轂即ち中心だ」と云つてのけた放言を是認して居る。

この種の樂天主義乃至浪漫主義は、祭日氣分のトプタビドムの派手な衣裳で顯はれても、または神學者の威嚴ある黒い外袍で顯はれても、單に君の自己崇拜の一表現と見ては間違つて居るであらう。僕は君の態度を抒情氣分としては受取らない。なぜなら、君の態度のなかには明白に一種の叙事詩的迷信の脈が滾滾と流れて居る。實際、君の國位エピカルな國が何處にあるであらうか。僕が君の樂天主義を迷信としたならば、僕は確に誤つて



居るであらう。君の樂天主義は、實現的事實の聖な光の刺戟を受けて、壯大な信仰の領域にまで達して居る。有らゆる信仰の人のやうに、君もまた衝動的である。僕は君は決して抒情的國民で無いと繰返す。抒情的國民はしばしば無責任でもあり、自分自身を誤解することを喜ぶ場合が少くない。君のやうな衝動的國民は、頼まれもしないのに他人の責任まで自分の双肩に擔上げて、外面的理由でつべこべ語られると、もうそれで満足して人の勘定まで拂つて良い氣分に成つて仕舞ふものだ。かういふ行爲は、論理的には不賢明ではあるけれども、確に賞讃に價すべきものと僕は思つて居る。弱點があるとしてもその弱點は如何にも暗示的であると云はねばならない。我我日本人で、一旦抒情詩的情調が何物かに阻害せられて、無意味に躊躇したりまた時には野卑な行爲さへ敢てする場合には、その理由を、我我日本人が起つて居る位置や情況の貧弱に發見するであらう。然し君は米國人として、君が持つて居る樂天主義の信仰（ある意味では迷信とさへいふことが出来るが）に對して、多大の感謝を拂つて然るべきであらう。それに依つて、君は力強く恐れず時には愚かな舉動さへ平氣で遣つてのけることが出来るといふものだ。實に、愚かな舉動が出来る位幸福なものは無い。君はさういふ幸福な人間の最大なるものだといへる。君は世界中

の一番結構な國民だと思つて居るであらう。その態度は心理的に考察すると、丁度人生の苦痛疑惑を全然知らない富豪の一粒種の態度に比較することが出来る。少くも今日まで君は人生の痛ましい經驗を知らねばならないほど不幸で無かつたといふことを考へると、實に我我日本人は君が羨しくてたまらないのである。

ある文學者は、満足といふ言葉を無智文盲の一特質と了解して居る。僕はこの言葉を君に使つて居るが、それは決して僕の氣むづかしい僻性からで無く、君が支配し得て居る眞實に幸福な事情を明白ならしめたい希望からである。君は無智文盲で世界が渡れる。君は満足といふ福福しい笑を顔に湛へて世間が通れる。學問なんぞ君には不必要だ。學問は貧乏人のすべきものだ。君は嘗て世界地圖を見たことがあるか。恐く世界地圖も君には不必要であらう。何ぜなら、君の方からして全世界を發見に行かなくても、全世界が君の方へ遣つて来るからである。今日の米國人は、昔の米國入のやうに狹量でない。ソロウといふ男は、『北極の有らゆる現象さへ彈丸黒子の一村落コンコルドに發見せられる』と偉大な自慢を語つて居る。五十年前の米國人は今日の米國人で無い。然し、君のやうに廣く世界を旅行してしかも旅行した場所の知識何物を得ずして歸家する人間は他にあるまい。君米國人



は、他國を旅行するにも自分の圖書室や食堂や應接間を擔ぎ込んで、そして歸る時にはまたぞろ其等を擔ぎかへる。一寸皮肉にいふと、君に對する旅行の愉快は、取りもなほさず他の國に米國を發見せんとする一點に歸するのだ。如何に米國文明が他國に入りこみつつあるかを見んために君は外國旅行するのだといふことが出來よう。君は日本人のやうに知識を泥棒するため外國へは行かない。また君の頭腦は堂堂と環境を支配するほど固定して居る。一言でいふと、君の頭腦は我我日本人のそれとは異つて、デリケートで無い受動的で無い。従つて君は他國の現實に對しても冷やかな「見知らぬ人」であり得ることが出来る。いつも自分を忘れずに富豪の一粒種に屬する氣位を維持する爲め人一倍の身錢を切らねばならぬことは自然のことであるが、その爲め君は旅行地のどこへ行つても其國人の倫理を亂して歩く。日本の如きも以前は、物質的希望が冷やかな不自然の禁慾主義で工合よく制止されて來たものだが、米國流のチップなどが何程日本人の道德を腐敗せしめたか知れない。布哇を墮落させたものは、米國の宣教師と米國人のチップだといふことだ。また倫敦の倫理を墮落せしめたものは米國式の新聞とチップに外ならない。そして我々の日本人も、このチップと活動寫眞の爲にその倫理觀念を毎日墮落しつつあるのだ。

米國人足下、僕は今この節氣のない正直な米國觀を公にするに當つて、君の寛恕を切に乞ふ。「寛恕」といふ言葉は君の尊い特質の一だと僕は信じて居る。僕はしばしば君が、無言で品位あるヒュモアを湛へて寛恕の祝福を達筆に散布した實例を見て居るものである。「ヒュモア」といふ言葉もまた君の國人の尊い特質の一だ。君を動物に譬へたならば、さし詰め諧謔と機智で輝く小さな眼を持つて居る巨軀の象だ。象のやうに悠悠と君は人生の大道を歩いて居る。然るに聞く所に依ると、君は近來、歴史的に尊重して來た例の言論の自由を一方ならず破壊して居るといふことだ。これは實に遺憾の極である。ある人に聞くと米國に自由の言論無しといふことだ。僕はそれほどまでとは信じない。然しそれも君が、反省的態度を捨てて衝動的情調に捕はれた結果であるかも知れない。今日の君は如何なる場合に於ても衝動的である。

もう一度僕は君が世界地圖に對して無智であるといふ問題に歸りたい。僕は最初日清戰爭前に渡米したが、その頃日本と支那との區別を君は殆んど知らなかつた。また日露戰爭當時に於てすら、君は世界地圖から小さい日本を指摘することが出來なかつた。今日でも僕は君の日本に對する智識が何程進んで居るかを疑ふ。日米關係も、華盛頓と東京に於け



る兩國政府の交際に止まつて、まだまだ日米兩國民の眞實な交際とまで進んで居らないことを残念に思ふ。君のあやしげな世男地圖上の智識で、全世界の外交を君が論じようとするのだから、君位危険でもありまた滑稽な男はあるまい。

僕は宇宙の黄金色した中心を握つて産れたと思つて居る莫斯敦人の信仰は正當だと思ふのである。君は足を踏出して他國を發見する必要が無く、有らゆる世界は、丁度砂糖を追ふ蟻のやうに、君の周圍に集つて來るといふことは動かぬ事實だ。歐洲からも、亞細亞からも、血氣盛んな年の若い野心家は我も我もと君の富んだ領土へ入りこむ。君が人種平等を否定するといつて、怒るものがあるがそれは怒る方が無理だ。君が破れた着物を着て居る移民に對して、優者の態度を取るからとて、誰が君を攻撃出來ようぞ。成程、君が無邪氣の樂天家となりすまして居るのは缺點には相違ないが、それも他人がかれこれ云ふ問題ではない。僕は、君が如何に輕がると、しかも立派な態度で君の樂天主義を擔いで行くかを見ると賞讃せざるを得ないものである。若し日本が君のやうに樂天家となつたならば、それこそ國最後と云はねばなるまい。

恐らく君は、若し僕が君の文明なるものは必竟田舎文明に外ならない、君の文化は田舎

趣味で色彩されて居ると云つたならばむきになつて怒るであらう。また怒らぬまでも君は不愉快に感ずるであらう。然し僕が田舎文明で意味する所のものは、決して君が思ふ程輕蔑すべきもので無い。所謂プロビンシアリズムの眞精神の力で、國は墮落から逃れることが出來て、また人間の簡性も産れながらの眞色彩を失はずにすむのである。プロビンシアリズムは尊いものだ。田舎文明を發揮する所に、國の簡性が燦然と光輝を放つのである。今日の日本が在來の田舎文明を失つて居る實際を見て、どんなに僕は遺憾に思ふか知れない。なまじ世界文明を習つたばかりで、日本は尊い過去の田舎文明を棒に振つて仕舞つた。實際東京なども、紐育でいふとブルクリン位、倫敦でいへばブリキストン位の資格を得たばかりに、大江戸の過去を葬つて仕舞つた。僕は米國が田舎文明を維持して居るといふことは中中結構なことで、それが即ち米國の偉大な生命だとも思ふ。

エマソンは千八百三十七年、今より八十二年も以前だ、ハーバート大學で「亞米利加の學者」と題した一講演をした。今日の批評家は、この講演は米國學界獨立の鐘聲だと云つて居る位著名な講演であるが、僕からいふと、この講演も矢張プロビンシアリズムの一主張と見て初めて價值があると思ふ。エマソン自身にしても、世界的哲理を説いた積りでは



あつたらうけれども、彼に強烈な田舎趣味があつたればこそ、我我は彼を米國の文學者として尊重するのだ。また歐羅巴に於けるウキトマンの名聲も、プロビンシアリズムで肯定された理想的宇宙觀の上に懸つて居る。プレット・ハート或はヘンリー・ジエムスが英國で生活して死んだといふ事實は、米國が母國に拂つた敬意の一種と見ることが出来よう。マク・トウエンは田舎文士の優なるものであつたと云へる。プロビンシアリズムを全然取除いたならば、トウエンに何物が果して残るであらうといひたい。つい近頃死んだハウエルスにしても、彼の眞實の價値は、彼特有の一地方的文學の上にあると考へられる。桑港を太平洋岸の巴里たらしめたいと加州人は主張すると聞いては居るが、何故に桑港は巴里とならなければならぬか。そんな理由は何處にも無いぢやないか。桑港は桑港で結構だ。また市俄古を英國のマンチェスターと一所に見ようとする論者は天下の愚物だ。近頃流行の自由詩にしても、歐洲の新文學を田舎式の熱心で肯定するだけならば、何等の害は無いであらうけれども。若しそれ以上に走つた時は、それこそ米國人といふ本然の權利に對して冒瀆罪を行ふものと云はねばなるまい。米國文學の將來は注目するに價する。まだまだ眞實なる意味でのデレタンチズムが行はれて居るから進歩の路は開かれて居る。所謂商賣

人文士で支配された文學者位悲むべきものは有るまい。作家の眞生命は、素人文士をやめて悲むべき黒人作家となつた時に亡びて仕舞ふのを例とする。文學の問題ばかりで無く、君米國人の生活の上で何處を見ても偉大な印象を人に與へる所以は、君が素人であるといふ一言に懸つて居る。君は人間としても素人人間だと云へる、何をやらしても君は素人で始終する。金を儲けるにも素人の力で遣つでのけるし、また金を素人らしく費して仕舞ふ。君は學者としても素人ならば、書生としても素人書生だ。だが、この素人といふ位尊いものは無いのだ。外交社會で素人外交家ほど恐いものは無いさうだ。君が即ち素人外交家だ。近く華盛頓で開催せられる會合で、君の素人外交家たる本領は充分發揮せられることであらう。日本といはず世界各國が、君の素人外交に接するとたちちの有様だ。君はデレタンチズムの力で、世界の古い外交のある點まで救助した。所謂神聖なる濟度を實行したといへる。君は實に偉大だ。僕は君のデレタンチズムに對して大きな敬意を拂ふに何等の躊躇を持たない。僕は君に向つて脱帽するものである。

米國の普通教育は最も安い入札者の手で支配されて居るとある人が語つて居る。安い入札者といふのは女のことを指して居る。成程君の國の女は雑誌やチュウイングムの爲めに



頭腦を害されて居る。そして高い給金を要求する男子を教育界から追出したといふ觀がある。然し女で支配されて居る米國の普通教育界でも、日本の夫れに比較したならば十倍も優れて居るといへる。日本の教育界とは何ぞやといふ一問題を與へるとする。人は答へて半死半生の人間の避難場だと云ふであらう。身體が強くて精神の強い青年は日本では教育界に職を求めないことに成つて居る。今日日本の教育界を見渡すと、ぐちゃぐちゃ蠢動して居る澤山の教師は、云はば外國語の蓄音器たるに過ぎない。それでも外國語が満足に發音出来るなら結構だ。人間として他人の思想で生きて居るもの位憐むべきものはあるまい。日本の教育者が即ちそれだ。西洋文明に支配されて仕舞つて居る頭腦に、どうして自分の意見を立てる餘裕があらう。かういふ僕自身も、それ等の憐むべき人間の二見本に過ぎない。

安い給金の女が支配する米國の教育組織に澤山の缺點がある。文明を婦人化して、女崇拜の宗教を若い人間の頭に注ぎこむといふことは、確に缺點の大なるものであらう。米國の文明が婦人化して居るからして最高文明であるといふ説に、僕は必ずしも反對するものではない。また米國婦人の力ある精神が、無反省で無修養で、ただ金錢慾にかられる男子の手で墮落の路を急がんとする國の俗惡をある程度まで防禦して居るといふ事實に對しても、僕は決して盲目で無い。

世界何處へ行つて見ても、女崇拜のあるものが實行されて居らぬ所はあるまい。英國人は宛も自由を崇拜するやうな態度で女を崇拜する。ある批評家はその態度が緩急自在な所から人間の顎式だと云つて居る。獨逸人は冷やかな打算で女を崇拜して勝手道具視して居る。獨逸人に對する女は決して贅澤品で無く必需品となつて居る。佛蘭西人と日本人はどうかといふに、抒情氣分で女を取扱ふ結果として、憐忍らしく見せかけることが女に對する禮儀だとさへ考へて居るらしく思はれる場合が多い。然し何れの國民でも、君の國民のやうに宗教的信仰で女を崇拜するものは無い。どうして米國に、女崇拜が最初行はれるに至つて、それが實際的行爲として尊重せられて來たかといふことは確に研究に價すると思ふ。だが今日では、女崇拜も宗教としてはその最初の意味を失つて居る。人間が酒を飲み或は煙草を喫するやうに、等しく一習慣の程度まで墮落して仕舞つて居る。勿論、それが最初の宗教的權威を失つたとしても、一習慣としての女崇拜は時には愉快な習慣たるを失はない。然し如何なる習慣でも、餘り永續すると遂には無意味無感覺になり終るやうに、



米國の女崇拜も坊主の念佛と大差無くなつた。恐らく君は米國人として、女崇拜の缺點も罪惡も見ることが出来まい。それは極めて自然である。實際、黃白何れたるを問はず米國の新聞は皆な擧げて女崇拜を裏書して居るのだから、米國人として君が無批判でそれを賛同して居るのに何等の不思議はない。

新聞の表面から見ると、米國の新聞中でも紐育の新聞はきは立つて女崇拜者である。市俄古の新聞もその點では紐育のそれに劣つては居るまい。太平洋岸の桑港の新聞も女崇拜の爲め線香を焚いて居る。もとより太平洋岸地方に於ける女崇拜の熱が太平洋岸地方に比して一層高いといふことに就いては、其處に有力な心理的理由が存在して居る。僕は君に對して、女を赤裸な現實で調査せよの、また女崇拜教は過去の遺物としてのみ價值があるから寶物殿へでも入れて仕舞へと助言するものでも無い。また人生の苦痛を知らない、無邪氣で單純な、君特有の理想論もあつて女崇拜教を捨てるに忍びなからう。それから、第一、女崇拜を除く事となると、君の婦人的文明の眞精神が奪はれることになつて、黄金の偶像を盗まれた空虚の一殿堂に過ぎないことになるであらう。然し僕は君が歐洲大戦争に参加した時、如何なる精神的變化を君が演ずるであらうかと興味的眼で僕は君を眺めさ

るを得なかつた。君の文明は男性化するかも知れないと思つた。また、さうなると君の爲め祝賀すべきこととも思つた。戦争の苦痛が君の力を適當に整理したならば、君は必ずや嚴肅になり思想深くなり眞面目になるであらうとも思つた。君の樂天主義は莊重に成るであらう。若しさう成つたならば、君の一進歩だとも思つた。兎に角、君は樂天主義の假裝を捨てて、種種複雑な倫理問題の荆棘を開拓して賢明な一路を通ぜねばならぬ時代に、君は入りつつあるものと思つた。君は樂天主義をして眞實自覺せしめ、米國對世界の實際的比較を研究すべき時代に入つたものと思つた。大戦争が終つた今日から後を振返つて見たら、どんな結果になつたか。僕自身としては君に對する期待は全然裏切られて仕舞つて居る。君は戦争から何物も學ばなかつたのである。君の頭腦は他から何物も學ぶことが出来ないやうに作られて居る。また、君は何も學ぶ必要が無いほど天下無比に幸福な地位に起つて居るのである。

米國人足下、君の國民として初期時代は随分苦しいものであつた。争鬭的な大自然と戦ひその上にインデアンといふ敵があつた。さういふ場合に樂天家の體面を維持するといふことは、確に勇氣ある行爲であつたであらう。また、樂天主義に籠城することは、精神的



墮落から自分を援助する一番賢明な方法であつたであらう。然し、僕が君の眞實なる危険は君の樂天主義其物以外に無い、實際君の富有な資源で無意味に撫育せられ獎勵されて樂天主義位危険なものはないといふ理由は、樂天主義が多くの場合皮相的である爲め人間道徳の眞發展を阻害して仕舞ふといふ點にあるのである。實に君の樂天主義は過去に於てもしばしば人生に對する君の觀念や力を薄弱ならしめたものである。樂天主義は人生の避くべからざる現實境に起つて初めて、その眞價を發揮し得るものと僕は信じて居る。歐洲大戦争は君の樂天主義を力強め、整理する一大機會であつた。然るに君はこの機會を善用することが出来なかつた。依然として、君は今日でも樂天主義といふ微温湯につかつて不徹底な夢を弄して居るやうに見受けられる。

米國人足下、僕は繰返して云ふ君の米國文明は婦人的であると。然しそれは君の文明が薄弱なるまたは美食的エジキユラフであるといふ意味ぢや無い。日本の如きは世界の果で、英語でいへば *This side of a wire* に地位して、世界の文明進歩と直接交渉を持つて居ない。然し君の國も圖體こそ大きいけれども、太平洋中に浮いて居る悠悠たる冰山の國だ。他の世界との文明的交渉もつい近頃の出來事だ。僕は已に、君の浪漫主義は君の婦人的文明によく調和し

たものであるといふことは説いて居る。君にして君の衝動的情熱の本性が破壊せられざる限り、君が非現實的であり、また非科學的であるのは極めて自然の數と云はねばならぬと僕は思つて居る。然し僕が君を非科學的だと呼ぶと、僕の言葉を批評し或は否定するものが無いとも限らない。さういふ批評家は主に、男子の力で創造せられた君の肉體的表象のみを見て君を批判せんとするのである。だが僕の意見としては、君の物質的進歩は何等の理解無く、君の精神的婦人文明と同一の屋根の下で共同生活を營んで居ると思ふ。前にいつた如く、君の文明は弱けれども最高のものだが、不運の眞試験のためされない間は、その眞價は未定である。物質的と精神的兩方面が共同生活して居る結果、君は矛盾混合の一現象と顯はれて居る。僕は如何なる國でも、君の國のやうに、異つた二箇のものを力強い呼吸で結付けて斯くも驚くべく又不思議に見へ得ることが出来まいと思ふ。實に君は驚くべき國である、また神祕不可思議の國である。殊に驚嘆すべき點は、君の矛盾が十中の八九まで、如何にも自然で心地良げに見えることだ。然し今僕が、君の精神的文明と物質的進歩との間に理解が無いといふことは、結局君の國の男子と女子との充分な理解が無いといふことにも成る。男女相互の理解といふ點から觀察すると、僕の見る所に依ると、英國



の方が君の國より遙に幸運であると云はねばなるまい。米國には離婚數が世界第一で、又未婚者の數も他國以上であるといふ事實は、少くも僕の意見のある程度まで裏書して居るといふことが出来よう。君の國の男女はその眼を異つた方面に向けて居ると云つても、僕はさう間違つて居ないであらう。然し彼等が遂に同歸着點に會合するとしたならば、それは彼等が早晚神經衰弱に等しく懸るといふことを意味するのである。確に神經衰弱は文明病である。そして君の國民位この病氣に懸り易いものは無い。

君の國の女が神經衰弱に懸るのは、その衝動的生活が完全に滿されないからである。そして君の國の男がこの病氣を得るのは、二六時中休憩なき労働の結果と見ねばなるまい。實に米國の男子の労働は不合理不自然である。そしてこの労働病に捕へられたが最後、宛も章魚にすひ付かれた如く人はその自由を失つて仕舞ふ。米國に於ける男子の労働慾は如何にも決定的であり恐るべきものである。彼等は一生この労働を廢止することが出来ない。若し突然労働を廢したならば、丁度阿片吸ひが阿片をやめたやうなもので、一生ぶらぶらと何事をするにも不適當に終らねばなるまいと思ふ。米國男子の労働の習慣は國の大問題の一だ。君の國の婦人の懶惰生活と等しく國家の健康状態を害する社會の大問題に相違ない。

い。米國では男女共に、人生の眞實なる意味を理解して居らぬと云はねばならぬ。今日この問題を議論するには時には遅れては居るけれども、それに觸れないよりは、何とかその救済の路を講じた方が良からうぢやあるまいか。

十五六年前には歐洲の貧乏華族が米國の女を誘惑にせつせつと遣つて來たものだ。或は今日でもこの種の演劇が、米國各地の交際社會で演ぜられて居るであらう。年の若い女はさること乍ら、女の母親が第一に、華奢な指先と綺麗な髭のみの所有者である歐羅巴の貴族の嘆美者となつて仕舞ふのだから仕方が無い。またこれ等感傷的の母親以前に、米國の新聞が已に非常な嘆美者であるのだ。僕思ふに、君の國の女は君の國の男に對しては、遙に修養があり又文明的である。君の女なくして、誰が米國の美術を保護するか。君の女なくして、誰が米國の文學を進めるか。君の女なくして、誰が米國の舞臺を維持するか。米國の文化は女の支配權に屬して居るといつても決して過言ではあるまい。

米國の男子は女子に劣つて居る。修養が不足して居る。また談話家でない。米國の男子は宣教師が當分流行の宣傳者プロパガンダリストたることが出来やうけれども、理智的な談話家たるには眞實の修養を持つて居らない。この點でも米國の女子の愛を支配するに不充分であると云は



ねばならぬ。結局、これも環境と教育の罪とも云へる。

米國人足下、君の國の男子以上に談話家としての資格が無いものは日本人だ。四十になるまで無言の行を命ぜられて居る日本の女は不自然だが、男子が談話の愉快を了解して来たのはつい近頃のことである。若し日本の男子が歐羅巴の貴族の青年の如く、輕快な談話家であつて應接室に於ける米國の女の相手が出来たならば、日米親善の好結果はずつとの昔に擧げられて居たかも知れない。米國に於ける日本人は、應接室の隅を満たす無言の金佛の役目を果すに止まつて居る。英語が日本位流行して、しかもその結果の不満足な國は外にはあるまい。實際、日本人は外國語の上では下手も下手この上もない下手である。言葉さへ満足に語り得無い日本人の沈黙を黄金だと珍重した時代が米國にあつた。然しそれは過去のことだ。今日では日本人の沈黙は奸策である虚偽であると非難して居る。心にも思つても口に語り得ない身の不幸まで、これは假面をかぶつた役者の仕事だと難辯付けて居る。親愛なる米國人足下、僕は君に愛せられた時代もあつた。然しそれは過去のことだ。十五六年以前のことだ。

日本人位、君に接し乍ら、それでも君を十分理解しない國民は少いかも知れぬ。口を開

けば日本人は、君の國を『自由の國』と稱讃する。昔は兎も角、君の國に果して自由ありや否や問題である。『自由の國』といふよりは、君の國は衝動的情調の國である。この情調を多くの場合、感傷的に取扱つて居るのを僕は遺憾とするものであるが、不思議に君性來の理想がいつも君を感傷の墮落から救出して居る。君の衝動的情調は驚くべきもので、君は時代の變化希望もその情調から了解して居る。僕は今君の國に眞實なる意味で、自由の國といふことを許さなかつた。實際米國に於ける自由といふ二字は、不純な利功主義乃至危険な妥協と間違られて居る場合が澤山ある。

米國人足下、君の情調主義は君をして簡單明瞭に、時代の眞理を透察せしめて、適當な所置を君に採らしめて居る。君はそれに對して感謝せねばならぬ。僕は君の情調を嘆美するものである。僕は君を理智の國民とは決して受取らない。君は何處までも情調の發動で進退する。君の情調が動いて君は歐羅巴の大戦争に参加した。昔のことをいへば、日露戦争當時、宛も自分自ら露西亞と戦争でもして居るかのやうに、日本を應援して日本軍の勝利毎に狂氣せんばかりの有様であつたことも、君の潑刺たる情調の衝動に期せねばならぬ。又それ以前に、ペルリが軍艦を引率して日本の戸を敲いたのも、物質的打算からであ



つたといふよりは寧ろ詩的情調にかられたものと僕は了解したいのだ。實際は、ペルリは日本を奪つて仕舞ふ覺悟で來たものかも知れないが、日本を奪はうとしなかつた所を見ると、僕は君の倫理觀念に多大の敬意を拂ふものである。まだまだ僕は君の道徳に信賴することが出來ると斷言するものである。日本は澤山の感謝を君の國に拂はねばならぬ義務を持つて居る。

我我日本人は今日でも、タウンセント・ハリスやヘボンや乃至はクリフキス諸君の徳を稱讚して居る。これ等の米國人は廣い双肩に米國主義を擔つて來て、民主的人道主義を開けなかつた日本人の頭腦に注入したものだ。今日我々の文化の進歩は彼等に負ふ所が多いといふことは云ふまでも無い。日本に對する米國はインスパイラーで、その仕事は空前絶後なものとして評することさへ出來る。我我は英國のミルやスペンサーやバツクル等に負ふ所もとより多いのはあるが、米國人に負ふ所はこれ以上であるといふことが出來やう。僕一箇としても、中學時代に習つた米國の讀本から、何程米國の自由とか理想とかを學んだか知れない。僕はパーレー萬國史を讀んだものだが、この書物の作家はたれあらうホーソーン其人であつた。僕はどの位この歴史を愛讀したであらうか、今日でもその當時の心持が

隨時に追憶することが出來る。ロングフェローの一小詩、人生の歌、「藝術は長く、時はすぎ行く」といふ言葉を持つた一章は、恐らく僕が讀んだ英語の詩の最初のものゝ一であつたであらう。

米國人足下、君は柔和な母親の心で我我を撫育して呉れた。母親の心には感傷主義と理想とが自由に織込まれて居るのを最上とするが、君の日本に對する母親的態度もさういふものであつた。我我が國民としての青年時代に入つて、我々の簡性が發達するに従つて時々母親なる君の心を喜ばせなくなつたことは事實である、我我自身も時に執拗であり又時には善良で無かつたであらう。又物質上にも精神上にも、米國の態度は門派的セクトリアンでもあり又傍若無人的でもあつたと批評することが出來ると僕は思ふ。今に限らず我我はいつでも、自己辯護の言葉を弄するもので無い。況んや米國に對してその行爲を非難するものでもないことはいふまでも無い。たゞ我々の希望する所は、日本の米國に對する態度は昔も今も不變である。米國が我我に與へた過去の甘やかな記憶を追想しては喜んで居る。この愉快な記憶を持つた日本人の心が何うして米國を敵とすることが出來やうぞ。かういつたからとて、僕は君に阿るもので無いが、僕は普通の日本人一倍に日米親善を希望するかも知



れない。世間が知る如く。僕は年の若い時代から、君の國で生活を営み、文學者としての出發は君の奨励によつたものである。僕は多年の經驗から君の長短共に理解して居ると信ずる。この書簡で随分正直に赤裸に語つたから、君の機嫌を損じたかも知れない。然しそれは僕が偽らざる意見を何物よりも以上に尊重するからである。日米關係上、今日の如く澤山の誤報が白晝横行しては、將來の成行必ずしも幸福ではあるまい。率直な意見の交換が最も必要である。

感傷的で理想的な母親の心は終生忙はしいものだ。さういふ母親の心を持つた米國は、年を取つて行く結果として漸次日本が離れて行きつゝあるから、愛撫の目的物を支那に見したやうに思はれる。それは結構な事であるに相違無い。我我日本人も支那に於ける米國の仕事に賛成したい、また出来るならこの正義の仕事の上に力を盡したい。

米國人足下、僕は日本が生長した國であるといふ假定のもとに、君に左の詩一篇を贈る。

「星が星と歌ふを聞け、

眞實の心が眞實の心と語るを聞け。

勇敢な男子二人會する場合には、

南も無ければ北も無い。

東をして西を祝福せしめよ。

眞實な男子二人歌ふ場合には、

愛の誓言あるのみだ。

我等は死の人間で無く、生の人間だ。

我等は日光と戦闘を取扱ひ、

暗黒と涙を知らない。

我等の心は朝日の歌をうたふ。

我等の足は光明の路を歩む。

力強い男子二人會する場合には、

眞實に對する戦闘の一世界あるのみだ。

歡呼の聲を擧げやう。



我等は太平洋中の大洋を双腕で握り、  
我等二人で東西の兩世界を守護す。  
我等は同じ星の同じ歌を聞き、  
同じ空へ同じ祈禱をさしげ、  
同じ運命の海を共に帆走る。  
眞實な男子二人此處に會す……  
東をして西を祝福せしめよ！」

## 米文學の解剖

米國の文學の特質はヒュモア humour にあるといふのが一斑に是認された結論である。  
humour ユモアとも發音して、不完全だが「滑稽」、「諧謔」と邦譯されて居る。顰め面な冷やかな清淨教徒の嚴肅な頭に何うして滑稽趣味が繁生するに至つたかは興味ある心理研究である。堪へず喧嘩腰である自然と土人を敵として居た米國の初期時代に、樂觀主義を信ずるのは勇者の態度である、滑稽趣味を遊戯するのは道德的墮落から自らを救助する最も賢明な方法であつたに相違無い。然るに事情をずつと異にして居る今日の米國は、祖先傳來の樂觀主義——在來の文學で肯定され又獎勵されて所謂人情の美を輕信する所の樂觀主義のために、その徳性の眞實なる發達を何れ程妨害されて居るか知れない。米國の文學（又米國人の日常生活）のヒュモアは無害だが、多くの場合に皮相で輕忽である。十中の八九は『生の悲劇』を背景とせず『涙の肯定』を経て居ない平たく云はゞ一種の駄洒落以上で



ない。英國人の滑稽は「ボンチ（滑稽雑誌）」といふ造幣局で鑄つた通貨で人を愛撫するやうな所があるが、米國の文學に顯はれて居る滑稽は、丁度米國が縁のない他人に主義や宗教を強ゐるやうに、獨斷的に強制的にその賛成を迫る所がある。無邪氣といへば「笑」以上をいつも豫期しないから無邪氣なものだ。米國では何んなものでもさうであるが、この滑稽も等しく質を問はずに量に著眼する點からも無邪氣と云へる。

僕は米國の著名な女評論家の書いた「滑稽の使命」と題した一文を読んだことがある。中に「作家なり知人なりを誹す一番效力ある方法——だれでも時には人を汚辱して見たい場合がある——は彼にはセンス・ラブ・ヒュモアが缺けて居る一言を下するに限る、一國民を誹謗するに當つてもそれと同様、其滑稽趣味を否定するのだ」といふ句があつた。これは實に名言に相違ないが、（一寸議論の筋が餘所に逸れるが）僕は滑稽趣味に富んだ文學の所有者である米國人に、殆ど定期的に新聞や雑誌に出てくる日本に對する惡罵や無理解の批評は君等のセンス・ラブ・ヒュモアを裏切つたもので無いかと質問したい。米國人は常識と理論に明かであるやうに一斑的に見えるが、いざ事柄が實際的利益に關係して來ると、彼等は一箇の鈍物に變化して仕舞ふ場合が少くない。日米問題に對する彼等の一部の態度

も彼等が實際にセンス・ラブ・ヒュモアを失つた一例である。然し米國人は（前記の女評論家が尊重するやうな）滑稽趣味を他の國人より澤山持つて居る、又米國の文學の特質はヒュモアにするといふ結論を僕は覆へさうとするもので無い。確に米國の文學の特徴は滑稽趣味にある、英國の詩に劣り劇に劣り評論に劣り又小説に劣つて居る米國の文學はヒュモアの上では英國の文學に勝つて居る。

僕は米國の滑稽を必ずしも遊戯の一種と見るものではないが、元來が樂觀主義の非現實から産れたもので、自然に人生の避けることが出來ぬ實體論に足場を持つて居らぬと思ふ。米國の文學の滑稽は無自覺である、人生に對する眞實の比例を知らぬと思ふ。故に文學として、嚴格な意味に於ては左程高價な値打を要求する權利があるかゞ疑問であると云はねばならぬ。米國でも無責任な笑と樂觀主義の時代を經過して居る、ヒュモアが人生の眞實な部分を働かねばならぬ時期に達して居る。在來の米國の滑稽は外面的な誇張と理想的な遊戯分子の上で一頭地を抜いて居たが、向後のリテラチュア・ラブ・ヒュモアはメレデスが主張した「心の笑」で現實の上に起たねばならぬ。道化役者の白粉を全然洗ひ落して複雑な危険の多い人生の道程に眞實な方針を示すことになつて、初めて米國の滑稽文學



は世界から感謝されるであらう。ヒュモアは米國の在來の文學の一大特質には相違ないが、更に轉化し進歩する餘地があると云はねばならぬ。

僕は嘗てヲウエン・シーマン(サー)先生をボンチ社に訪問して、編輯局の會議室の中央に据ゑてある大な圓い机を見せて貰つたことがある。この有名な机の上の周圍にサカレーや僕の好きなトリルビーの作者デュ・モリエや其他ボンチの編輯員で英文學史の誇となつて居る偉大な名前が幾つとなく彫付けてある。この圓い机を毎週一度づゝ笑(所謂哄笑でなく心の微笑だ)の製造を専門にして居る文學者が圍んで編輯の相談をすることに成つて居る。僕が今ラムの書いた圭哥兒クエイク教徒よりもつと靜かで氣六ヶ敷い顔をして居るに相違ないと思はれるボンチ社の滑稽製造人である文學者を考へて來ると、僕は直に、何ぞ英國の滑稽が寧ろ不自然で無理でいつも反省的で時には哲學的であるかの理由を發見したやうな氣持になるのである。英國の滑稽文學は米國のそれと異つて衝動的でない、貴族的な誇や學者風の靜かさを無くしやすまいかと心配する苦笑の一種で、開け放した民主主義を嫌ふので無茶に寂しい悲しいものである。英國の文學ばかりで無い日本の文學にも、米國文學式の「哄笑」を輸入して人生を新鮮に無邪氣に改造する必要があるのは勿論だが、米國

の滑稽文學も無意味な無反省な笑を忘れて、樂天的な狂エキセントリック劇ドラマの時代を見捨てる覺悟が無くしてはならぬ。實際、文學の上で結構なことは、今回の大戦争の數多き悲劇を眼前に見た以來米國の滑稽文學に非常な變化を實現したことである。絶對的獨立の行動(人間の行爲の上にも亦文學の上にも)は人情の大問題を解決するに當つて到底許されぬものであるといふ時代へ米國の滑稽文學も入りつゝあるのである。米國の滑稽文學も、ロマンチックな理想主義を現實主義(露國一流の現實主義にさへも)に乗りかへた近代文藝の意義に支配せられざるを得無い、文學としては、滑稽文學もその他の文學同様に「量」の目的を離れて「質」の上に注意を拂はねばならぬことに成つて來たのである。(米國も文學ばかりで無く其他何んの上に於ても、少くも主義として「量」の時代の破産を認めて「質」の上に起たねばならぬ。)アートマス・ワード或はマーク・トウエン或はビル・メイ或は十四五年以來著名になつた「ミストル・デュレー」或はジウジ・エード皆な米國の滑稽作家(「滑稽」といふ文字がhumourの適當な譯で無いと同時に上記の諸作家は膝栗毛の一九でない)として米國の文學史を飾る人であるが、最早や今日は彼等の時代で無いと云はねばならぬ。それはチエスタートンが「ノンセンスの辯護」のなかで云つたやうに滑稽は諷論的宇宙觀の上に起つて



居らぬ理由からで無く、彼等の文學は餘りに樂天主義的な無責任に落ちて居る爲め人生の精神的發達に對して何物をも貢獻し無い、實際の人生から離れて居る爲め米國人（進んでは世界一班の人間）の生活を別に豊富にした結果を齎して居らぬ理由からである。文學（滑稽文學にしても）は遊戯すべきもので無く、人間の血と魂の表現であつて初めて眞實なることが出来る。文學は單純になればなる程完全に眞實になるといふ信仰を持たねばならぬ。文學は人生の自覺と力を増すやう行動せねばならぬ。米國の在來の滑稽文學は讀者を喜ばしめるを以て大なる目的の一として、必ずしも人生を笑の力で強めやうとした文學上の努力で無い、僕は斯くいつたからとてヒュモアを智の表象とするもので無い。が、或人が云つたやうに『涙の危険』があるから笑ふのだといつた所の眞實な笑の恩恵で我々の人生を三倍にも値打あるものとしたのである。

米國の在來の滑稽文學は過去の文學として尊重すべきものだが、今日のものとしては現實を背景に持つて居らぬ。云はゞ人生の街道で道化役者を立派に務めたに過ぎぬの感がある。僕とても米國式ヒュモアの民主的な特調を破壊しようとするもので無い。民主主義の意義も（文學の上又米國人の生活の上に於て）過去二三年以來急激に變化して居る。米國

の實際の活動の上では全世界を通じて避けることが出来無かつた理想主義の破産と共に絶對的孤立を失つて居る、して文學の上に昔日の状態を維持し得るといふ理由は決して無い。米國人も人生は彼等がこれまで夢想し又ある程度まで實行し得たやうに喜劇の舞臺面で無いのを今は知つた。米國の文學も昔日の樂天的態度を見捨ねばならぬ場合に至つて居る。斯く僕は理想主義の破産を米國の滑稽文學（米國の文學が他國に比して一番勝つて居る所）に見て、次に云ふと同じ徑路を『米國の詩』に辿ることが出来ると思ふ。

米國の詩人中で最も獨特な地位を占めて居るのは例のウォルト・ウキトマン（千八百十九年五月三十一日——千八百九十二年三月二十六日）であるのに誰も異議を持つまい。僕一箇の意見では、『豫言者の反抗の彼』を見るよりは寧ろ彼が樂天的理想を追憶的に求めようとした點を考へて見たいと思ふ。ウキトマンが詩に傳へようとした平和と自由の空氣には、少くも僕に向つては將來の暗示（生産力ある有機的な暗示でなくては眞實の暗示で無い）を啓示する所があると思はれぬ。一言で蔽ふと、米國の精神的過去を傳教的に復活しようとした努力者が則ちウキトマンである。彼の文學的理想は實行で裏書されたもので無い、反省的背景を持たぬのであるから單に聖書式單純の言葉（或批評家はこれを蠻人



の叫泣 barbaric yawp と皮肉つて居るが)で綴られた處方書に過ぎぬとも云へる。歐羅巴の文壇がアレン・ポーを除くとウキトマンを米國が産出した大詩人と一班に認め居るが、それは歐洲人の自由と平等に對する原始的憧憬を失はない證據と見るのが至當であらう。今日重要な問題(米國丈けでなく世界の詩壇の上に於て)は何うしてもウキトマン主義を離れる、即ち古い理想主義の手枷足枷から自由な身と成つて實際的な民主主義を掴むか、無くてはならぬ。現實を背景とせぬ(少くも今日ではさう見える)彼は、詩的参考或は文學的式様の一種としては中々有力であるのはいふまでも無い。然しウキトマン主義の破産は已に確定された事實である。

リンコルンが戦争の血で實行した道德觀を詩で肯定した時、ウキトマンは米國の文壇起つて以來の巨大な人格となつたのを僕は知つて居る。彼は傳教的信念(善い意味にも悪い意味にも)から自らを驚くべき現象と築いて、歴史上の筆と劍の如何なる人からも異なつた行爲を彼は演じたのである。彼が精神的社會主義を根底として人情の生きた宗教を嘆美した時、已に米國の人民は祖先が犠牲を拂つて得るに至つた信仰を忘却し初めて居たので、彼が時代の反抗者換言すると警告者たる資格を得るに至つた理由は容易に了解され

る。然るに彼が今日の我々の眼に「詩界の破産者」と映ずるのは、彼は非科學であり又餘りに理想家であつた弱點からである。彼は疑も無くその巨腕を文學的破壊の上に使用して、建設的詩人として單に外面的な式様丈けを示したに留つて居る。彼の思想(彼の信仰の如く)は放肆淫逸で、實行論としては餘りに無邪氣である。今日僕が彼に發見する所のものは唯空想的な荒毀遺骨のみのやうな感がある。彼は今日では「破産の詩人」である、否な彼ウキトマンばかりで無い米國の文壇大部分の人は皆な理想主義と共に没落して居る。過去の米國の文學は今悲劇の最後の幕を演奏し終つた。観客は唯だ新らしい劇の初幕が開くのを待つて居るのである。果して何んな文學が將來の米國から産れるだらうか。

文學の遺傳的假工がロングフェロウやロウエルなどの修辭美で代表されて居た時代に、ウキトマンの存在の意義は勿論大くもあり又明白であつた。人生と自然を單純な小兒の眼で赤裸に見ようとするウキトマンの態度は、その目的に相應しい表現法を彼に發明させた。それは暮斯敦ボストンの小公園や寺院を歌ふに適當な在來な普通な作詩法を無視したもので、今日の所謂散文詩の一體である。實際彼は丁度「文學といふ獄舎」から逃出した男のやうに文學の上の行爲をした。詩は産れべきもので製造されべきもので無い、又詩は情熱で宇宙の



法則を道奉するけれども人間が作った在來の作詩法に束縛せられる筈のもので無いとの説に僕は賛成するがウキトマンは不齊整ではあるが常に諧調を維持して居る自然の音——岸打つ波が風と合し或は溪谷に耳語く森林——の暗示から自らの詩形を創造したといつて居るがその眞偽は僕は知らぬ。が、彼は音楽の上でワグネルが實行したと同様な行爲を詩の上に實行したのである。又米國は政治の上に於てのやうに文學上にも自由で無くてはならぬといふウキトマンの意見を認めるが、此處で僕は彼が創造した散文詩の問題を考へて見たい。彼自身では彼の詩形は内容と完全に符合したものであると思つて居たらうが、僕に云はせると、散文と詩とを同じ盆に雜然と盛つたに過ぎぬ實例を示すことが出来る。この性急な無遠慮な文學的行動は彼の時代の他の詩的表現に對する力強い果<sup>はたしやう</sup>狀であつたに相違無い、して又彼の詩の効果は他人の追従するを許さぬ、則ち彼の詩は彼と共に亡びて初めて實證されると僕は思ふ。然るに事實はそれに反して今日澤山な小ウキトマンが此處其處にある。まづ僕の云ひたいのは詩人ウキトマンは自分丈で充分であり澤山であつて後繼者に依つて修正され補足される必要を見ない。今日の米國は反省力あり又産生力ある文化に築かれた文學を要求せねばならぬ。Barbatic Yawpの詩人ウキトマンは世界の屋根の上から大音聲

を發して破壊を叫んだが、更に一言も改造の様を語ら無かつた。今日の米國は無責任で放肆な理想時代で無く、已に建造の確實な時代に入つて居るから、時代に屬して避けることが出来ぬ數多い障害物の間を立派に舵取る別の警告的大文字を望まねばならぬ。

半世紀前に、豫言的理想主義の單純な力で米國人の心を強固にし神の自由と歡喜を忘れぬやう米國に警戒した所謂ウキトマニズムは餘りに獨斷的であり抽象的であつた。實際を遠ざかつた無責任な追憶的樂天主義を友として居たから餘りに夢想的であつた。ウキトマンの主張では全歐洲や亞細亞から侵入して止まぬ文化の爲め益益複雑になる米國の文明をととても整理することが出来ぬ。今日の米國は stage of adolescence から人情を實際的に取扱ひ人生を現實的に處理せねばならぬ時代に入つて居る。勿論所謂米國の自由と民主主義もその色彩と調子を變化しつゝあるので、元來の主義を失はずに何うして新時代相當の新文藝を鑄るかが大問題である。半世紀前の米國が中心點を失つて精神上で斷片的に成る危険に際會した時リンコロンとウキトマンが國民に對して大方針を示した。そして今日の米國は異つた事情の下で中心歸趣を失つて居るのではあるまいか。少くも文學上で米國の今日は興味ある時代といふよりは寧ろ危険な時代である。政治上の今日の米國は南北戦争以來



の危険な時期に立つて居る。南北戦争は米國民丈けで整理されたが、今日の米國が出遇つて居る諸問題は萬國的に處理せねばならぬ。斯ういふ米國が昔日の理想主義など、解決される筈は無い。僕自身米國の新文學は如何なるものであるかを語る準備を持たぬが、所謂ウキトマニズムの破産だけは事實である。換言すると米國文學の理想主義の破滅は動かすことの出来ぬ結論である。

僕は前に米國の文壇大部分の人は皆な理想主義と共に没落して居ると書いた。が、それは彼等の眞價を否定するので無くして、彼等が演じた文學的舞臺を一層明瞭ならしめたい希望に基いて居る。實際米國の詩壇で誰が理想主義の樂天觀に支配され、其領土の住民であるのも誇としなかつたか。米國の詩の第一章を書いて「回想的詩趣はウオヅウォルスに迫る」と自他共に許したブライアント（十八歳で「サナトプシス」を書いたこの天才は八十歳の老境をホーマーの英譯で飾つて「只の人」と成りそこねた特種の例外である）からニュー・イングランドの諸詩人に至り、近代に至つてウォル街の銀行家詩人ステットマン又はライレー（ロングフェロウを取除くとこの詩人位婦女子や子供から慕はれた人は外にない）又加利保爾仁亞のミラーに至るまで悉く理想境の開拓者である。して其の理想主義の

破滅を實際に演じた無邪氣な歴史を残したのは例の哲人エマソン（エマソンは哲人に相違無いが所謂ヤンキー一流の勘定高い頭腦の所有者であつた）が不即不離に關係した「農園ブルック・ファーム」の事業である。エマソンは此事業の失敗を豫想し乍ら氣の毒なホウソーンにまで節儉して貯蓄した大枚二千圓を失はした事を考へると、勿論エマソンに責任は無かつたことに相違ないが、エマソンのやうにヤンキー式の「微笑した眼付」をした男は金錢の上で自分を守るに賢明であると云ひたい。「ブルック・ファーム」の理想則ち思想と労働を自由の信條で結合する、衣食住を保證する手足の労働で精神の活動を完全ならしめるのは其時代の樂天主義者ばかりで無く、今日の文學者（科學的な批評で過去の理想を肯定する文學者位愚かで厄介なものはない）でも時には歓迎するであらうと思はれる。一株千圓を十人の文學者（文學が餘りに金にならなかつた時代でも今日の日本の文學者より遙かに金錢上では有力であつた）が二十四株則ち二萬四千圓集めて著手した「農園ブルック・ファーム」の失敗は、實際どれ丈理想を實行しようとする迷信に捕はれ易い米國の文學者を救つたか知れ無い。若しこの事業が成功したとすると、何程小ブルック・ファームを産出したかも知れぬ。其失敗は（其點から見ると）喜ぶべきものである、又關係者にしても失



敗の歴史を書いて初めて彼等の理想主義が明白に或は美麗に顯はれるに至つたのである。彼等の實行上の理想主義は斯く脆くも四五年間に破れたけれども、文學上の理想主義は米國の文學史上に澤山の頁を彼等は書いた。

エマソンが張本人として布教した「超絶哲學」と邦譯して居る Transcendentalism は、單に古びた神學を呪ひ行き詰まつた清淨教を一轉化しやうと思つた所謂文士の團體で、必ずしも終始一貫した信條を持つた運動でない。この運動に参加した連中は銘々勝手な主義傾向に立つて居たが樂天主義といふ糸の上に結ばれて居てその主義を以て不變永住の地と定めて居た。由來樂天主義は粗野で單純な田舎者が遁守する宗教で、彼等は異口同音に「幕斯教の人情は昔アゼンスの人情である、又幕斯教の文明はアゼンスの文明である」と放言するに至つたが、こゝまで來ると彼等の樂天主義は濟度することの出來ぬ程度の墮落に落入つたものである。然りエマソン一派の哲學的詩人又詩人的哲學者（如何にも曖昧な態度の）は田舎的であり地方的であり又偏狹的であつた。エマソンが案出した「人間に神の存在を見る」則ち Overton の教義は田舎者が世界に送つた挑闘狀であるが、その中には七分の野師的な僞辯がある。過去は祖先の墳墓の廢潰である過去を離れて自分の獨自性を

見ると説いたエマソンは如何にも雄辯な卓上の論者で、社會を過去の生きた代表者と斷定し孤獨のうちに完全なる自由があるといふ結論も、その出發點を樂天主義に持つて居たのである。して又その樂天主義が利功主義と結合した所に、如何にエマソンが悲劇的現實の方面を恐れ又避けたかゞ知れる。エマソンが過去を「古著の一種」として全然打棄つた所に、いつも樂天家に附いて廻る獨斷的な態度が見える。（或批評家は、カーライルならば打棄すにその古著を仕立直したであらうと云つた。）自然を一箇の商品と見て社會が自然を惡用するから貧困を作る、自然と亂れぬ調和を保つて初めて最上の文化があるといふ彼の説には、また樂天家に附隨する妥協的な弱い思索に捕はれて居る。理論に極めて甘い女性的な卑怯な所はあるが、女性的精神が感激的で大膽であるやうにエマソンには冒險があるのを愉快とする。要するに我々の今の目から見ると、彼も無責任な夢想家の一人で、非常な手腕を美文に持つて居たのを特別の價とするわけである。又詩人としての彼は左程大なるもので無いのはいふまでも無い。

此處に世界の批評でウキトマンを別にすると米國の文壇で最も興味ある評論の標的と成つて居る文豪エドガー・アラン・ポーが居る。事實の詳細に拘泥せぬ點では無責任で放肆な



拜したものだ、彼の文學直覺力は空前絶後の産物であつた。

彼の詩人としての名聲は實に數篇の抒情詩に懸かつて居る。微細に震動する詩的精氣を盛つた『イスラフェル』と思想を刺戟的な美の腦みと表現した『ヘレンに送る』と驚くべき言葉の快調を語る『極樂に於ける一人に』と其他一二篇を以て彼の代表作とする。彼の大部分の詩を貫く悲痛な情緒は死せる女に向つての嘆聲で、それは何か實驗した事實の白狀であると云はれて居る。比較的長篇である『大鴉』が太平洋を越えてロセチを感激せしめ、それから暗示を得てポーとは反對に天國に入つた女が地上の愛人を慕ふの情を『ゼ・ブレド・タモゼル』にロセチが歌つた時に、已にポーは世界的詩人の一人と確認されたのである。然し彼はウキトマンと共に米國の文壇の爲め有力な氣焰を吐いて居る。而してウキトマンの理想主義は破産しても、ポーの美は永遠に若々しい優秀な色彩を漂はすに相違無い。然し米國の二字を土臺として論ずると、ウキトマンは幹流に乗つた詩人だが、ポーは分離した境地の星と云はねばならぬ。

眼を轉じて米國の小説を見るとその大部分は理想主義範圍の産物で、樂天觀から自然と人情を描寫した所謂讀物以上で無いが、中に特種の例外も少くない。先づ其異例の一人と

して僕の念頭に浮ぶのはハウソーンである。僕等の年若い頃學校でパーレーの萬國史を讀まされたが、此歴史は文豪ハウソーンが單に金錢の爲め匿名で書いた一書である。僕はハウソーンの名前を私らぬ以前に已に彼の書に觸れたのを光榮とするものである。彼の小説其數少くないが『ゼ・スカーレット・レター』をその傑作として居る。彼の其他の作に於ける如く等しく靈魂の葛藤を罪と罰の表現から研究したものである。英文學(英米を通じて)は詩を以て最大生命として居ると僕は信じて居る一人であり、又此處では米國の小説界を詳細に論ずる必要を認めず且つその餘裕を持たぬから、之れを他日に譲らして貰ふ。最後に一言を記して本論を終結する、『近く一段落を附けた米國の文壇は理想主義の歴史に外ならぬ。而して其の理想主義は悉く破産し終つた。』——これが僕の結論である。



拜したものが、彼の文學直覺力は空前絶後の産物であつた。

彼の詩人としての名聲は實に數篇の抒情詩に懸かつて居る。微細に震動する詩的精氣を盛つた『イスラフェル』と思想を刺戟的な美の腦みと表現した『ヘレンに送る』と驚くべき言葉の快調を語る『極樂に於ける一人』と其他一二篇を以て彼の代表作とする。彼の大部分の詩を貫く悲痛な情緒は死せる女に向つての嘆聲で、それは何か實驗した事實の白狀であると云はれて居る。比較的長篇である『大鴉』が太平洋を越えてロセチを感激せしめ、それから暗示を得てポーとは反對に天國に入つた女が地上の愛人を慕ふの情を『ゼ・ブレセド・タモゼル』にロセチが歌つた時に、已にポーは世界的詩人の一人と確認されたのである。然し彼はウキトマンと共に米國の文壇の爲め有力な氣焔を吐いて居る。而してウキトマンの理想主義は破産しても、ポーの美は永遠に若々しい優秀な色彩を漂はすに相違無い。然し米國の二字を土臺として論ずると、ウキトマンは幹流に乗つた詩人だが、ポーは分離した境地の星と云はねばならぬ。

眼を轉じて米國の小説を見るとその大部分は理想主義範圍の産物で、樂天觀から自然と人情を描寫した所謂讀物以上で無いが、中に特種の例外も少くない。先づ其異例の一人と

して僕の念頭に浮ぶのはハウソーンである。僕等の年若い頃學校でパーレーの萬國史を讀まされたが、此歴史は文豪ハウソーンが單に金錢の爲め匿名で書いた一書である。僕はハウソーンの名前を私らぬ以前に已に彼の書に觸れたのを光榮とするものである。彼の小説其數少くないが『ゼ・スカーレット・レター』をその傑作として居る。彼の其他の作に於ける如く等しく靈魂の葛藤を罪と罰の表現から研究したものである。英文學(英米を通じて)は詩を以て最大生命として居ると僕は信じて居る一人であり、又此處では米國の小説界を詳細に論ずる必要を認めず且つその餘裕を持たぬから、之れを他日に譲らして貰ふ。最後に一言を記して本論を終結する、『近く一段落を附けた米國の文壇は理想主義の歴史に外ならぬ。而して其の理想主義は悉く破産し終つた。』——これが僕の結論である。



私はいつぞや歌麿を論じまして最後にかう云ひました、「時代は變化する、我々も段々理知的になる、自然に肉體的には醜くなる。所で私が歌麿の藝術の影響がもつと大きくなつて來るのを希望する理由は、歌麿の美人にあやかつて肉體的に麗はしくなりたいからであります。」近頃人の話題にのぼつて居る遊蕩文學を私はうれしく思ふのも同じ理由からであります。文學的遊蕩の潤ひの力で人生の沈痛をして少しでも長く若い華やかな精神を維持せしめたいと思ひます。今日日本の時代精神は貧弱であります、故にいつも浪費するのを顧みず又無意味に分裂して、遂には老衰を進んで迎へて居るのであります。私はそれは一斑に日本の日本人が不自然で作爲的な附け刃の理智の壓迫に威嚇されて畏縮して居るのぢやないかと思ひます。若し所謂遊蕩文學なるものが散文式な乾燥し切つた無味な生活をすこしでも忘れて、我々をして人間の青年時代に屬して居る抒情詩的感情に再び歸らしめるこ

とが出来らるならば、遊蕩文學程結構なものはないではありませんか。道徳から解放されて自由自在な新しい情緒を作つて片意地な理智性を嗤笑する遊蕩文學に行つて、初めて生の倦怠に捕はれて居る我々の生命に一轉化を與へて貰はねばなりません。そりや遊蕩文學は愚でありませうが決して狡猾ではありません。不健康かも知れぬが決して危険ではありません。實際官能的かも知れませんが所謂物質的一點張りではありません。私自身の小さい範圍の事情からいふと、我が遊蕩文學に賛成するのは、自分では遊蕩生活を少しも否定をせぬに係はらずそれを實行することが出来ぬ點からでもあります。又決して倫理的感念が強いので無いのからでもあります。然し私が公然遊蕩文學に賛成するのは、日本人をして誰でも音樂的に人生を愛し現實生活に深い交渉を感じる「完全な戀人」と成つて貰ひたいからであります。現代の小説に對する讀書慾に淡泊な私は、實際長田、近松、吉井、久保田の諸君が何んなことを書いて居られるかは批評的には不案内でありますし、又諸君の作品が諸君の生活と如何なる交渉を持つて居るかは全然知りません。故に諸君を連れて來て私は此處では遊蕩文學の代表者とは致しません。個人的關係を避ける便利もありますからジョウジ・ムーア——此極て愉快な愛蘭土人は近代の佛國乃至日本の文學者同



様に遊蕩兒ではあるが放淫な酒色の頌揚者ではありません後者と墮落するには彼の自然の本能は餘り麗はしく整理されて居ります——に代表せしめて私は遊蕩兒の功德を書いて見たいと思ひます。

私はムーアとは箇人的には知りません。倫敦で彼を箇人的に知り得る機会があつた時は彼はジェルサレムに愛戀を採掘に行くといひ出して世を驚かした際でありました。又私が彼の作品に接したのもつい近年のことです。私は倫敦滞在中數の知れぬ位ムーアの出版者のハイネマンの店先きをのぞき込んで彼の書物が並んで居るのを見たが一冊も買ふ氣に成らなかつたものです、尤もその理由の一は其當時彼を読むのに適當なシチュエーションを作るのに困難であつたからであります。私は嘗て歌麿を書いた時かう云ひました、「永久にその空氣は柔かで灰色であつて貰ひたい。さういふ灰色で柔かな空氣のなかで、初めて愛戀の急激な感動や人生の喜びや痛みを切實に感ずることが出来るのであります。」かう云ふ空氣のなかで私は親愛なるムーアを読みたいといふ希望を抱いて居りました。然らば私が何處で初めてムーアの作品に接したかと思ほしめず。讀者諸君それは英國からの歸途ウラルを越して茫漠たる空野にしよんぼり孤立して居るなにがし停車場ステーションで彼の著書數

種を例の安い Janichitz edition で買つたのがそもそもでした。随分皮肉に聞えませう——「完全な戀人」を以て自任して居る一代の花車姿を極めて水々しいムーアと西比利亞の空野！私は私の友人である某英國の文學者に遣つた手紙のはしにかう書きました、「君たうとうムーアの奴に廻り會つたよ、巴里はセーソ河畔小柄な淺黒い美人と一所のところで無ければ伯林の酒場で愛戀の永遠を祝して居たところでも無い君見るも寂しい西比利亞の一停車場で僕は初て彼と握手したよ。」

私が期待して居た空氣を西比利亞線の汽車中で作ることは出来なかつたが、少くも私は私と部屋を共にした露西亞の軍人はツルゲネフの愛讀家で日露戰爭當時に捕虜となつて松山に滞在した折に日本婦人の麗はしさを味つた人でした。私の讀んだムーアの書物のなかで一番氣に入つた節の中にこんなのがあります。

「女にいつて御覽なさい——あなたはニンプで僕をホーン以上に取扱つて何等の期待する所があつては困る、僕の知つて居るのは日光の喜び、僕の夢見る所は完全にふくらんだあなたの胸、僕の歌ふ所はあなたの爲め葡萄を摘むことであります、あなたは罪の考へなくあなたを私に任しませんかと……」



「僕の心のなかの影像は何かといふのですか。夏の森のわきで沐浴して居る女の姿から得る官能的満足——その胸の香の陶醉あるのみです。」

「馬車を驅らうとおしやつたのですか、おしやらなかつたの。」

「語つて居る問題は幸福のことです——そりやあなたが馬車を驅りたい希望ならば。馬車を驅る位幸福なことは有りますまい。」

「さうですか。」

彼女は私の腕を抓つた。私は喉の咽せるやうな感じをして馬車を命ずることを彼女にいつた。

ドリスは云つた。「點火されて、靴は錠でまた開けられない時が一番部屋がよく見えますね。椅子へはスカートが投掛けてある——部展をうまく飾付けますわね。」

かういふ會話が書ける人は正しく遊蕩文學の眞髓を得て居るのであります。徐々と心を奪つて仕舞ふ遊蕩文學の大家には話の所謂山は不必要で、讀者自身も會話に迷はされて段々と戀人であり又誘惑者であると氣取りたくなる。憎らしい程上手な遊蕩兒の文學者ムーアは書中で自分が話の主人公で又その語り手の役を勤めて居る。彼の書中の女は六月の牧

場に流れて居る。風のやうな金髪を房々させて、花の如く愛らしくて弱い口元と水仙の様に細長い手。これに配するに生の歡喜をいくら食べても満足せぬ遊蕩的大食家を以てして居るのである。現代の日本にムーアに劣らぬ官能的鋭敏を誇ることが出来る青年大家は中中にありませうけれども、ムーアのやうに、少くも文字の上に於て、刺て手を傷めずに薔薇を摘み罰金を拂はずに享樂を盡し又悔恨を感じず斯る幸福を味つたのは無いと云へます。彼の書く遊蕩談の眞か偽かは論ずる丈け野暮である。みんな眞實と受取つて初めてムーアを読む甲斐があるといふものだ。實際彼位西歐文壇で若若しい満足と愉快な色彩の凱歌と一生をなしたものは無く又それに相應しい稀有の文字を學び得たのはないのであります。

聞く所に依りますとモパッサンは自分の作品の主人公と同一視されるのを非常に嫌つたさうで、特にベルアミと彼の個人格經驗との直接の交渉があるのを極力否定して居たこととあります。然るに我がムーアになると口にこそ出して語つた證據は無いが、その書中の主人公は皆な自分だと暗示して居る。この告白的文學の脈は天主教の宗理を道奉して居る愛蘭士人の血のなかにある。ムーアは祖先の宗教は永年捨てては居るが、血に染み



懺悔的習慣は忘れる事が出来ぬものか、さつくばらんに告白して仕舞ふので有るから時には倫理を破壊するといふ非難を蒙る。又ウオヅウオスが嘗てゲーテのウキルヘルム・マイステルに對する評言として有名な句で、「空中にぶん／＼唸る蠅」といふ感じを起こさせるに相違は無い。全く悪くいふと彼の著書は姦淫の聲もう一層激烈に云つてのけると生殖器崇拜の讚美歌でありませう。彼はその他の遊蕩兒のやうに何處までもエゴイストで手前勝手の手を擧動をする。又彼は外の男子と友人を作らず又それを作る感情の健康性を持たぬ、彼は自分自身と女のみを愛して、又女以上に自分自身を愛したのである。彼はこんなことを書いて居る、「無責任で利己主義を手綺麗に實行して初めて人生のバイのなかから甘いブラムを澤山引出すことが出来る、それは兎ても七つの眞面目な道德などの出来得る所ぢやない、随分思ひ切つた痛快な言葉ぢやありませんか。私はムーアに賛成であります。

如何なる色男でもさうですがムーア先生も無茶に氣取る街ふ英語でいふことと非難される所がある。前云つた様に色男に限つて男子の友人は無いものであります。「愛戀界の天才は入りこむといふよりは其處を捨てるといふ所にある」と嘯いた青年時代のムーアは如何にもきざな色男宜しくであつた。「香水や絹すれの音を聞かなくては愛戀を情慾まで煽ぎた

てる事が出来無い、藝術と女を夢想した日はもう過ぎた所で明日だ、ガルウエーの僧正マコルマツク老人の所謂愛戀の劣情なるもので日を暮らすのだね」と叫んだ中年男になつても、ムーアは愛戀を嚴肅に考へられ無かつた。それは彼の胸に無いことだ。

ムーアは女の毛髪やヘリヲトロップだけ考へて居れば澤山だ。彼は完全な戀人としての役さへ勤めれば彼一代の仕事は終るのである。彼は彼の稀有な文學の力で所謂人生と藝術を一元的に取扱ふことが出来ぬ點で彼は自分の先生と考へて居るバルザックに達することの出来ぬ所である。要するに彼はもつと小さい藝術家であつたならば遂に幸福であつたであらう。彼は眞實な自分を眞正直に裸體に露はすには餘りに多く藝術家であつた。故に遊蕩兒としても批評的には遺憾な點が少なくないが、現代の文壇切つての遊蕩文學の成功者であります。して私はムーアの嘆美者の一人であります。



## モシヤー版の書籍

北米合衆國メイン州ポートランドのモシヤーは出版界の海賊である強盗である英語の“Knight of the Road”である。假面を目深かに冠つた出版界のクロード・デュバルである。僕は十八九歳の頃——僕が英詩に接近する動機を掴まなかつた以前——桑港の日本字新聞社の二階で夜更けて一時二時と時計が鳴るまで小さい蠟燭を點じて大泥棒デュバルの冒険を耽讀したことがあつた。この堂堂たる美男子、始終三角なりの帽子に手頸のまはりに白い襷縁のちよろちよる見える花車な着物と腰に差した小刀と衣囊に隠したピストル一挺といふ扮装で、どう踏んでも貴族の値打があつたデュバルは確にポートランドの出版者モシヤーに比較することが出来る。デュバルが金満家の一人娘を幽閉から救出したり又無辜の人民を苦しめる悪人原を懲らして、何處へいつても女に持囃されたやうに、モシヤーも不遇な涙に濡れて居る憐れな文學者を救出して綺麗な装釘を與へ、有限部數の一冊として米國の

貴族的な讀書界に紹介した。どんなに女の愛書家はこのモシヤー版を持囃したでせう。デュバルがターピンやジャックといふ命知らずの手下と一緒に、英國の田舎を馬で乗廻はり或はエビング・ホレストに出没して馬車を脅かして客の荷物を卷上げる。そんな場合にぶるぶる震えて半分泣いて居る婦人は怖怖デュバルの美貌に見とれざるを得無かつたと書いてある。出版者のモシヤーは米國に版權のない英國の純文學書を得手勝手に横領して賣出したが、之の本の装釘の高尙で優美な點を誰れでも見とれたのである。我々が鼠小僧を憎まず上州の長脇差を私かに愛するやうに米國の愛書家はこのモシヤー版を最良にしたのである。幾人も小姓や幫間を抱へて出る時は馬車、家へ歸へると彼を慕つて居る侯爵や伯爵夫人の包圍攻撃を受けるといつたやうな豪華な倫敦生活をしたクロード・デュバルがいよいよ處刑されて死んだ時、高い階級の貴婦人等の手で彼の死體は莊嚴に飾られ、紋の付いた楯やら大きな蠟燭、之れに黒い幕を張りまはすといふ大騒ぎであつたさうだ。(デュバルの羅曼的な歴史は事實だとマコーレーも書いて居る)、之れと同様に、今日一時出版者としての仕事を打切つて、二十年間も續いた The Bibelet (月刊の翻刻雜誌)も愈々二年前に廢刊して仕舞つたモシヤーに對して、必と米國の愛書家は涙を流して残念がつたことであら



う。出版者として大泥棒のヂュバルのやうな小説を演じたモシヤーは一種の快男子である。モシヤーが出版界の快男子としての仕事は、ヂュバルが年若い美人を救出したやうに、その當時では極めて少数の信者の間に於てのみ秘密に讀まれて居た、メレデスの『モーグー・ラブ』を初めて米國で翻刻したに初つて居る、之れから次にアンドリュウ・ラングの英譯 *Aucassin and Nicolette* を翻刻して手厳しい攻撃をラングから受けたが、モシヤーの力で（云ひ替へるとこの出版界の大海賊の肝煎で）一躍文名を米國に轟かし曳いて本國の英國にまで響かせるに至つた文學者の數二三では止らぬ。ウキリアム・シヤープまたの名フキヲナ・マクレヲツドなどは其一人で、マクレヲツドの名前はモシヤーが之の作を翻刻し初めるまでは左程高いもので無かつた。生前シヤープはモシヤーに深く感謝する所があつたといふことである。現に僕の親友の詩人ゴルドン・ポトムレーなども、モシヤーの翻刻版が世に出るに及んで初めて英國でポトムレーの詩人としての存在が認められるに至つたのを、ポトムレー自身の口から僕は聞いて居る。大泥棒ヂュバルが一面には澤山の人から感謝された行爲をしたやうに、この出版界の海賊モシヤーも必ずしも悪人として取扱はるべきで無さ。

海賊モシヤーは文學者である、讀者に巨眼を具備し居る批評家である。「僕自身の選擇の糸で他人の花を藤るのがゼ・ビベロツトの單純な計畫である。是迄廣い讀書世界へはひることが出来なかつた外國産の文學が此處に翻刻される、云はばその作家がまだ嘗つて知らなかつた平野に新奇に種下しをするのである」と書いて出版し初めた小冊子のビベロツトを、僕も時時彼から寄送を受けて、今僕の書齋に澤山持つて居る。之の毎號の最初の頁にモシヤーが自身で翻刻した文學に對する簡單たる要領を得て居る批評的紹介文を一文づゝ書いて居る。筆者が深い痛切な同情を新文藝に持つて居なくては書くことが出来ぬ所の美文である。之ればかりで無い彼が海賊の結果として樂に横領した英文學の書又は英譯本、セヲクリタズ、ピヨン、ヲマー、デクキンサー、ペーター、モリス、ロセチ、それからミルトン、ウオヅウオス、マシユウ・アーノルド、ブラウニング、メレデス、ウキトマン、づつと降つてワイルド、シモンズ、ドウソンなどに渡つて居る三百有餘種の翻刻書の大部分に書入れて居る小品文の紹介的評論はどんなに英文學の讀書家を喜ばしたでせう。僕が持つて居る彼のワイルドの詩集はまたとない立派な裝釘で、附録として「レヴェンナ」のタイトル・ページヤリケツが圖案した「ゼ・スヒンクス」の表紙の複寫も入れられて居る本だ



が、彼の紹介文の最後に「社會は、我々が作つたまゝでは、僅に一の場所すら與へず何等提供する所が無い、然し自然——自然の甘やかな雨は正當不正當に關せず一様にその上に降る」云々のワイルドの句を引用して、「凡てを知つて初めて凡てを寛恕することが出来る」と信じ、如何なる時代でも、不死の藝術の祭壇の火を番する責任があると信ずるもの」が忘れることの出来ぬのはワイルドの此句であると書いて居る。如何にも氣のきいた評論文を書く腕をこの海賊の出版者は持つて居る。

今僕の書棚を見るとモシヤー版は他の安つばい書物と異つて一隅を占領して貴族的空氣を漲らして居る。此處にフランシス・トムソンの有名なシェレー論もあればトムソンの *Hound of Heaven* の日本の雁皮紙に印刷されて居るもある。又ブキヤナンの文でその薄命な文學者の一生を傳へられたデヅキド・グレーの小説もあれば、又餘り世人に知られて居らぬ詩人だがダニエル・ヘンリー・ホルムスの桃色の表紙を付けた詩集もある。又其處にはワイルドの序文を持つて居るレンネル・ロッドの詩集もあれば愛耳蘭の詩人エー・イーの詩集も横はつて居る。此等の大部分の書籍は彼から僕にわざわざ贈つて來たものだが、僕の金で買ったものも少くない。僕の金で買ったものとして誇ることが出来る。モシヤー版は箱

入りの五冊物ジェフエリーの自然觀やマクレヲツドの散文詩 *The Wayfarer, The Distant Country, Three Legends of the Christ Child* の箱入り本等であるが、書籍は寄贈を受ける筈のもので無い是非共自分の金で買ふべきものである。さ無くば本に對する難有味が少い。僕の父は樺の僧侶（僕の兄弟に一人の僧侶がある）に經を讀ましても、必と御布施を渡した。僕の父はたゞのお経は難有くない」と云つた。それと同様に寄贈された本は買った書物程大切に取扱ふ心持になれない。所で僕は僕のモシヤー版の幾部でも自分の金で買ったものであるのを喜ぶのである。

モシヤーが毎年發行した出版書籍目録は單に名前の行列で無く、如何に彼が細心に又熱心に眞實な文藝を選択し尊重したかの歴史をそれから讀むことが出来る。批評は創造的藝術として確固な足場を保つた。又モシヤーは批評的な態度から産れた出版これはまた藝術の領園に置かるべきものである實際を示したのである、——丁度趣味の深い批評眼で選擇された簡人的圖書館が自叙傳の異つた一型式と見ることが出来るやうに、モシヤーは自分の出版で自叙傳を書いたのである。

その自叙傳の目次が即ち彼が毎年發行した書籍目録である。故にそれは詩の權威さへあ



ると人から批評され得る程のもので、僕は時時古い彼の書籍目録を開いて見る、すると種々様々な名前の札が起つてある草花の庭のうちを散歩するやうな気分になる。實際の愛書家は必ずしも書籍の頁を開けて讀まなくても本の表紙なり目次なりを見てさへ居れば深い愉快を覺える人間をいふのである。さういふ人間のやうに、僕はモシヤの書籍目録を開けて見て古來から今日に至る英國文壇の功績を數へることを好くのである。何んたる高尚な優美な名前がその目録に包まれて居るだらう。唯その名前だけを讀んでさへ、美の情熱感興の突出に胸が一杯になるやうな心持がする。ロセツチはビヨンの詩を譯して、昔の美人（マリーの五人侍女）の名前を並べて新しい諧調の響を傳へて居る。即ちセシリ、ガートルド、マグダレン、マーグレットとロザリーの名前が何んなに甘やかな諧音であるだらう。さういふやうな愉快な諧音をモシヤが出版した書籍の名前に僕は發見するのである。實に彼が出版した三百有餘種の有限出版の書籍は彼の藝術的趣味の糸で互に組合はされて、一の大なるオーケストラの音響を發して吾人の耳を喜ばせるを覺える。

彼は世に稀らしい出版者で——寧ろ出版で自分を説いた文學者である。彼は何處かで書いて居る『世界が若くて日は熱帶的光彩に輝いて居る時分、僕は寂しい船室で薄暗い熱火

のもと書物を抱いて長い長い夜を暮した、して僕の乗つて居た船はケーブホーンを廻つて果てしもない海の旅行をつづけた。——だが僕は書物を再び讀むまい、決して今は再び書物を取上げようと思はぬ。彼は讀書慾を失つて藝術の人で無くなつた。して彼の出版を廢するに至つたのは自然である。二十年間の出版の仕事を終つて彼は今自分の歴史の扉を閉ぢたのである。彼の仕事は終結した。出版界の大海賊大強盜としての彼の仕事は最も羅曼的であつた。

前にいつたやうに彼は出版界のジュベルで、我日本の鼠小僧同様な義賊の大役を引受けて、澤山の不運な文學者を埋没のうちから救つて居る。僕自身箇人的にいふと彼は僕の詩集『巡禮』一冊の正價四圓のものを二十冊も一人で買つて呉れた、彼は僕の同情者でもあり又友人でもあつた。



## シングに關して

愛耳蘭といつても私はダブリンだけで、シングの文藝上の郷土は全然知りませぬ。聞く所に依ると西部愛耳蘭は特別な風景に浴して居る、特別の風景といふよりは「奇異な無風景」といつた方が適當であつて、人の注意を曳くやうな風景上の細目何一つないさうであります。西部愛耳蘭は如何にも荒涼たる景色の所なのであるさうであります。個性の情に燃えて居るといふと説明を要する言葉と響くかも知れぬがその風景が靈的に見えて一種不思議な壯大といふ印象を與へる、又壯大というてもそれは活動が止み緊張して黙した憂鬱の壯大であるさうであります。此處に不規則な一條の田舎路（西部愛耳蘭では規則正しい路は無いさうで）がうね／＼とのたくつて何時か地平線中に失はれて仕舞ふ、嫌な茶褐色の沼や澤が一面に廣がつて、ターフが刈取られた場所の水溜には流石に空を飛ぶ雲の斷片が浮いて見える、こんな景色へ百姓の一人や二人顯はれても兎ても漫性的憂鬱を破る力が

あるものぢやありません、此處其處に見える石造の百姓家も人情美を景色に添へる力は無くて堪へ難い荒涼たる大な空氣に飲み込まれて仕舞ふ——まづかういふ景色が西部愛耳蘭のそれであるさうです。この點をまづ第一に合點せぬとシングの劇は充分に了解されません。如何にも單調な力が一杯満ち満ちてしかもその單調を破る事が出來ず、感情を帆のやうに巻いて仕舞つて寂寞たる沈思の姿とでもいふことが出來る西部愛耳蘭の風景がやがては創作家シングの人格であると思ひます。シングの作を讀むと何程劇的本能が力強く活動して居る劇でも彼はわざと「劇的」といふ言葉に含まれて居る意味を避けよう避けようとする結果を示して居るのぢやありませんまいか。

エーツでもメスフキールドでも愛耳蘭人としてはシングと共通した素質に産れて居ると思ひます。彼等の感情は所謂表顯を否定しようとする如何にも充實した感情で其點の上で彼等は共に大きな痛切な叫びを持つて居る文學者だと思ひます。得られ無い友情を追ひ、得られ無い夢や愛を慕ふ、得られ無ければ得られ無い程ますます追ひ慕ふといふ點に彼等は根強い抒情的氣分を發揮して居る。彼等はエクセントリシチーで有りません。彼等は壯高で有りません。如何にも麗しい壯高な文藝家でありません。彼等は平和的であるけれどもそ



の爲め國家的愛郷心を失ふもので無い。其點でも彼等は力のあるものであるのを説明します。彼等の憤激は言葉の上で顯れない、彼等の言葉は廣く大きな孤獨の感念を暗示する沈思の言葉である。彼等は自分の郷土を人類的浮浪の斷片として歩まずに、實際郷土と合體してその一部となつて生きて居る所にその特徴を完全に示して居るのであります。以上は優秀な愛耳蘭文學者の何れにも適用することが出来るのだが、此處では私は單にシングのことだけに關して書きたいのであります。又シングに關しても單に近頃松村みね子女史が『いたづらもの』の表題のもとに公にされた *The Playboy of the Western World* のことだけに關係したいと思ひます。

シングの劇どれを見ても皆な雰圍氣の劇である、彼の雰圍氣は永久的に嚴肅な苦痛の雰圍氣で、愛耳蘭人特有の滑稽趣味の光を放散するに當つてもホルスタフのやうな大口開いた哄笑の一種で無く、又くすくす笑ふモリエル流の心の中の微笑でも無い。シングの滑稽は云はば考索的で情緒的で涙の滑稽であると云へばほど説明し盡きて居る。彼の作の大部分は悲劇的であるが、下らぬ作家のそのやうに生を切離してその斷片を示すもので無い。私が彼の劇を雰圍氣の劇であるといふ理由は劇中の筋は單にその空氣を眞實ならしめる爲

めの手段であるに止まると見なければならぬからであります。「いたづらもの」(これを *Playboy* の適譯と假定しまして) の親殺事件でも私はこの事件そのものを——松村氏の譯書に書かれた坪内先生の序文中に先生が重大視されて居るやうに——第一に見るのはシングのこの劇を正確に讀むもので無いと思ひます。シングはクリスタ、マホンの想像的ムードを動かす道具として殺人事件を應用したに過ぎませぬ。シングはこの劇を書いた時讀者がこの事件を見ずに全篇に漲る冒險的想像とでもいふべきシング一流の氣分を讀むのを希望したに相違あるまい。この劇は作家自身が最も充實した自分を表現したと批評されること出来る所のもので、事件の劇と見るのは徹底せぬ見方でどこまでも雰圍氣の劇と評價せねばなりません。劇中の事件は實際一道具に過ぎませぬ。

私が四年前倫敦へ行つた時シングの名前は聞いて居たがまだ詳細にはその作を讀んで居ませんでした。所が私の愛耳蘭の一女詩人の友人が一夕私に特にこの劇を讀んで呉れました。私の友人は愛耳蘭のアランからウキタロウに至る間に語られる言葉が天才の人シングの藝術の節を掛けるとどんなに響くかを私に知らしめる爲めであつたのです。成程言葉は愛耳蘭の田舎の住民が語る同じ言葉でもシングは異つた氣分と暗示を出して居ると思ひま



す。シングの序文中に「僕は愛耳蘭の田舎者が實際用ひない言葉は僅か一言葉か二言葉しか使はなかつた。」と書いて居ても、シングと同じ態度と目的で愛耳蘭の住民が同言語を喋るものとは全然思ふことが出来ません。シングは愛耳蘭の田舎者の言葉を土臺として自分の藝術を築いたと見るのが適當だらうと思ひます。愛耳蘭の田舎者の言葉に至つて音楽的と聞いて居りますが、シングの使つた言葉は空前絶後の諧調を極めて居る、そしてその諧調は單に素朴であるから全くモノトナスである——前に書いたやうに荒寥たる西部愛耳蘭の景色同様モノトナスである、又西部愛耳蘭の景色が個性の情を破裂させさうであるやうに、シングが使ふモノトナスな諧調の言語には内部精神の活動を自由に暗示して居る、その有様は丁度霧で蔽はれた山岳には水は無いとても澤山水氣が満ちて居るやうだと云ふことが出来ると思ひます。今私の友人のシング劇朗讀に歸りますが、聞いて居る間は言語の音楽的なのに疊感されて其意味を捕捉することが出来なかつた位でした。然しクリステがベギインに語る句に、「さびしいわけがお前に分るまい。日がくれて、灯が斜に射して居る小さい村を通る時、又知らない土地を歩いて先きの方で犬が鳴いたり後の方で犬が鳴いたりする時、市に着いて方方の溝のかけにも接吻の音や嬉しさうな戀の口説を聞きながら、か

らつぽのすきつばらに氣がめいるやうになつて自分だけ歩いて行く時どんなに寂しいものかお前には分かるまい（松村みね子女史譯）」とある場所を謹聴し乍ら私は非常に感激せられたのであります。私の感激は一面には個人的であつたので、思はず知らず私の二十一二歳の頃たつた獨り空腹を抱へて加州の田舎を彷徨した過去の經驗を想起したからでありました。それから私は私の友人の女詩人と藝術家としてシング特別の技巧の一は、言葉の麗はしい反覆にあるのを語りました。私はその點ではテニソンの技巧を思はせると言つて二三テニソンの例さへ出しました。たとへば

For ever climbing up the climbing wave (The Lotus-Eaters)

Then with that friendly-frendly smile of his (Herold)

Even to tipmost eance and topmost helm (The Last Tournament)

の如きであります。詩人が言葉の反覆を使用して一種の諧調を作るのは古來からの慣用手段であります。シングになるとそれが愛耳蘭の國民性に根柢を持つて居る丈け一段の強みを見せて居るのであります。

この劇「いたづらもの」には警句じみた異様の光を持つた言葉で満ちて居る。クリステ



が愛戀の雄辯を弄するとこんな句を吐散らすのである、「俺の戀が密獵人の戀だらうが伯爵さんの戀だらうが、そんなことはどうでもよかる、俺の両手がお前を抱いて、お前のつぼめた唇に俺が接吻を押しつける、そしたら、むかしも今も一人ぼつちで金の椅子に寂しく坐つてゐなざる神様をお氣の毒だと思ふかも知れねえ（みね子女史譯）」。「それからクリステがベギインに振られて仕舞ふとこんな句を吐く、「おら、いやだ。あの美しいのもくるしみの種だ、キイルの草つ原を南に向いて行つたら、夜中のお月様もあの人の顔が見たかる。俺はあの人の前に這ひすり出てあの燃えるやうな眼でこの心を焼きたいとは思はない（みね子女史譯）」。「如何にもシングは佳麗な句をロマंचツクに弄したものが、坪内博士の序文中に松村女史の翻譯を「大分上品過ぎ、氣が利き過ぎ」て居るとの言葉が有りますが、成程原文と比較すると上品過ぎるかも知れませんが、原文は何處までも氣が利いた情調を愛耳蘭の方言で盛りあげたものであります。方言本位で譯せよといつても然らば日本の何處の方言で譯すといふ意味なのだか不明瞭であるばかりか、それは全然不可能の仕事でありませう。故に私は今の所この松村女史の翻譯を得たのを愉快に思ひます。恐らくこれ以上の翻譯は將來に於ても得難からうとさへ思ひます。

いつも親から馬鹿者呼ばはり「ならず者」取扱ひを受けて居る所、腹だちまぎれに野良でおやぢをぶちのめて、自分では殺人罪を犯したものと早合點して恐怖の餘り逃亡した臆病者のクリステが、前に云つたやうに荒涼たる單調の自然に氣を腐らして居るベギインに遇つて、はからず自分自身を發見するに至つた。ベギインには世間の道德はない。ただもう饑ゑた自分の心を「びつくりさせることの出来る男」の力で満たしたいと思つたのである。この二人の男女の「自己の發見」といふのがこの劇の主要なる表現の目的である。この目的をシングは言語の上に於てのみ達したので有ません。この劇は最も巧妙なクラフトマンシップを示して居ります。外面的に顯はれた筋から強めて云へば「鬼息子」（坪内博士の所説）とも表題されませうが、

の翻譯としては止むなくんば松村女史の「いたづらもの」で満足すべきであらうと思ひます。

それから女史の翻譯書の附録の部第五の「黄ろい婦人」とは年を取つたむさくるしい婆のことδεせう。又第八の「The old hen」はおせつかいな汚い嫌はれ婆さんを意味して居やうと思ひます。以上二つとも普通に使はれて居るやうに思ひます。最後に私はこの譯書に向



つて松村女史の勞を謝します。中中結構に拜見しました。

## メスフキールド

作品の外面的特質がその作家の性質に對するインデツキスにならぬ文學者を今日の英文壇で求めるとジョン・メスフキールドを指定することに異存を誰も持つまい。どういふ文學的動機からか四五年このかた彼はこれ迄一般に詩人が取扱ふのを嫌つた題材を、つひぞ他の文學者が用ひたことの無つた亂暴な賤しい言語で語るやうになつたかはメスフキールドの外誰も不案内であらう。彼の作品の上に顯れて居る單に外面的特質を彼の全部と思ふものはないだらう。如何にも一寸見た所では彼は野蠻で病的な位だらしなない様に思はれるが、作家たる彼の偽らぬ性質も之れであるかと洞察すると左様でない。作家としての彼は一元的でないのが彼の弱點であるといふ説はたつのであるが、一面には彼は彼の作品以外に大きな興味ある暗示をたたへて居る有利な立ち場を持つことが出来るとも云へる。私は嘗て彼との初對面の印象を書いたことがあつた。その中で書いた所のものを今でも修正す



る必要を見ない。』彼の舉動に相應しい柔かな聲は彼は美の夢想者であるといふ印象を私に與へ、彼が所謂貧民窟の溝の醜惡を歌つても局外者として書いて居る。即ち若殿原が道樂に假裝して溝の臭氣に鼻をうごかしてほつと廻はるといふ形である。彼は長篇ゼ・エバラチング・メルシーでは如何に残忍の藝術を使用し得るかを學んだものだといった評家に私は賛成する。彼は清淨教を道徳的素質から出て來る藝術的純一性を自ら否定することが出來まい。彼の人格は飽迄纖美でその柔弱な點は婦人的であると云はねばならぬ。彼の作品上で残忍なのは、宛も可憐な女が時には蠻行の力を振つてごちやごちやした亂行を爆發させることが出來ると同じであると思はれる。』彼は文學的二元論を實行して居るといふと、近代人は彼を軽く見るに至るかも知れぬが、私は必ずしも左様とは思はぬ。藝術の表現は種々様で、或人はそれを心神顛倒の感嘆詞として取扱ふ。又或人はそれを以て人生の缺點とでも思はれるものを補充せしめようとする、又或人はそれを以て人生から逃れる道具に用ひる。此處に素質の全く異つた二人の作家があつて異つた方角から同じ動機を説明する場合もある。又異つた動機から不思議にも同方面へ進む場合もある。一人は人生の喜悅を物質的に表現しようとする、又一人は人生を嫌つて反對の側からその美を暗示しようとする。

る。所でメスフキールドは則ち其後者に屬する一人である、彼が書く下等社會の醜狀はやがては輝いた人生の方面を説かずに暗示する力を持つて居る、實際彼は詩人シェレー以來の特種の文學者で、美に對する憧憬の頗る印象的なるものを握つて生れたのである。

彼のことは私二三回斷片的に書いたことがある。又やや纏つたものとしては今年に入つてから松村みね子氏が三田文學に彼の忠臣藏と題してゼ・フェースフルといふものゝ第二幕を翻譯して居られる。私はひそかに何故日本の文壇が彼を評判せぬかを不思議に思つて居る。彼は強さうに見えて實際は詩人的に弱い文學者であつて、神祕的人生に對する自覺を持つて居る理想家である。然しその理想も彼の信仰が稀薄の爲め徹底せぬ。彼は常にその理想から逃れようと望み乍ら其誘惑に抵抗して依然として理想家と自ら思つて居るらしい所がある。故に彼は非常に興味ある作家であるに相違はないが、如何にも讀者には不満足な文學者であると云はねばならぬ。彼は人生を征服もせねば、さりとして又彼は人生の力で壓服されて居らぬ。其處が彼をして異大な人格の作家たらしめない所以である。何故彼は人生に打勝つことが出來ねば、彼は極點まで失敗をすることが出來ぬか。少し話は横路へそれるが敗亡を認めて降服のエクスタシーを歌つたヴェルアレースヌは文界の偉人で



あつた。この佛國の詩人は肉慾から敬神に走り又ぞろ敬神から肉慾へ逆戻りをした。然し彼は如何なる場合にも讚頌の感興を得ると身を捨身にして一元的權威を握ることが出来た。其處が彼の普通でなかつた證據である。彼は悔恨を縦飲して一生を詩の境地に投じたのである。所でメスフキールドは愛蘭士人であるが英語の修養を受けて性質が持つて居る道徳心に妨げられ理想に害せられて中性的態度を示して居る。これも彼としては萬止むを得無い所であらう。

今藝術といふ言葉を聊か外面的に考へてメスフキールドを観察して見ると、彼は随分氣高い文士で然かも目下生きて居る連中のうちで一番不完全な男である。彼の初期時代の作の方が近頃のものより、藝術として遙かに完成したものである。彼はその時代では重に彼の本能に響いた實際美を歌ふ範圍に自分を限つて居た。その作品の中には近頃のように無理もなければ徒に理智をして防害せしめて居らぬのが私をして愉快に感ぜしめる。彼が三代に發表した詩と云はず散文と云はず、いづれも寶石の美を空中高く懸る紅霓の色彩を持つて居た。彼が實際の經驗から書いた海上の繪畫（彼はコンラッドのやうに舟に乗つてケープホーン邊を徘徊した）は潮水の香氣や船縁を撃つ風雨の色合で満ちて、至つてローマ

ンスの深い霧で包まれたものだが、彼は段段明かな平面的美を透遍的に見たい希望が増して來て、一面には官能的特調を失つたと同時に理智に捕へられるやうに成つた。彼が初期時代の作品の新版を公にするに當つて序文を入れて其中にこんなことを云つて居る。「私も一度は若かつたといふ事實に對して何等辯解する必要はあるまいと思ふ。」勿論のことだ。こんな辯解をするのが彼の弱い證據で、皮肉に云へば、近頃彼は生き生きした感情を失つて理智的な文藝に捕はれた悲劇ともいふことが出来る。彼はウキリアム・シャープに書いたことがある。その中にこんな句があるさうである。「君が好んで読んで呉れた僕の文藝的感興は今や全く失つて仕舞つて、僕は二度君を喜ばすことが出来ぬだらうと思つて居る。」「群衆と孤獨」といふ書物の中に所謂藝術に厭いて病氣や罪惡のうちに現實を求める男の小話がある。それが彼の近頃態度である。然し元來が彼は理想家であつて見れば、彼が醜惡の描寫は相當に目的があるので、人生の醜い悪い方面を打破せねば美の光明に達することが出来ぬとさへ思つて居るらしい。しかるに彼は醜惡な現實だけで表面上満足して居るやうに見えるのみで、大きな深い哲學的背景が足らぬやうに思はれるのが遺憾である。理想家であり乍ら理想の方へ突進もせず、又最初は貴公子の道樂をして始めた現實曝露も充分つ



き込まぬ中に、淺薄な現實に征服せられて動きが取られぬ工合と見ねばならぬ。故に彼の作品（無邪氣で氣分一點張で書いた初期の作品を除いて）の大部分は云はゞ試験的の未成品と云はねばならぬ。

現實の醜惡は恐れてはならぬ。正堂堂とそれに向つて戦鬪の布告をせねばならぬといふ意見は正當であるが、内面只管りに美に憧憬して居る點から大矛盾を演じて彼の近頃の作を不純ならしめて居る。一言でいふと、彼の作品は不満足であるが、最も興味あるものである。然し單に人に興味を與へるのみではその作の大なる藝術とは云へぬ。藝術にしてその眞實で人を強ゐる所が無いやうではそれは失敗の藝術と云はれても辯護の句は有るまいと思ふ。メسفキールドは捨身で無い正直でない。「今日の街」でも又「ナンの悲劇」でも又「横町の寡婦」でも近くは彼の忠臣蔵でも等しく興味ある作品であるとは云へるが、正直な現實の悲劇とは云へない。キヤロスキユロといふ言葉がある。之は辭書では「濃淡な配合」と譯されて居る。詰り蔭と日向の配置で美術上の語であるが、メسفキールドの作品は則ち強みと弱みの混合であつて、その爲め文藝上の問題としてはこれに上越す興味あるものは英文壇では少いのである。

ヘンリーといふ一時は中中有名であつた詩人兼批評家がバイロンを崇拜する餘りに、バイロンの名句を擧げてテニスの降らぬ句と比較して後者を罵倒したことがあつた。成程詰らぬ句を残した點ではテニスはウオヅウオースやシエレーに劣つて居らぬ。然し不思議なことにテニスやウオヅウオースやシエレーの缺點は直に忘却せられて讀者の念頭に少しも残らぬ。これに反してロセチだ、彼は畫家としても又詩人としても缺點だらけの人であつた。所でロセチの弱點は永久に人の念頭に残つて人に同情心を持たせるといふ不思議な現象を作つた。そのロセチ同様、メسفキールドも皮肉にいふと彼の長所よりは弱點で利益をして居るともいふことが出来る。メسفキールドは文藝家としての弱點を鮮かなエフェクトを無視したやうな麗しい文字で平氣で綴つて居る。兎に角彼は一種の談話家である。その點はジョウジ・ムーアやバロウやトロロブにも比較されべきもので事實その儘小川の流れるやうに進めて行く、これまた文壇の珍とするに足ると思ふ。

最後に何故に彼は斯かる名聲を博するに至つたか彼は何の使命を英文壇に齎したか。彼が近代作家の新傾向をどういふ風に代表したのであるか。彼は在來の修辭を打破して單純で眞直な描寫を開いた、所謂平面描寫を英文壇で成功せしめた、歐洲文壇に比較して遙か



に後れて居て依然ロマンチックな夢に魘されて居た英文壇では彼の存在は極めて有意義なものである。彼自身には白状はせぬけれども、彼は英國で露西亞文學の影響を受けて少しもその影響を受けて居らぬやうな顔をして居る一人であると思ふ。

彼の作は中中多い。作品中にはミンチの追想録もあるし、又二冊の小品文集もある、又數種のクラシックへ書いた序文もある。ホーム、ユニバシティ、ライブラリーから沙翁劇評論の小冊子も公にして居る。この沙翁劇評論は中中有名なもので其筋の研究者は一讀の價値を認めべきものである。然し評論家としての彼はチェスタートン以上でない。

## モパッサン

數年前モパッサンの遺稿の斷篇が出版された。この稀れに見る不運の天才を稱賛する人は、其遺稿に對して一種悲哀の興味を感じました。出版者がその出版の動機はモパッサンの運命が招く病的好奇心——その好奇心が墓場の向ふまで彼を追掛けるのです——から利益を絞出さうといふのにあつて、その遺稿の編輯者はつべこべモパッサン研究者はこの本を逸してならぬ理由を並べて居るが、かういふ文學者の作品上の祕密は、自分の色女を愛するものは其女の化粧の方法をじろじろ眺めては居らぬものだと同様に、何となく餘り愉快なものぢや無い。藝術的動機はモパッサンの作品上主要な點で、彼としては大事な守本尊に相違なくどうして左様な動機を掴むに至つたかの経路を曝露するとなると、云はば彼に第二の死の苦痛を科するやうなもので、モパッサンの藝術的方法を知りたければ、人は彼が *Pierre et Jean* の中に書いた有名な序文だけで充分で、その本は彼がその全盛期に



書いたものだ。

英米ではモパッサンは不道德の小説を書くに敏捷な筆を以て産れた男で、個人的に實行した不行跡が不全麻痺の形でその判決を受けて、遂には不時の死を招いたと一般に考へて居る。勿論論駁の餘地はあらうけれども、後の方の非難は恐らくは本當であるかも知れぬ。然し遺傳といふこともある。人は祖先が犯した罪惡に對して止むを得ず決算して負債を仕拂つて居る場合も多い。モパッサンは婦人に關した範圍では道德家ではなかつたのは勿論だが、我々が彼に尊敬を拂ふのは、藝術家としての彼其人の上に懸つて居るので、一言で彼は猥褻な作家だと云つてのけようとする英米の惡評を笑つて、其れと常に闘はんとする覺悟を以て居る。よく英米の評壇ではキプリングを大作家であると呼んで、この大キプリングと誰れ彼を比較研究する。所で私はモパッサンをキプリングと等しく大小説家であると思つて居る。そりやキプリングは英國人である自然に多方面で健全であつた。然るにモパッサンとなると彼の作品の大部分は今云ふ墮落文學であるのを認めねばならぬ。されど其れは人類の記録乃至藝術の極致としての價値を少しも傷ふものでない。所謂遊蕩文學としては彼の作品中でも『ボールの色女』と題する小篇などは差詰め第一に指摘されるで

あらう、この小話の動機が人の道德觀を長縮すると同様に、描寫の方法も大膽な繪畫的明瞭を極めて、普通の遊戯文字でない點で、それをクラシツクの權威として尊重せねばならぬと感ぜしめる。藝術的良心といふ點から見ると、モパッサン位少くも私をして嚴肅に満足せしめる作家は英米の文壇にはないのである。前に云つた *Pierre et Jean* の序文中にこんなことを書いて居る。『種種な性質種種な天才の諸先生の後に産れて、何か爲すべく残つて居り、何か爲されなかつたか。何か云ふべく残つて居り、何か云はれて居らぬか。我我文學者の中で誰が果して一頁一句たりとも過去の文學中に發見せられぬ所のものを書いたと誇ることが出来ようか。』已に世間一班に知られた方法で公衆を喜ばせようと企てる男は、必竟愚かで怠惰な讀者に向ふ卑怯者である。文學の諸方面を秤つて見て、自分の理想が餘りに高いので如何なるものでも容易に満足せぬ。又どんな作品を讀んでも平凡で無益の勞働とのみ見える人であつて初めて、過去の所謂大文學者でも描くことが出来なかつた、即ち捕へる事の出来ぬ神祕なある物である所の純の純なる藝術を批判することが出来るのであります。であるから文學者たるものは永久不斷の努力で、打勝ちがたい藝術的失望と戦闘せねばならぬのである。



人も知る如くモパッサンは七年の年期をフロウベル先生に入れた男だ。七年の年期！トルストイやハーデー或はツルゲネフを半知半解で字引頼りに讀んだからとて文學者にならぬのは無論のことである。フロウベル先生最初の會見の時、モパッサンに云つたさうである。「君に才能があるか無いかは僕は知らぬ。多少の理解力が有るやうに見える。だがブフォンに従ふと天才なるものは長い忍耐たるに止るといふ一事を忘れ給ふな。」「ボバリー夫人」の著者からモパッサンは藝術的信念と實行の厳格な規律を習つたのである。モパッサンはかう云つて居る「云ひたいと思ふことがどんなことでも、それを表現する句はたつた一ツで、それを生動せしめる動詞はたつた一ツである。それを限定する形容詞はたつた一ツである。そして人はそのたつた一ツの句、たつた一ツの動詞、又たつた一ツの形容詞を求めねばならぬ。その他のものでは満足しては駄目だ、又その困難を避けようとして文字の詭計戲謔に依頼してはならぬ。」

以上の規律を眞面目に守つたので、モパッサンは先生以上の藝術家に成つた。彼は短篇小説界無敵の達人で、英米文壇でポーとキプリング兩人を除くと、彼に比較されるものは一人も無く、ポーでもキプリングでも藝術的品性の上では彼に遙かに劣つて居る。彼が前

記兩人に勝つて居るのは唯字句の巧妙な點ばかりでなく、種々な發明力と讀者と一所に印象を分たしめる一種異常の力を持つて居たからである。ポーも怖ろしい感情を文字の上で熱心に培養したもので、まづ其成功を *Cask of Amontillado* 一篇に證明して居るが、念頭にモパッサンが浮んで來ると、若し彼が此小話を取扱つたなら、どんな工合に描寫するだらうかと思ふのである。ポーの傑作に見るやうな所謂劇的ではないが、藝術の味の上ではモパッサンはポー以上である。今モパッサンの作中で、最も人を信服せしめる幽靈談、精神的罪惡の心理研究、正眞でしかも詩的な官能主義、巴里人の人情を描寫した點でバルザックに比敵すべき皮肉で謹直な動機の解剖等に對する代表作を選むのは至つて容易な仕事だが此處ではそれを致さぬ。ポーであつたなら純な藝術的衝動を缺いた爲め、作品の繪畫的統一を缺いた場合が多いのであらうと思ふことがモパッサンを読んで居ると屢々有ります。

諷笑的賤陋主義で最も色彩の厚濃な「ベルアミ」に至つては人は是非共讀まねばならず又讀んではならぬ天下の奇書と云はねばならぬ。「ベルアミ」の小説で如何に主人公が微笑を湛へて放蕩三昧をするかを讀むと痰を吐掛けたくもなるし、又胸もすくやうな感じもす



る。如何にも女色の道の達人であると云はねばならぬ。彼は一種の魔力を持つて居て、右を向いても左を向いても女を征服し、又その女を隨所隨時に弊履のやうに捨てたが、女は捨てられると益々彼の後を追つた。彼が一廉の修徳を納めた女や、街上の淫賣種種の階級の女を前後に撫切りにして、一成功から他の成功へと鳥の枝を渡るやうに飛移つて、女に對する普通の道徳を横に不氣で堂堂と活歩した一大勇者であつたのです。モパッサンが我に提供した人生は、恐るべく又疑惑的なものであつて、兎に角特種な興味を涌かす所のものである。彼位我を痛切に感動せしめる文學者は少いので、彼の文學を完成せしめるに至つた彼の個人性を研究する興味を此處に湧かせるのである。彼は藝術を培養せんが爲め生きた人生の血を以つてしたので、詰り彼は高い貴い犠牲を拂つて初めて彼の藝術を得たのである。それも最も論理上自然な道行であるが、百人の中で一人か二人の文學者が僅に歩くことが出来る、自然ではあるが一番大膽な道行と云はねばならぬ。トルストイはモパッサンを近代佛蘭西の小説家中最も力の強い作家と云はねばならぬと書いて居る。所でトルストイとモパッサンは藝術家としての素質の上は激烈に相違はあるが、両者が共に選んだ表現の方法の上では少からぬ類似の點を發見することが出来ると思ふ。若し後者が前

者のやうに長生きして完全な生熟期に達することが出来たなら、恐らく人生をもつと健全に見て彼の幻想も混亂を免れたことであらう。彼はトルストイでいふとクレツァー・ソナタの情調を掴んだ時に死なねばならなかつたのである。故に今は作品上から見ると是等露國と佛國との二文學者は、同時に語ることが出来ぬ結果を示すに至つた譯であらう。

モパッサンの作品は大きな書物で二十五巻もあり、英譯として顯はれて居るもの冊數も少くない。佛蘭西では英米のやうに初期の徒弟時代の作品を出版せぬ習慣があるから、是等公になつて居る作品以外にモパッサンは何程の作をなしたか豫想が付かぬのである。

普通からいふと藝術家の罪惡は誇張され易い。特にモパッサンは佛蘭西人であつて見れば、彼の罪惡を人が誇張するのも無理はない。彼は昔て「僕の罪惡は女の上に懸つて居る」と云つたことがある。如何なる道學者でも彼が遺した二十五巻の書物と彼の若死との二條件を考へたならば、彼をさう冷酷に非難し去ることは出来まい。



## エーツと能

且君、僕がエーツは近頃恐ろしく變節して仕舞つたといつたなら君は僕が何を意味するかを疑ふであらう。僕が變節の二字を彼に與へる理由は、彼が公然民衆藝術（隨分と長い年月の間彼は愛耳蘭人の眞の自覺は民衆藝術の復活に依らねばならぬと思つて居た）から貴族的藝術に鞍替へしたからである。彼が今年五十二、日本流に數へると五十三歳になつてこれまでの努力は全く失敗に歸したと白狀する悲痛な言葉を讀むと一掬の涙無きを得ない。端から見ると、彼は英語の存在せられん限り生命を失はんであらうと思はれる抒情詩數篇（例を挙げると“*The Lake Isle of Innisfree*”や“*When you are Old*”）を書いて居る又彼が最も重なる關係者であるダブリンのアペー座の過去十五年間の歴史は英國の如何なる劇場より更に價值ある劇を出演したのを誇つて居る。更に又詩人としての彼の偉大な名聲は遠き東海の日本迄轟いて居る——かういふ實際があるのでエーツ自身は近代の成功した

大文學者であると自ら満足の微笑を湛へて居ると思はざるを無い。且君、君はきつとさう思つて居たに相違ない。また君ばかりで無い一般日本のエーツ愛讀者はさう思つて居たのであらう。然しエーツは愛耳蘭人だ。愛耳蘭人に不平は無くてならぬ附物だ。不平の氣分が缺けた愛耳蘭人は丁度香氣の抜けた珈琲同様である。してエーツは不平家である。

且君、君は不平が理想と同じ屋根裏に住んだ場合の悲劇を想像することが出来よう。然り詩人エーツは不平家であると同時に妥協の何物たるを知らぬ看板付きの理想家である。彼の藝術心が燃える不満足の火焰を松明として益々不安と疑惑の方へ方へと辿つて行く有様を想像するに難くない。然し彼は今日依然の民衆藝術を切捨てて多少の小康を得たやうにも思はれる。して彼は今度一味するに至つた貴族的藝術に果して心の満足を得ることが出来るだらうか。それは將來の問題だ。僕は豫言者で無いから彼の將來は語りたくない。が僕は重ねていふが彼は愛耳蘭人である。——即ち不平家である理想家である。彼が民衆藝術を主張しそれに向つて長い間熱心な努力を傾注した歴史は少くとも彼の矛盾を説明するに充分である。然し愛耳蘭人は矛盾の人間である。してエーツも藝術的に矛盾であつた。彼が最初民衆藝術を主張した時一刀兩斷彼の理想を處置することを忘れたが爲め、愛耳蘭



一般の民衆は彼から何物も學ぶことが出来無かつた。又彼はその民衆の無智と無同情と冷酷を眩くに至つた。今日彼は彼が長い年月の間愛撫し保護し其生長を祈つて居た愛耳蘭の民衆から離れざるを得無い運命に立つて居る。理想を捨てずに民衆藝術に参加したのがそもその間違であつたとすると、彼が今日貴族で藝術に走るに至つたのに何等の不思議は無いといふことが出来る。彼は生れながらの貴族的文學者であつた。彼の民衆藝術は一種の焼付け仕事に過ぎなかつた。無理に不自然にくつ附けた物はいつか剝げて木地が顯はれる。エーツの今日は生來の貴族的木地が出て來た迄である。

且君随分、日本でも所謂愛耳蘭の文藝運動のことが文學雜誌などに書かれて居るやうに思ふが、僕はそれを書いた人人が實際どんな理解を以て居るかを知ら無い。僕一個の意見では、この『文藝運動』位非愛耳蘭的なものは無いと信じて居る。アルス言語（愛耳蘭と蘇格蘭のケルト族の元來の國語）を復活しようとする計畫が流産して仕舞つて、英語文學に降参したといふ事實をどうしても拭ふことが出来ぬとすると、この『愛耳蘭の文藝運動』は本國それ自身に對するものとしてよりは他の外國に向つての主張と受取らねばならぬ譯になつて居る。然りエーツ一派の事業は實際さうであつた。又彼等は愛耳蘭の民衆藝術を

復活するのを目的として居たに相違ないが、表現するに使つた文字を英語に據つたやうに精神的に外國の文藝から種々なコントリビュションを受けて居る。彼等殊にエーツは印度の古い神祕主義や佛蘭西の寫實主義や英國の幻想主義（またある人に云はせると日本の表象主義？も取入れて居る）で彼等の表現の手法上に新鮮の生命を與へようとした。彼等の歌ひ語り論じて居る愛耳蘭の傳説は従つて純な單一なもので無く多くの場合に於ては不思議にもコスモポリタンなものとして顯はれるに至つたのは自然である。故に彼等の文藝運動（これは佛蘭西の表象派運動と共に近代文藝上の大運動として勿論尊敬すべきものに相違ないが）は纏つた何等の結果を産まなかつた。大分影響を與へる暗示はあるけれども其處に顯はれた功蹟は認められ無い。特にエーツに於てはマラルメやメタリックまつた英國のウイリアム・ブレイキの是認を強むることが出来るけれども、僕は何處まで彼の力で愛耳蘭の固有の文藝が復活したかを知ることが出来ぬ。マラルメは貴族的である。して又多くの意味に於てブレイキも貴族的と云はねばならぬ。是等の影響で生長したエーツが貴族的であるのは少しも不思議でない。

且君、考へて見るとエーツ一派の『愛耳蘭文藝運動』は一般的にいふと決して愛耳蘭人



の性質を代表したもので無かつたと僕は思つて居る。彼等の文字に書きたてた所謂セルチックの薄明的情調は一般の愛耳蘭人を貫く重な特質ではあるまいと信じて居る。又ある部分の實際的な愛耳蘭人は斯る文藝的な情調の力説は彼等の政事的意見の主張を大に邪魔するものと考へてゐたに相違ないと僕は思つて居る。一般の愛耳蘭人は「愛耳蘭文藝運動」を否定する性質を供へて居る。即ち彼等は極めて實行的で明瞭な頭腦の人間であることは、加奈太や北米合衆國の政界が彼等の計畫で組織せられて居り、又現に世界の大鐵道會社であるカナデアン・パシフィック・レイルウエーの建設者はショウ・ネシーといふ愛耳蘭人であるのを見ても知れる。然らばエーツ一派の薄明的セルチックの情調は愛耳蘭人に無關係であるかといふに、勿論僕はそれを固執する程無茶な批評家でない。僕はセルチック情調は必ずしも愛耳蘭人にもみ附屬したもので無く世界何處の人間でもその人が詩的想像に豊かであれば誰も持て居ると主張したレナンの説に賛成するものである。故にエーツ一派の書きたてた文藝的情調は人間のある種の階級に存在して居るものだけといふ理由で僕は夫れが愛耳蘭人の特質の一であると云へると思ふ。言ひかへるとエーツ一派の文藝運動は實際の意味では世界的文藝運動であつたと僕は思つて居る。であるからそれに依つて愛耳蘭の民衆を

壯健な自覺に誘導しようとして失敗に終つたといつても少しも不思議はないといふ譯になる。然り彼等の文藝運動は直接愛耳蘭に關係が無かつた。今更エーツが多年の努力が無効に終つたのを悲嘆するのは聊か無定見の誹を免れないと思ふ。且君、君はどう思ふ。エーツが民衆藝術を見限つて貴族的藝術を主張するに至つたのは本來の眞の木地に歸つたものだ。してどういふ経路でさういふ譯になつたかを彼に語らせよう。彼自身に書いて居る所に依ると、まづかうだ――

「二年前に私は倫敦のコート座で私の劇 *The King's Threshold* を眺めたことがあつた。私の坐つて居た座席の前に夫婦のものとその友人と思はれる婦人都合三人が坐つて居た。亭主の方は欠伸したり背のびしたり又身體をもちもぢさせたりして劇に惱まされて見えた。私は夥しく癢に障つたがちつと堪へた。すると舞臺に赤い著物を付けた小い姫君數名が顯はれる時に成つた。連の友人の婦人は「中中藝がうまい」と云つた、して多少注意深くなるやうに見えた。兎に角この赤い著物を圖案した秀でた畫家はこの婦人に興味を與へるに至つた譯であつた。一幕が終ると女房の方は「これですもの見ずに居られないぢアありませんか」と言つた。恐らくこの女は私の詩の愛讀者であつて無理鎗二人のものを劇場



へ連れこんだものかも知れ無かつた。實際それに相違無かつたでせう。だが私は自身の劇のことを考へると此私の劇に熱心な女や又赤い著物を附けた女優の藝をうまいと思つた女のこと胸に浮ばずに、いつも私の劇にひどく惱まされた男の方のことが忘れられないのです。エーツはこんな自分の経験談を語りだした。所で彼は自分に同情の無い見物人でも澤山呼込まなければ俳優には勿論裁縫の女にも又劇場の所有者にも一文の支拂が出来ぬといふ苦痛がある。それなら全然作家として起つのを中止して仕舞つてはどうかといふに、彼は自分は劇作家を以て任じて居るとさうは出来ぬ。して又彼は理想家として理知の賢明と同情の清澄とを持つた見物人を集めたいと希望する。彼はそもそも一般の公衆にぶつかつて其了解を買はうとしたのが失策であつたと觀念するに至つた。「私の劇場は屏風か衝立を以て壁に替へた昔の劇場で無くてはならぬとなぜすつとの以前に氣が附かなかつたか。私一流の詩に注意する人の數も可なりあつて、之れ等の人人を一所に蒐めることが出来るならば多分芝居道具を一臺の馬車に積んで來ることが出来又その芝居も都合のよい特に演ずることとする頗る簡単な興行に關係する役者の五六人位には相當の報酬を拂ふことが出来ようと思はれる。」エーツがそこで氣が附いたのは日本の能であつて能の方法を

採用する段に成ると澤山の俳優も無用である又背景や舞臺道具も無くて済むので彼は今日この貴族的な日本の能をモデルとして一二の作を發表した。してそれを已に見物人を限つて實際に見せた。

且君、君はどうして彼が日本の能の智識を得たかと疑ふであらう。彼はフェノロサの遺稿としてつい近頃重視された能の翻譯に依つてその大部分の了解を得たと彼自身書いて居る。勿論彼に完全な能の理解が無いのは知れて居るし、又それを彼は必ずしも必要とはせぬ。彼はただ能から暗示を得たのを以て足れりとして居るに相違無い。彼が公にした最初の能劇は「At the Hawk's Well」と題して居る。昨年四月初めてそれを彼の友人の應接間で演じて以來一二回に亘つて他の場所で遣つた。彼はその結果に至極満足して居ると僕は英國からの手紙で承知して居る。エーツが日本の能を採用したといふ事實から今日英國に能といふ言葉が一般智識階級に知れ渡つて來たやうに思はれる。僕は近頃倫敦の詩の雑誌ポエトリー・レビューの依頼で能を三四篇英譯して送つたが、掲載濟となつて居る。

且君、此文が餘り長くなつては退屈だから、次回を期して僕は君にエーツの「At the Hawk's Well」のことを語るとしよう。左様なら。



## 外國に於ける能の研究

西洋人は能を見ても到底位とか緩急とか乃至は序破急とか稱せられて居るその演出上の態度に懸る韻律の妙味は分るまい。(僕も明確には分らない唯もう漠然と微妙に愉快な心持に動かさる位の程度の観客に過ぎない。)所で僕は偶々外國人と一緒に能を見物してもその説明には窮するのである。よしんば外國人で日本の文學に通じても數多き謡曲の詞藻を了解し得るものは殆ど有るまい。我々今日の日本人で古文學に餘り同情を持たぬ連中は、謡曲の文字は穩健で優雅である位は無難に云へるがそれ以上になると何を意味する諷誦なのだか更に分らぬ場合が多い。如何なる英文學者でも熊野なり松風なりを出されてその原文通りに譯し得ることは不可能と云ふに至當と思ふ。この難解であり翻譯の不可能な謡曲が時々英語の衣裳を着て英文界に近頃ちよいちよい顯はれて來た。原文と照合して讀んだことが無いから其出來榮如何は斷言されぬが數年前に英國の婦人マリー・ストープスなる

人が某日本人と一緒に數番の謡曲を英譯して居る。この本で變に思はれることは、僕は文學に餘り興味を持つて居られないと承知して居る今日憲政會の總理加藤高明氏が何とか序文めいたものを書いて居ることだ。或は自分で書いたものでないかも知れぬが随分お門違ひのことを無遠慮にも遣つたものだ。加藤氏にこんな役目をさせる位の翻譯者だから餘り嚴肅な批評に堪へぬものであらうと思はれる。最近では故フェノロサ氏の英譯遺稿(平田氏に負ふ所があると書いてあるが平田氏と云へば鈴木君のことであらう)を土臺として、僕の知人で随分無鐵砲で獨斷的な青年詩人のパウンドといふ男が、實際能の如何なるものかを見ずに、能の筋書を英文界に盛んに吹聴して廻つて居る。パウンドは謡曲(彼は總轄的に能の一字で凡てを蔽つて居る)は「疑ひ無く世界大藝術の一つで、恐らく最も美妙を極めたものと云へるだらう」と絶叫して居る。勿論彼は、能藝術の根柢は諷言暗示にあるのだから外國人に完全には分らぬと御斷りを一言して居るが、了解される範圍に於ていつても、彼は能を以て最も驚く可く最も稱賛に價するものと絶叫して居る。それで謡曲文學は「諸君が音樂を聴くやうに始終讀んで初めて」明瞭に成つて來るものと中々きいた風なことを云つて居る。——劇を想像力で讀むことの出來る外國人ならば、翻譯が不完全で又



如何にも曲そのものが断片的に見ても、想像の力で能なるものは如何に西洋の劇と異なつた藝術的價值を持つて居るかを知ることには易々たることであると書いて居る。彼は能はどんなに詩人エーツやゴルドン・クレীগを喜ばせたらうとも書いて居る。斯ういふ言葉は實際として日本人もパウンドを是認せねばならぬと思ふ。

フェノロサ氏の遺稿中に、梅若實氏が明治卅三年二月に出した番組の前に書いて居る文章の英譯(これを讀むと何でも梅若家先祖の四百五十回忌の能の番組と思はれて最後に「出演者の頭は梅若四十五代目の梅若六郎で、梅若萬三郎がその補佐である」と書いてある)や大和田建樹氏の説を引いて番組の講釋を詳しく書いたものなどが含まれて居る。この番組の組合方即ち高砂老松などの神能、田村八島忠度敦盛などで幽霊が出て合戦の昔語をする所謂修羅物、上品優美な女のシテの出る鬘物と鞍馬天狗や是界などといふ天狗物或は安達原野守の類で、鬼を取扱つたもの共を集めて一日の番組の製作法に西洋人は非常に感心して居ると見える。西洋人は種々な曲目數番を一緒に集めて全體の上で人生の意義を暗示し或は表象するのであると解釋して居る。番組の組合方も元來はさういふ意味から出たものであらうけれども、西洋人が無理にも深い意義ならしめようとする程重大なものと思は

れぬ。唯所謂取合せに過ぎぬとも云へば云へるのである。パウンドは書いて居る、「五六番順序を立てた能の演出は完全な人生の役務を表現して居る、ハムレットにする様な劇として吾人に提供し又解拆せんとするシチュエーションも無ければ問題も含まれて居らぬ。能の役務は人生と靈魂循環の完全な圖式を示し或は表象するにある。」能は一箇獨立の製品としては不完全な場合でも、一日の番組の一員として立派にその役を務めるといふ所に重大な藝術的價值があると見るのである。このことは僕一箇の意見からいふと、如何にも親切な同情のある見方ではあるが断片は何處までも断片であり不完全は何處まで行つても不完全たるに過ぎない、謡曲の總番數何程あるかは知らぬが其中立派な二十番も抜いたならば其餘の曲目は至つて詰らぬものばかりであらうと思ふ。更に談話を進めて如何なる曲が西洋人の注意を曳くかといふに、彼等は鉢木七騎落安宅夜討曾我望月等といふ現在物に興味を持つて居るより寧ろ上品優美な幽霊物を世界の藝術界に出して稱賛を博するに足ると思つて居る。戦争の談話に對して西洋人はさう注意を拂はない。宗教道義の説教に對しても大きな興味を持たない。彼等が能に多少履きちがえた了解をして居るやうに思はれるけれども兎に角興味を持つて居るのは所謂幽霊の出沒する所であつて、それに自己流の



心理的了解を附加して居るのである——此ゴスト・サイコロジーが面白いとするのである。

須磨源氏は藤原興範なる日向の國宮崎の神官が攝州須磨の浦で老樵夫に遇ふ、この老樵夫が例に依つて後に光源氏の靈と顯はれ下界の月を眺めに降つて、青海波の樂に連れて舞ふと笙笛琴箏篋の響一層妙に聞えて佛菩薩の來現も此くやと思はれたといふので至つて劇的動作の少い者である。パウンドは西洋の藝術は力説の藝術だが日本の能は無力説の藝術で其藝が非常に面白い、又須磨源氏には幽靈の出現を待つ間に一種のサスペンスを感じるを書いて居る。夢幻の中に過去の美の顯れを實感したいと思はぬ非藝術的な人にはこのサスペンスの心理状態は了解されぬ。然し之れを感じずると感じないとが藝術的の細巧と粗野とが分る所であると思つて居る。詩人エーツなども細巧な藝術家の一人で、パウンドは千九百十四年から十五年へ懸けてエーツがグレゴリー夫人の愛蘭土の田舎で集めた傳説を穩密學者の論料と相對的研究に熱中して居たのを側に居て見たと云つて居る。勿論能はエーツの愛し且つ知らんと欲する所のものであるのを疑はないのである。僕はまだ本を見ないけれども、フェノロサの能の英譯數篇を集めて題して「サム・ノーブル・ブリーズ」といふ本にエーツが序文を書いたと聞いて居る。これも恐らくタゴールのキタンチャリの序文同様に

エーツ自身の興味ある一家言に過ぎまいとは思ふが、エーツの眼を通ると能がどんな風に見えるかを知るには愉快な讀物だらうと思ふのである。

葵上と題する一曲がある。名前は然うなつて居るが實際に於て葵上は登場するのではない。光源氏の北の方葵上が六條御息所の怨靈に苦められる即ち女の嫉妬のドラマチゼーションが全篇の骨子である。たゞ見る舞臺の前の方にふわりと長ぶりに置かれた赤い古錦襦の著物一枚——これで葵上の所謂御物の氣に取りつかれた恐怖が代表されて居ると想像せねばならぬのである。表面上この劇の外部に顯はれて居る動作では六條御息所の生靈と後には「きら／＼と金色の巨眼を光らして二本の大きな角を生やした」般若、それに添へるに照日の神子といふ巫女と横川の小型なる山伏を以てして居るに止まつて居る。この行者が劇が段々最後に近づいて般若が顯はれる時に「役の行者の跡を繼ぎ、胎金兩部の峰を分け、七寶の露を拂ひし篠懸に、不淨を隔つる忍辱の袈裟赤木の珠數のいらたかをさらりさらりと押しもんで」曇莫三曼陀縛日羅赦を誦すると、さしもの怨靈も法力には敵ひ難く又陀羅尼の功力で悪心も次第に和いで念珠に打伏せられ一念を翻し此後再び來ることはあるまじと誓つて退散して仕舞ふのである。折角最初に暗示し且つ面白く發展して來た所謂



曠志の烟といふ心理的興味も、曲が進むに従つて薄らいで来て、仕舞には謡曲の多くのものと同様に鑿型に入れられて原文に依ると「讀誦の聲を聞く時は、惡鬼心を和げ、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もここに來迎す、成佛得脱の身となり行くぞ有難き」と終結して至つて詰らぬ最後を示すのであると。パウンドは葵上の英譯（この英譯は極めて粗雑なものだが）に對して批評を附加して居る。近代眼に照らすと大部分の幽霊もさう我々を満足せしめる程のもので無い。實際我々も、何故に斯くも安價に急激に樂樂と「枕に立てる破れ車打ち乗せ隠れ行かうよ打ち乗せ隠れ行かうよ」と狂ふ六條御息所が陀羅尼の「功力で打伏せられねばならぬかは了解が出来兼ねる次第である。その點で不満足なのは必ずしも外國人ばかりで無く我我今日の日本人も等しく感ずる所であると思ふ。

パウンドは、イブセンは「人生は心の幻想と現實との争闘である」と書いて居るがイブセンより數世紀もずつと以前に日本に謡曲葵上があると喜んで居る。——又葵上の心の幻想は則ち六條御息所となつて劇中に顯はれて居るが詳細に觀察して來ると他の能劇同様に曖昧を極めて居ると殘念がつて居る。何處まで舞臺へ顯はれる「六條御息所」は葵上の幻想の具體化したもので又何處まで實際の六條御息所の人格であるかは明瞭でない。又第二

に外國人の心を迷はせるのはパウンドの書いて居る所に従ふと、二箇の靈即ち最初に六條御息所の生靈として顯はれたものと後になつて忿怒の般若との關係である。西洋人には見ても般若其物が靈的人格を盛つたもので靈魂の力が體魂したものだと思ふのは困難であると云つて居る。——六條御息所の生靈も實際に於て般若と異つたもので無い葵上に對する怨靈の表現と見るのは六か敷いと書いて居る。

僕自身も謡曲の翻譯を不出來乍ら十篇ばかり試みた。不日西洋の文壇に出して見たいと近頃考へて居る。